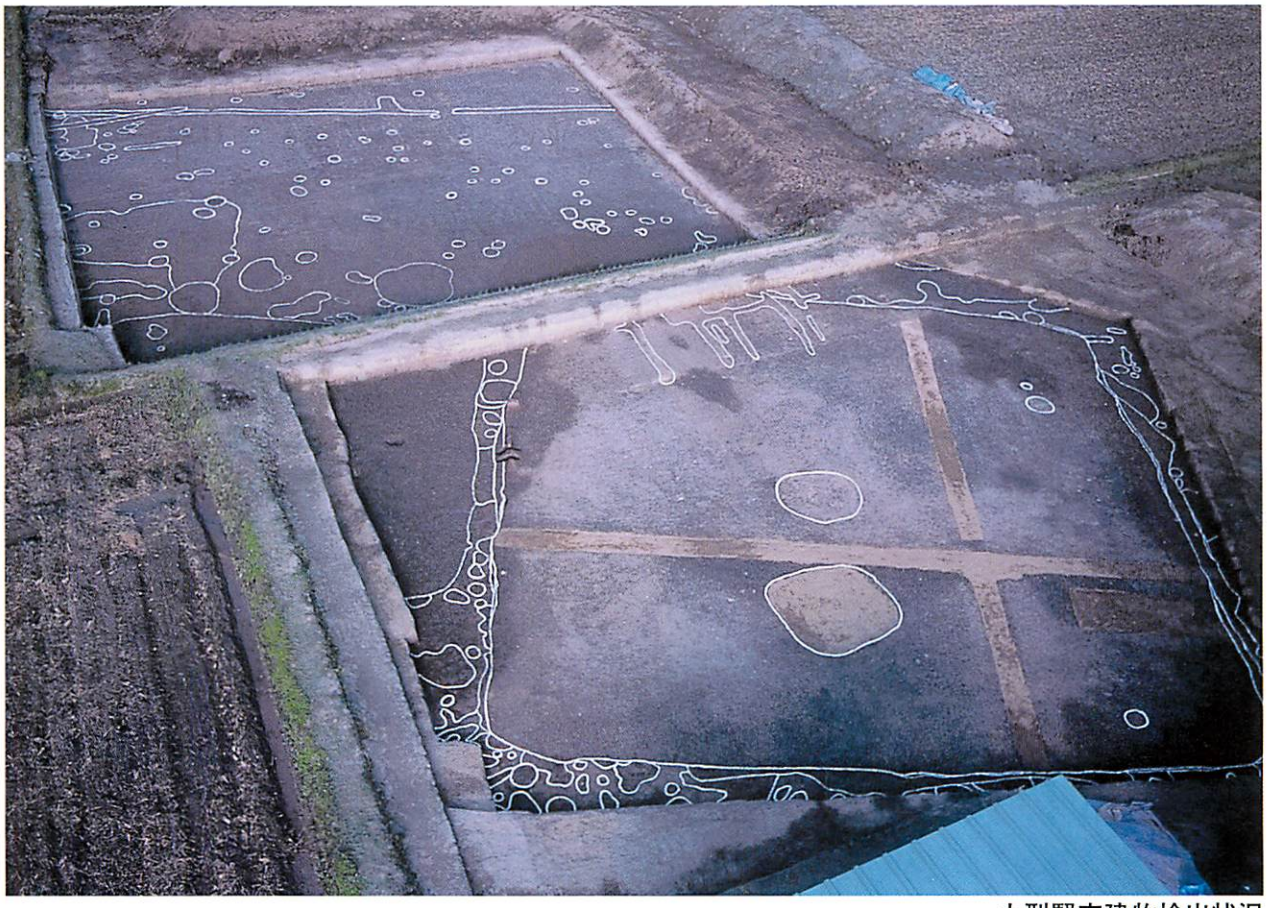
伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ

守山市文化財調査報告書

平成20年(2008)３月

滋賀県守山市教育委員会



大型竪穴建物検出状況

SB－12検出状況

大型竪穴建物焼壁材検出状況

大型竪穴建物焼床検出状況

序　　文

琵琶湖を抱える近江は、古来より深く水と係わってきた地域であったと言えます。近江は都から見て近い淡水の湖という意味で「近つ淡海」とも呼ばれていました。琵琶湖を利用して船で東西の物資を大量に運搬していた他、都の建設にあたっても材木を琵琶湖から瀬田川を下って運んでいたことがわかっています。遺跡から出土する漁具からみても、琵琶湖や湖に注ぐ河川で魚介類を捕って暮らしていたことが容易に想像されます。現代においても、琵琶湖の水は滋賀県だけではなく、近畿圏の千三百万人の生活水源として、重要な役割を担っています。

伊勢遺跡は弥生後期の大規模な集落遺跡であり、国の中心部の構造がわかる遺跡として全国的にも注目されています。伊勢遺跡が発達する弥生時代後期は、日本海沿岸の山陰や丹後、北陸地域で大規模な遺跡が発達し、鉄器や青銅器が盛んに流通していたことがわかっています。東西日本の結節点として近江が重要な役割を担っていたこの時代、伊勢遺跡は近江南部の中心として機能していたと考えられます。

伊勢遺跡が国の成立を探る重要な遺跡と考えられることから、守山市ではその保存を図るため確認調査を実施してきました。本書はその成果をまとめたものであります。

最後になりましたが、伊勢遺跡の調査に携わって頂いた方々、協力頂いた地権者並びに地元の方々にお礼申し上げるとともに、今後とも本市の文化財保護行政に御理解・協力頂きますようお願いいたします。

平成20年３月

守山市教育委員会

教育長　山川　芳志郎

例　　言

1．本書は、平成13・14年度に実施した伊勢遺跡の範囲確認調査報告書である。調査は国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。整理業務は平成19年度国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。

2．本調査は、守山市阿村町字下大洲166-1番地他の水田地で行った。

3．本調査は、守山市教育委員会が実施した。

4．確認調査は平成13年９月５日から平成15年３月15日の期間で現地調査を実施した。なお、調査整理業務は平成19年４月17日より平成20年３月31日まで実施した。

5．発掘調査・整理調査業務にかかる教育委員会事務局は以下の体制で実施した。

平成13年度確認調査		平成14年度確認調査		平成19年度整理調査	
教育長	川端　弘	教育長	川端　弘	教育長	山川芳志郎
教育部長	山中憲三	教育部長	山中憲三	教育部長	井上 純作
教育次長	西田　実	教育次長	西田　実	教育次長	田中良信
文化財担当課長	山崎秀二	文化財担当課長	山崎秀二	文化財保護課長	山崎秀二
調査担当者	伴野幸一	調査担当者	伴野幸一	調査担当者	伴野幸一

7．発掘調査・整理業務及び本報告書作成については伴野が担当した。

8．本報告書では標高は東京湾ポイントを使用し北方位は日本平面国家座標六系のＸ座標を指す。

9．本調査にかかる遺物・図面・写真資料は、市立埋蔵文化財センターに保管している。

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ

目次

序　文

例　言

目　次

挿図目次

図版目次

第１章　確認調査に至る経緯と伊勢遺跡の歴史的環境 …… 1
　第１節　確認調査に至る経緯 …… 1
　第２節　伊勢遺跡の歴史的環境 …… 1
　第３節　伊勢遺跡既往調査 …… 4

第２章　伊勢遺跡の調査成果 …… 8
　第１節　第74次調査の成果 …… 8
　第２節　第80次調査の成果 …… 20
　第３節　第81次調査の成果 …… 23

第３章　まとめ …… 35

挿　図　目　次

挿図１　野洲川流域の遺跡分布図
挿図２　伊勢遺跡全体図
挿図３　伊勢遺跡74次調査位置図
挿図４　伊勢遺跡74次調査全体図
挿図５　Ｔ－１　ＳＨ－１平面図・断面図
挿図６　ＳＨ－１南隅床面検出状況
挿図７　ＳＨ－１北西辺床面検出状況
挿図８　Ｔ－１　ＳＢ－９検出状況
挿図９　伊勢遺跡74次調査Ｔ－２・３平面図
挿図10　伊勢遺跡74次調査Ｔ－２平面図
挿図11　伊勢遺跡74次調査ＳＢ－２平面図・断面図
挿図12　伊勢遺跡74次調査Ｔ－３平面図
挿図13　伊勢遺跡74次調査出土遺物実測図
挿図14　伊勢遺跡74次調査出土遺物実測図
挿図15　伊勢遺跡80次調査位置図
挿図16　伊勢遺跡80次調査平面図・断面図
挿図17　伊勢遺跡80・81次調査平面図
挿図18　伊勢遺跡81次調査SH-1平面図・断面図
挿図19　ＳＨ－１　ＳＴ－１床面検出状況
挿図20　ＳＨ－１　ＳＴ－２・３床面検出状況
挿図21　ＳＨ－１　ＳＴ－４・５床面検出状況
挿図22　伊勢遺跡80・81次調査全体図
挿図23　ＳＨ－２・３検出状況
挿図24　伊勢遺跡81次調査出土遺物
挿図25　伊勢遺跡大型竪穴建物出土焼床材実測図
挿図26　伊勢遺跡大型竪穴建物出土焼壁材実測図
挿図27　伊勢遺跡東半部遺構図
挿図28　伊勢遺跡全体図

図　版　目　次

		上	下
巻頭カラー１		大型竪穴建物検出状況	ＳＢ－12検出状況
巻頭カラー２		大型竪穴建物焼壁材検出状況	大型竪穴建物焼床検出状況
図版１	伊勢遺跡74次調査	大型竪穴建物とSB-9検出状況（南西から）	大型竪穴建物とSB-9検出状況（北西から）
図版２	伊勢遺跡74次調査	大型竪穴建物掘削状況（西から）	大型竪穴建物掘削状況（南西から）
図版３	伊勢遺跡74次調査	Ｔ－１検出状況(西から)	Ｔ－１検出状況(西から)
図版４	伊勢遺跡74次調査	大型竪穴建物検出状況（南西から）	大型竪穴建物検出状況（南西から）
図版５	伊勢遺跡74次調査	ＳＥ－１調査地全景（西から）	焼壁材出土状況(北から)
図版６	伊勢遺跡74次調査	ＳＥ－１断面状況（南東から）	Ｔ－１焼床露頭状況（西から）
図版７	伊勢遺跡74次調査	Ｔ－２調査地全景（南東から）	Ｔ－２調査地全景（北西から）
図版８	伊勢遺跡74次調査	ＳＢ－12検出状況（東から）	ＳＨ－３検出状況（北西から）
図版９	伊勢遺跡74次調査	Ｔ－３調査地全景（南東から）	Ｔ－３調査地全景（北東から）
図版10	伊勢遺跡74次調査	Ｔ－３柱穴検出状況（南から）	Ｔ－３柱穴検出状況（北西から）
図版11	伊勢遺跡74次調査	左 大型建物検出状況（南東から）	右 大型竪穴建物東隅検出状況（西から）
		大型竪穴建物検出状況（南東から）	焼床検出状況（北西から）
		土器出土状況（北西から）	南東辺調査状況（北東から）
		南東辺中央土器出土状況（北から）	北西辺中央土器出土状況（南東から）
図版12	伊勢遺跡74次調査	左 焼床検出状況（南東から）	右 焼床検出状況（南西から）
		南東辺壁際焼壁材検出状況（南西から）	ＳＥ－１内焼床材出土状況
		南東辺焼壁材出土状況（北から）	南東辺焼壁材出土状況（北から）
		南東辺焼壁材出土状況（北から）	南東辺焼壁材出土状況（西から）
図版13	伊勢遺跡80次調査	調査地全景（南東から）	調査地全景（西から）
図版14	伊勢遺跡80次調査	ＳＤ－１検出状況（北から）	遺構検出状況（南東から）
図版15	伊勢遺跡80次調査	遺構検出状況（南東から）	遺構検出状況（南から）
図版16	伊勢遺跡80･81次調査	第80・81次調査地全景（南西から）	第80・81次調査地全景（南東から）
図版17	伊勢遺跡80･81次調査	左 第80次調査ＳＤ－１掘削状況（南東から）	右 ＳＨ－２検出状況（北西から）
		ＳＨ－２調査状況（北西から）	Ｔ－２調査地全景（南から）
		ＳＨ－２全景（南から）	ＳＨ－２調査状況（南から）
		ＳＨ－２調査状況（北西から）	ＳＨ－２床面検出状況（北東から）
図版18	伊勢遺跡81次調査	ＳＨ－１全景（南西から）	焼床検出状況（南東から）
図版19	伊勢遺跡81次調査	ＳＨ－１検出状況（東から）	ＳＨ－２検出状況（南東から）
図版20	伊勢遺跡81次調査	左 ＳＨ－１全景（南西から）	右 ＳＨ－１調査状況（南東から）
		ＳＨ－１中央断面（東から）	ＳＨ－１東壁断面（北東から）
		ＳＨ－１中央断面（東から）	ＳＨ－１東壁側土坑（北東から）
		ＳＨ－１東壁側土坑（北東から）	ＳＨ－１東壁側土坑（南東から）
図版21	伊勢遺跡81次調査	左 ＳＨ－１　Ｐ－１断面（南東から）	右 ＳＨ－１　Ｐ－３断面（北西から）
		ＳＨ－１　Ｐ－４（北西から）	ＳＨ－１　Ｐ－４断面（南東から）
		ＳＨ－１焼床検出状況（北東から）	ＳＨ－１焼床検出状況（南から）
		ＳＨ－１焼床検出状況（南西から）	ＳＨ－１焼床検出状況（西から）
図版22	伊勢遺跡74次調査出土遺物写真		
図版23	伊勢遺跡74次調査出土遺物写真		
図版24	伊勢遺跡74次調査出土遺物写真		
図版25	伊勢遺跡81次調査出土遺物写真		
図版26	伊勢遺跡81次調査出土遺物写真		
図版27	伊勢遺跡74・81次調査出土遺物写真（焼床材・焼壁材）		
図版28	伊勢遺跡74次調査出土遺物写真（焼床材）		
図版29	伊勢遺跡74次調査出土遺物写真（焼床材）		
図版30	伊勢遺跡74次調査出土遺物写真（焼壁材）		

第１章　確認調査に至る経緯と伊勢遺跡の歴史的環境

第１節　確認調査に至る経緯

昭和56年１月、守山市南端に位置する伊勢町内で、個人住宅建設に伴い試掘調査を行った結果、弥生時代後期の集落遺跡が存在することが判明した。最初に発見された町名をとり、伊勢遺跡と命名され周知されるに至った。昭和56年４月から９月にかけて、伊勢町内の中東浦地区と大苗代地区で宅地造成工事に伴い発掘調査を相次いで行った結果、弥生時代後期の五角形住居を含む竪穴住居19棟、古墳時代前期の方形周溝墓８基を検出した。その結果、伊勢町を中心に大規模な弥生時代後期の集落遺跡が存在することが推測されるに至った。翌昭和57年４月には農業倉庫建設に伴う調査で五角形住居が発見され、弥生後期前半代の良好な土器群が出土した。床面一括の出土状況であったことから、野洲川流域の弥生後期土器の編年上の指標となっている。平成２年には中東浦地区で倉庫建築に伴う発掘調査で９棟の竪穴住居と長大な柱穴が４個検出された。この柱穴はその後の調査で方形区画内の大型建物ＳＢ－２の柱穴の一部であることが判明した。ＳＢ－２は桁行３間×梁行１間（７ｍ×７ｍ）の近接棟持柱付大型建物で２つの調査地にまたがって検出された。

その後、平成４年７月に栗東市下鈎遺跡で近畿地方では初めて独立棟持柱付大型建物が発見された。同９月には伊勢遺跡21次調査で弥生後期では全国最大規模の大型建物ＳＢ－１が検出された。下鈎遺跡、伊勢遺跡で相次いで検出された大型建物は、弥生時代の研究史上でも重要な位置を占めている。さらに伊勢遺跡では平成６年に独立棟持柱付き大型建物が発見され、柱穴から直径40cmを測るヒノキの柱根が出土した。その後、道路建設や民間の宅地造成工事に伴う発掘調査によって次々と大型建物が発見されていった。これらの大型建物の検出によって、伊勢遺跡は政治的に国へと統合されていく過程を探る重要な遺跡であることが明らかになってきた。

守山市では、開発に伴って大型建物が次々と発見される伊勢遺跡の保存を図るため、文化庁、滋賀県教育委員会と協議し、平成９年度より範囲確認調査を実施し、遺跡の範囲および性格を把握することに努めた。平成10・11・12年度の調査では独立棟持柱付き大型建物や楼観等の大型建物が次々と発見され、類例を見ない内容をもつ遺跡であることがあらためて明らかとなった。本報告分である平成13・14年度の確認調査では阿村町側の調査によって独立棟持柱付き大型建物が弧状にそして等間隔に配置されていることが明らかとなった。さらに、床面積185㎡を測る大型竪穴建物が新たにみつかり、床や壁に特殊な建築技術が採用されていることが明らかになった。

確認調査では伊勢町、阿村町の地権者の了解を得て、基本的には平面検出調査を実施し、遺構の広がりや性格の把握に努めた。また遺構の性格や時期を決定する上で必要と判断される場合、文化庁及び滋賀県文化財保護課と協議のうえ、必要最小限の掘削調査を行った。調査終了後、重機及び人力で埋め戻し原状復帰に努めた。なお、掘削調査を行った場合、シートおよび山砂で遺構を埋め戻し、地下遺構が傷まないように保存を図った。

第２節　伊勢遺跡の歴史的環境

伊勢遺跡は縄文時代から室町時代にかけて営まれた集落遺跡である。縄文時代後期の住居跡が日吉神社の東側で発見されているほか、栗東市との境界を流れる旧河道からは縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が多数出土しており、古くから人が居住していた痕跡が認められる。伊勢町中東浦地区や森ヶ下地区では奈良～平安時代の総柱建物跡が見つかっているほか、墨書土器なども見つかっており、官衙関連施設があった可能性がある。また、伊勢町字南代地区では、平安時代後期から室町時代にかけての掘立柱建物や井戸が多数検出されているほか、建物の周囲には区画溝が掘られていることがわかっている。溝で区画された屋敷地がいくつも連結し集落を形成していたと考えられ、現在の伊勢村につながっていく古代末から中世末期の村落の姿を復元することができる。その後、南代地区から栗東駅にかけて大規模な土取り跡が検出されているが、昭和初期に操業していた江州煉瓦工場の粘土採掘跡とみられる。

しかし、伊勢遺跡が最も巨大化するのは弥生時代後期であり、遺跡の東半部では大型建物が集中して造営され、西半部では五角形住居を含む竪穴住居が多数営まれており、多くの人が居住していたことが推測される。そのピークは弥生時代後期中葉から末にかけてであり、１世紀後葉から２世紀末の約百年ほどの実年代と推測される。伊勢遺跡の出現と消滅の前後では後漢書に記された百余国に分かれていた倭国の姿と魏志倭人伝に記された30余国を代表する邪馬台国の出現という歴史的な変化がみられる。伊勢遺跡が発達する時代は、国へと統合される激動期と考えられ、邪馬台国前夜の国の姿を探る特異な遺跡とみられる。伊勢遺跡で集中的に発見される大型建物は、国の政治や祭祀を執り行う中枢施設と考えられるが以下、伊勢遺跡発達の前後でどのような歴史的・社会的変化

が起こっているのか概観したい。

湖南地域でも農耕が開始された弥生前期の集落は琵琶湖沿岸や野洲川支流沿いの自然堤防上に集落が営まれ、水田が開かれたとみられる。自然地形を利用し集落が営まれ、次第に農業が定着していったと考えられる。弥生時代前期の集落の具体像は明らかではないが、服部遺跡では約18,700㎡以上の前期小区画水田が検出されている。木製農具からみても完成された農業技術体系として稲作農耕が移入されていたことが推測される。長浜市川崎遺跡では３条の環濠が巡る集落が検出されており、弥生前期より環濠をもつ拠点集落が近江でも形成されていることが窺われる。

弥生中期前半の集落の様相はいまひとつ明らかではないが、弥生前期より継続する守山市寺中遺跡では多数の柱穴が検出されており、掘立柱建物を中心とする集落が営まれていたことが推定される。さらに草津市中沢遺跡や宮前遺跡などで中期前半の弥生土器が多数出土しており、野洲川支流沿いに集落が営まれていたと考えられる。

弥生前期から中期前半の集落の様相は判然としないが、中期後半になると集落の動態が活発になってくる。中期後半は凹線文と呼ばれる回転運動による施紋が盛行する時代であるが、この時期には野洲川が形成した扇状地末端から先端にかけて巨大な集落がいくつも形成されている。守山市下之郷遺跡は凹線文受容期の最初の集落遺跡であるが、集落の周りに３重の環濠が巡っている。かつて集落が営まれなかった標高92m前後の内陸部に巨大な環濠集落が幾つも展開するのがこの時期の特徴である。下之郷遺跡に続いて守山市播磨田東遺跡、二ノ畦・横枕遺跡、山田町遺跡、栗東市下鈎遺跡で環濠を持つ可能性が高い集落遺跡が出現する。これらの集落遺跡の特徴は中期後半代でも中葉から後葉に盛行すること、直径が300m程の巨大集落であること、扇状地末端に平野部を横断するように数キロごとに分布することなどがあげられる。長浜市鴨田遺跡では紀元１世紀に中国で鋳造された五珠銭が出土しており、近江内部だけではなく、大地域間の結びつきがあったことが想定される。この時期には大阪湾岸、瀬戸内や東海地方の土器が搬入されるほか、鉄器なども広く流通しており、拠点集落間のネットワークを通して人や物が行き交っていたと推定される。拠点集落間の広域にわたるネットワークが列島内の物や人の流通を実現していたとみられ、これが弥生中期社会の特徴と考えられる。

しかし、弥生中期末から後期初頭になるとこのような拠点的大集落は近畿各地で解体する傾向があり、後期前半代には小規模な集落が散在居住するようになる。この居住景観の大きな変化は、弥生社会の構造変化を推測させるものである。中期の装飾性の高い近畿地方の土器も急速に無文化しており、その変化は社会の基礎構造に及ぶものであったと考えられる。

伊勢遺跡は弥生時代中期の大規模な集居形態が解体し散在居住するプロセスを経て、後期中葉に出現する特異な遺跡であり、より大きな政治組織の形成を希求する弥生終末期の社会が生み出した遺跡であったと考えられる。伊勢遺跡では弥生時代後期中葉から後期末に大型建物や竪穴住居が集中して営まれているが、その盛行期の実年代観は、紀元１世紀末から２世紀末の約100年間と想定される。伊勢遺跡は古墳時代初頭に急速に衰退し、替わって伊勢遺跡から西側に1.7kmに位置する下長遺跡が盛行するようになる。以下、古墳時代初頭の下長遺跡の内容を検討し、社会の変化を概観する。

下長遺跡では方形の区画溝の中に大型建物が造営された居館跡や、独立棟持柱付き大型建物が同一地点に何度も建て替えられた祭祀域が発見されている。遺跡内からは組帯文を施した儀仗や、直弧文を施した柄頭、石釧、素文鏡などが出土しており古墳時代の王が住まいしていたことが想定される。さらに、遺跡内には近畿各地や東海、北陸、山陰、瀬戸内、東部四国など東西日本の土器が持ち運ばれており、遠隔地との交流が盛んに行われていることが窺われる。同時に準構造船の部材や櫂などが出土しており、河川や琵琶湖を利用した交易が盛んに行われていたと考えられる。

伊勢遺跡の時代は、鉄器やガラス製品の流通や、五角形住居、布掘り建物の分布など、日本海沿岸地域との結びつきが強かったとみられる。近江の土器様相は独自性を保ちながらも、近畿や東海地域の中間点として東西の土器様相を保っている。古墳時代の下長遺跡の時代になると、東西日本の土器が搬入されており、人や物の交流が列島規模で多量に流通する社会へと変化している。さらに、交易を通して王・首長層の権限が増大したとみられ、儀仗など祭祀に用いる精巧な木製品、石製品が製作されている。

伊勢遺跡の歴史的位置は、初期ヤマト政権の成立に先立ち、地域の政治的統合や首長権の創出に係わる重要な遺跡と考えられる。また、東西日本が活発に交流し、融合していく古墳時代社会の動きからみて、東西日本の結節点にあたる近江はその前段階として近畿、東海を結びつける役割があったとみられる。近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が合わせて埋納された大岩山銅鐸群は、弥生時代をともに終える姿が窺われ、伊勢遺跡はそのような役割を担っていたとも考えられる。

挿図１　野洲川流域の遺跡分布図

第３節　伊勢遺跡既往調査

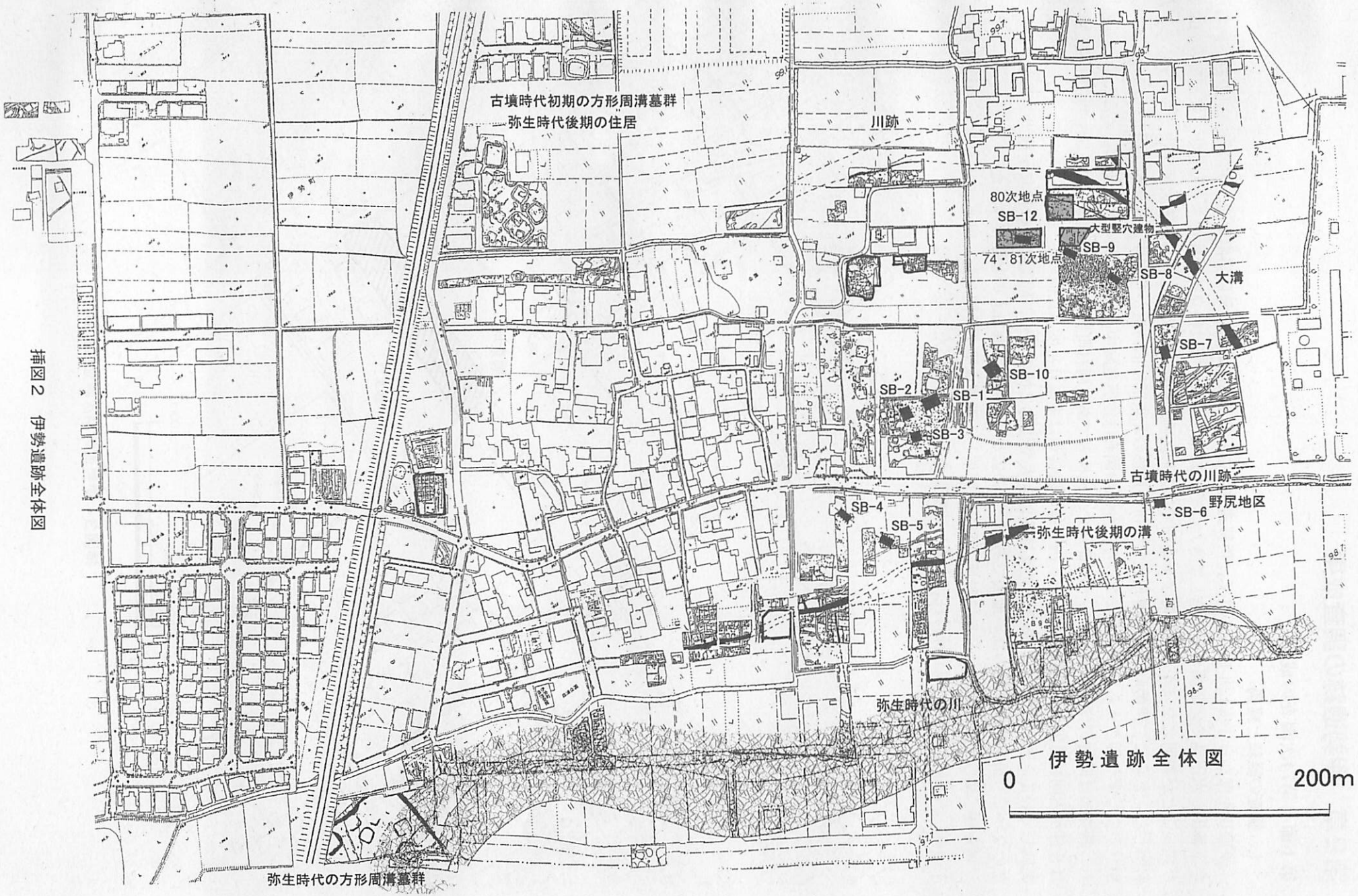
伊勢遺跡は昭和56年に発見されて以来、平成19年12月末までに108次に及ぶ調査を行っている。本報告では74・80・81次の確認調査の成果を収録している。本書に収録した調査は、伊勢遺跡の範囲及び性格を把握するために行った確認調査によるものである。現地調査は遺構検出を基本とし、必要に応じて滋賀県教育委員会及び文化庁と協議を行い最小限度の掘削調査を行った。掘削調査した場合は、山砂で埋め戻し遺構の保存を図った。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
1次	伊勢町字中東浦75	昭和56年１月16日～ 昭和56年１月22日迄	個人住宅	約50㎡	乙貞１号	試掘により弥生後期の遺跡の存在を確認。 柱穴・溝（方形周溝墓か）
2次	伊勢町字中東浦 76・77・82-1	昭和56年４月13日～ 昭和56年７月10日迄	宅地造成	約3,000㎡	滋賀文化財だより67号 乙貞4・5号	弥生後期の竪穴住居９棟検出。内１棟は五角形住居。楯の検出。　鎌倉時代の掘立柱建物・井戸等検出。
3次	伊勢町字大苗代 309-9・311-1	昭和56年７月10日～ 昭和56年９月30日迄	宅地造成	約3,000㎡	乙貞５号	弥生後期の竪穴住居10棟検出。内１棟は五角形住居。古墳時代初頭から前期にかけての方形周溝墓８基を検出。
4次	伊勢町字二丁田344・ 343	昭和57年４月12日～ 昭和57年４月26日迄	農業倉庫	約400㎡ /580	守文報第12冊 乙貞6.7	弥生後期の五角形住居１棟。平安後期の溝・土壙・柱列・井戸等を検出。五角形住居から弥生後期の土器群が出土。
5次	伊勢町字西浦537	昭和57年5月	個人住宅	約100㎡	守文報第12冊	弥生後期の溝。
6次	伊勢町451-1 二町町30-1	昭和58年９月２日～ 昭和58年９月30日迄	宅地造成	約2,000㎡	守文報第15冊	奈良時代の掘立柱建物１棟・溝を検出。
7次	伊勢町451-8 二町町30-1	昭和59年５月30日～ 昭和59年６月17日迄	宅地造成	約1,000㎡	守文報第15冊	奈良時代の掘立柱建物１棟・溝を検出。
8次	伊勢町字西浦537・538	昭和59年11月９日～ 昭和59年11月30日迄	個人住宅	70㎡ ／174㎡	守文報第20冊	溝
9次	阿村町字下番田151-3	昭和59年4月5日	資材置き場	約300㎡ /476㎡		旧河道
10次	伊勢町字二丁田327-3	昭和59年11月10日～ 昭和59年12月１日迄	個人住宅	約700㎡ /1,269㎡	守文報第20冊	弥生後期の竪穴住居１棟検出。奈良・平安時代の掘建柱建物・溝、鎌倉時代の建物・井戸
11次	伊勢町字西浦540	昭和59年12月10日～ 昭和59年12月14日迄	個人住宅	200㎡	守文報第26冊	溝（しがらみ遺構）
12次	伊勢町字伊勢里177-1	昭和63年12月19日～ 昭和63年12月26日迄	農業倉庫	405㎡	守文報第33冊	溝４条、土壙６基、柱穴、中世とみられる。
13次	伊勢町字大苗代303-12	平成元年１月13日～ 平成元年２月８日迄	個人住宅	300㎡	守文報第33冊 乙貞43号	古墳時代初頭の方形周溝墓２基、溝・柱穴 奈良時代（８世紀前半）
14次	伊勢町字上阿ノ図 19－1　外４筆	平成２年４月20日～ 平成２年６月４日迄	宅地造成	2,000㎡ /12,464㎡	乙貞51号	古墳時代・鎌倉時代の溝、奈良時代の溝２条。 江戸時代の井戸。
15次	伊勢町字伊勢里322-3	平成２年12月13日～ 平成２年12月14日迄	個人住宅	60㎡ /149㎡	守文報第43冊	弥生後期から古墳後期の遺物包含層。 鎌倉時代の柱穴
16次	伊勢町字二丁田347-1	平成２年２月４日～ 平成２年２月23日迄	個人住宅	978㎡	守文報第43冊	鎌倉時代の掘建柱建物・溝・土壙
17次	伊勢町二丁田	平成２年２月～ 平成２年４月	宅地造成	450㎡	乙貞55号	鎌倉時代の溝・掘建柱建物６棟、土壙７基 江戸時代の井戸
18次	伊勢町字中東浦81-1	平成２年６月28日～ 平成２年８月８日迄	倉庫建設	888㎡	守文報第42冊 乙貞51号	弥生後期の竪穴住居９棟・溝・独立棟持柱付建物。 鎌倉時代の掘立柱建物・旧河道
19次	伊勢町字井上125	平成４年１月28日～ 平成４年１月30日迄	個人住宅	330㎡	守文報第44冊 乙貞61号	弥生後期末の竪穴住居・方形周溝墓・溝 縄文晩期の深鉢・石鏃
20次	伊勢町字大将軍513-1・ 513-2	平成４年６月８日～ 平成４年６月10日迄	倉庫建設	約100㎡ /948㎡	乙貞63号	弥生後期の竪穴住居１棟（五角形住居か） 旧河道
21次	伊勢町字中東浦80	平成４年６月25日～ 平成４年９月25日迄	倉庫建設	870㎡	現説資料92.9.19 乙貞64・65 伊勢遺跡確認調査報告書2003・3	弥生後期の大型建物３棟（ＳＢ－１・２・３）竪穴住居７棟・柱穴多数。　鎌倉時代の掘立柱建物４棟
22次	伊勢町字高関459	平成４年７月29日～ 平成４年９月５日迄	共同住宅	600㎡	守文報第48冊 乙貞64号	弥生後期の方形周溝墓３基。 古墳時代後期から平安時代の溝。
23次	伊勢町字西浦553	平成４年９月１日～ 平成４年９月15日迄	個人住宅	227㎡	守文報第47冊	弥生後期の自然流路（土器出土）。
24次	伊勢町字溝崎 411-1　412-1	平成５年４月23日～ 平成５年６月30日迄	共同住宅	2,279㎡	乙貞69号	鎌倉時代の掘立柱建物・溝。
25次	伊勢町字大苗代308-2	平成５年５月15日～ 平成５年５月29日迄	個人住宅	240㎡ /500㎡	守文報第53冊 乙貞69号	弥生後期の大溝。 古墳時代前期の方形周溝墓１基。
26次	伊勢町字溝崎409	平成５年６月７日～ 平成５年６月12日迄	共同住宅	1,292㎡ /1,308㎡	乙貞69号	耕作跡
27次	伊勢町字伊勢里323-3	平成５年９月21日～ 平成５年10月15日迄	共同住宅	500㎡ /998㎡	乙貞71号	弥生後期の竪穴住居２棟・土壙６基。
28次	伊勢町字南東浦84-1 他	平成５年10月26日～ 平成７年５月31日迄	区画整理	10,000㎡	乙貞72.73.74.75号 守文報第63冊	弥生後期の大型建物・区画溝・方形周溝墓。 鎌倉時代の掘立柱建物・区画溝他
29次	伊勢町字西浦531他	平成５年10月～ 平成６年１月	公共下水	606㎡	乙貞73号表	
30次	伊勢町字高崎460	平成６年５月23日～ 平成６年５月27日迄	共同住宅	400㎡	乙貞79表	弥生中期の方形周溝墓。
31次	伊勢町字伊勢里322	平成７年１月24日～ 平成７年２月17日迄	公共下水	200㎡	乙貞85号表	弥生後期から鎌倉。
32次	伊勢町字伊勢里257	平成7年9月15日	個人住宅	396㎡	守文報第61冊	井戸（近世）

参考文献の守文報は「守山市文化財調査報告書」を示す。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
33次	伊勢町字大苗代302 304-7	平成７年12月20日～ 平成８年１月31日迄	共同住宅	500㎡ /1,312.9㎡	乙貞84号	縄文時代の土壙・柱穴。
34次	伊勢町字伊勢里525	平成８年３月４日～ 平成８年３月22日迄	個人住宅	346㎡	乙貞85号 守文報第61冊	鎌倉時代の掘立柱建物・溝・土壙
35次	二町町字北上代7-5･9-2	平成８年７月22日～ 平成８年８月26日迄	宅地造成	336㎡ /2094	乙貞88号	弥生後期の方形周溝墓・竪穴住居。
36次	伊勢町字大将軍516-1	平成８年11月13日～ 平成８年11月26日迄	個人住宅	120㎡ /218㎡	乙貞90号 守文報第61冊1997･3	弥生後期の周壁溝が巡る五角形住居。中世の溝。
37次	伊勢町字西浦520･521	平成８年11月13日～ 平成８年11月21日迄	共同住宅	117㎡ /368㎡	乙貞90号	溝３条・土壙２基・柱穴。
38次	伊勢町字南代104	平成８年11月20日～ 平成８年12月７日迄	共同住宅	117㎡ /316㎡	乙貞90号	溝５条・土壙１基。
39次	伊勢町字伊勢里	平成９年１月31日～ 平成９年２月14日迄	個人住宅	80㎡ /368㎡	乙貞91号 守文報第66冊1998･3	溝３条・土壙２基・柱穴。
40次	伊勢町字南代３街区９	平成９年４月24日～ 平成９年６月13日迄	共同住宅	323㎡ /1,148㎡	乙貞93号	旧河道。
41次	伊勢町字西浦548-2	平成９年５月16日	個人住宅	25㎡	守文報第66冊 1998･3	中世の土壙。
42次	伊勢町字西浦548-1	平成９年６月26日	個人住宅	25㎡	守文報第66冊 1998･3	古墳時代前期の溝。中世の土壙。
43次	伊勢町字南代14街区４	平成９年８月４日～ 平成９年８月26日迄	個人住宅	374㎡ /745㎡	乙貞94号 守文報第66冊1998･3	掘立柱建物４棟、中世の井戸１基。
44次	伊勢町字南代14街区7	平成９年10月８日～ 平成９年11月６日迄	共同住宅	220㎡ /768㎡	乙貞95号	弥生竪穴住居１棟・独立棟持柱付大型建物（ＳＢ－４）・土壙２基・柱穴多数。中世の溝。
45次	伊勢町字伊勢里10街区４	平成９年11月22日～ 平成９年12月24日迄	個人住宅	433㎡ /500㎡	乙貞96号 守文報第66冊1998･3	弥生溝１条。中世区画溝・掘立柱建物１棟、 井戸１基　柱穴多数
46次	伊勢町字中東浦80	平成10年１月22日～ 平成10年３月４日迄	確認調査	100㎡	乙貞97号 伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	弥生後期の竪穴住居７棟・柱穴多数・土壙。
47次	伊勢町字稗田396	平成10年３月13日～ 平成10年３月14日迄	宅地造成	60㎡ /2,200㎡	乙貞97号	溝１条、古墳時代後期柱穴１個。
48次	伊勢町字南東浦91	平成10年５月21日～ 平成10年６月19日迄	確認調査	150㎡	乙貞99号 現説資料1998.6.14 伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	独立棟持柱付大型建物１棟（ＳＢ－５）柱根２出土・柱穴多数。中世の溝１条。
49次	阿村町字上番田143-1	平成10年９月16日～ 平成10年10月23日	工場建設	1,856㎡	伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	竪穴住居・溝。
50次	伊勢町字南東浦92・93	平成10年10月12日～ 平成10年11月12日迄	共同住宅	800㎡ /1,246㎡	伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	溝・土壙・柱穴。　中世の掘立柱建物群。
51次	伊勢町字中東浦79-1	平成10年11月２日～ 平成10年11月20日	確認調査	500㎡	伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	弥生後期の旧河道。
52次	阿村町156	平成10年11月20日～ 平成10年12月25日迄	確認調査	500㎡	乙貞102号　現説資料1998.12 伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	竪穴住居５棟・大型建物（ＳＢ－10）・溝・柱穴。
53次	阿村町157-1	平成10年12月４日～ 平成10年12月18日迄	確認調査	500㎡	乙貞102号 伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	竪穴住居２棟・柱穴・溝。
54次	伊勢町字南代589	平成11年２月８日～ 平成11年２月18日迄	共同住宅	500㎡	乙貞103号 伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	竪穴住居１棟・溝・柱穴。
55次	伊勢町字南代254	平成11年５月13日～ 平成11年５月17日迄	共同住宅	200㎡	乙貞109号表	旧河道。
56次	伊勢町字中東浦78	平成11年５月10日～ 平成11年７月８日迄	確認調査	800㎡	乙貞105号　現説資料1999.7.3伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	ＳＢ－１とＳＢ－11の柱穴の切り合いを確認。 竪穴住居３棟・溝・柱穴多数。
57次	阿村町字上番田143-1	平成11年５月10日～ 平成11年８月25日迄	工場建設	2,000㎡ /3,288.99㎡	乙貞106号 伊勢遺跡第57次調査報告書2001.3	弥生後期竪穴住居１棟。古墳時代前期竪穴住居１棟・溝５条・旧河道。
58次	阿村町155･158-1	平成11年８月27日～ 平成11年９月14日迄	確認調査	400㎡	乙貞106号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	大型建物（ＳＢ－10）・竪穴住居の再調査。
59次	阿村町163	平成11年９月16日～ 平成11年９月30日迄	確認調査	200㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	溝・竪穴住居１棟。
60次	阿村町155･158-1	平成11年９月27日～ 平成11年12月14日	確認調査	700㎡	乙貞107号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	竪穴住居11棟・溝３条・土壙・柱穴。
61次	阿村町158-1	平成12年１月４日～ 平成12年１月18日迄	里道改良工事	100㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	竪穴住居３棟・溝・柱穴。
62次	伊勢町56	平成12年２月１日～ 平成12年３月21日迄	確認調査	400㎡	乙貞109号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ2005.3	竪穴住居１棟・焼土魂遺構・旧河道。
63次	伊勢町62	平成12年２月21日～ 平成12年３月21日迄	確認調査	500㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ2005.3	竪穴住居・柱穴・土壙。
64次	伊勢町56･59-1	平成12年６月26日～ 平成12年７月６日迄	確認調査	400㎡	乙貞113号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	旧河道・土壙。
65次	伊勢町字南代646･647	平成12年８月22日～ 平成12年８月30日迄	共同住宅	250㎡	守埋文平成12年度年報	旧河道・撹乱土壙。
66次	阿村町142-1	平成12年９月11日～ 平成12年９月29日迄	確認調査	400㎡	乙貞113号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	大溝１条・溝３条・土壙・柱穴。
67次	伊勢町171-1	平成12年10月30日～ 平成12年12月９日	確認調査	400㎡	乙貞114号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ2005.3	竪穴住居１棟・焼土魂再調査。
68次	伊勢町284	平成12年11月21日～ 平成12年12月４日	確認調査	500㎡	乙貞114号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	旧河道・大溝。
69次	伊勢町75	平成13年１月15日～ 平成13年１月31日迄	確認調査	200㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ2005.3	遺物包含層・溝。
70次	伊勢町字南代607	平成13年２月２日～ 平成13年２月15日迄	個人住宅	150㎡	守文報平成13年度国庫補助	旧河道。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
71次	伊勢町字森ケ下 426・427	平成13年５月23日～ 平成13年７月19日迄	宅地造成	500㎡ /2701.95	乙貞117号 現説資料2001・7．14	古墳時代前期～奈良の掘立柱建物７棟・溝。
72次	伊勢町259	平成13年７月２日～ 平成13年７月６日迄	共同住宅	250㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ2005.3	旧河道・溝。
73次	伊勢町613・614	平成13年８月20日～ 平成13年８月29日迄	共同住宅	250㎡	伊勢遺跡確認査報告書Ⅲ2005.3	旧河道・柱穴。
74次	阿村町166-1・167	平成13年９月５日～ 平成13年12月21日迄	確認調査	800㎡	今回報告分　乙貞120号 現説資料2001.12.17	大型竪穴住居１棟・棟持柱付大型建物２棟（ＳＢ－９・12）竪穴住居２棟、柱穴・土壙多数。
75次	伊勢町字伊勢里 315-1・316-1	平成14年１月７日～ 平成14年３月29日迄	宅地造成	700㎡ /2,118㎡	乙貞121号　現説資料2002.3.30 伊勢遺跡75次調査報告書2003.3	五角形住居を含む竪穴住居１７棟・溝・柱穴。
76次	伊勢町字南東浦602-1	平成14年２月７日～ 平成14年２月８日迄	個人住宅	376㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ2005.3	掘立柱建物・中世の柱穴。
77次	伊勢町字南代633	平成14年６月18日～ 平成14年６月24日迄	事務所建築	723㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ2006.3	旧河道・溝・撹乱
78次	伊勢町南代606	平成14年７月９日～ 平成14年７月16日	共同住宅	150㎡	乙貞124号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ2006.3	弥生後期の竪穴住居
79次	阿村町184・185	平成14年７月29日～ 平成14年８月３日迄	共同住宅	150 /446㎡	乙貞124号 伊勢遺跡確認調査報告書2006.3	弥生後期の竪穴住居。
80次	阿村町字168・170	平成14年９月18日～ 平成14年10月31日迄	確認調査	500㎡	今回報告分　乙貞127号	弥生後期の竪穴住居・区画溝、柱穴等。
81次	阿村町166-1	平成14年10月１日～ 平成15年３月15日迄	確認調査	400㎡	今回報告分　乙貞127号	弥生後期の大型竪穴建物、独立棟持柱付き建物。
82次	伊勢町字大将軍516-2	平成14年11月11日～ 平成14年11月14日迄	個人住宅	410㎡	伊勢遺跡確認調査報告書2006.3	弥生後期の竪穴住居、近世の溝・柱穴等。
83次	伊勢町字森ヶ下	平成14年11月18日～ 平成14年12月６日迄	宅地造成	200 /1,336㎡	乙貞126号	古墳時代の溝、柱穴等。
84次	伊勢町字井上677	平成15年２月12日～ 平成15年３月７日迄	共同住宅	390㎡	乙貞127号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ2006.3	弥生後期の溝。
85次	伊勢町字南代648・649	平成15年2月28日	分譲住宅	885㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ2006.3	撹乱。
86次	伊勢町字南代615・616	平成15年３月12日～ 平成15年３月14日迄	共同住宅	666㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ2006.3	旧河道・溝・撹乱。
87次	伊勢町字南代624・625	平成15年３月18日～ 平成15年３月19日迄	共同住宅	836.78㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ2006.3	旧河道
88次	伊勢町字南代624・625	平成15年８月４日～ 平成15年８月20日迄	共同住宅	200 /836.78㎡	乙貞133号	旧河道・溝。87次調査の再調査。
89次	伊勢町字南代642・643	平成15年８月25日～ 平成15年８月29日	分譲住宅	250 /805㎡	乙貞133号	撹乱坑が全体に広がる。
90次	伊勢町二町田324・325	平成15年９月26日～ 平成15年10月15日	共同住宅	300 /835.78㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ2006.3	中世の溝・柱穴。
91次	伊勢町字南代663-2	平成15年11月23日～ 平成16年２月21日迄	個人住宅	90 /231㎡	伊勢遺跡確認査報告書Ⅳ2006.3 乙貞132・133号	旧河道・撹乱坑
92次	伊勢町字中東浦62	平成16年２月26日～ 平成16年３月１日	確認調査	400㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3	竪穴住居・柱穴・土壙・中世の掘立柱建物
93次	伊勢町字伊勢里320-3	平成16年２月26日～ 平成16年３月１日	個人住宅	101.27 /465㎡	平成15年度文化財報告書2005.3	方形周溝墓と見られる溝。
94次	伊勢町字南代608	平成16年５月26日～ 平成16年５月31日迄	共同住宅	170 /427.2㎡	伊勢遺跡確認査報告書Ⅴ2007.3	撹乱坑
95次	伊勢町字森ヶ下423	平成16年８月20日～ 平成16年９月17日	共同住宅	50 /1,199.4㎡	乙貞139号	溝
96次	阿村町字下大洲168・ 170	平成16年10月～ 平成16年11月	宅地造成	600㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3 乙貞136号	区画溝・竪穴住居
97次	伊勢町字伊勢里567	平成17年５月25日～ 平成17年５月30日	個人住宅	200 /461㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3	溝・撹乱
98次	阿村町字下大洲168-2	平成17年５月26日～ 平成17年５月30日迄	分譲住宅	500 /628.09㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3 乙貞142号	区画溝　竪穴住居
99次	伊勢町字二町田327-1	平成17年12月19日～ 平成18年１月25日	共同住宅	200 /598㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3 乙貞144号	五角形住居　掘立柱建物　井戸
100次	伊勢町字二町田327-1	平成18年５月10日～ 平成18年６月７日	共同住宅	250 /598㎡		竪穴住居
101次	伊勢町字大将軍508	平成18年６月６　～ 平成18年６月７日	個人住宅	50 /289.14㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3 乙貞136号	区画溝・竪穴住居
102次	伊勢町字伊勢里204、 205、569	平成18年8月29日	個人住宅	60 /64.01㎡	平成18年度文化財報告書2008.3	溝・撹乱
103次	伊勢町字伊勢里221、 571	平成18年８月30日～ 平成18年８月31日迄	個人住宅	65 /93.06㎡	平成18年度文化財報告書2008.3	区画溝　竪穴住居
104次	伊勢町字大苗代313	平成18年10月27日～ 平成19年１月31日	宅地造成	600 /1,047.13㎡	伊勢遺跡現地説明会資料2006.12 乙貞150号	五角形住居　掘立柱建物　井戸
105次	伊勢町字大苗代313	平成18年11月１日～ 平成18年11月24日	個人住宅	160 /441.1㎡	平成18年度文化財報告書2008.3	竪穴住居


古墳時代初期の方形周溝墓群
弥生時代後期の住居
川跡
80次地点
SB-12
大型竪穴建物
SB-9
74・81次地点
SB-8
大溝
SB-7
SB-10
SB-2
SB-1
SB-3
古墳時代の川跡
野尻地区
SB-4
SB-5
SB-6
弥生時代後期の溝
弥生時代の川
弥生時代の方形周溝墓群
伊勢遺跡全体図
0
200m

挿図2　伊勢遺跡全体図

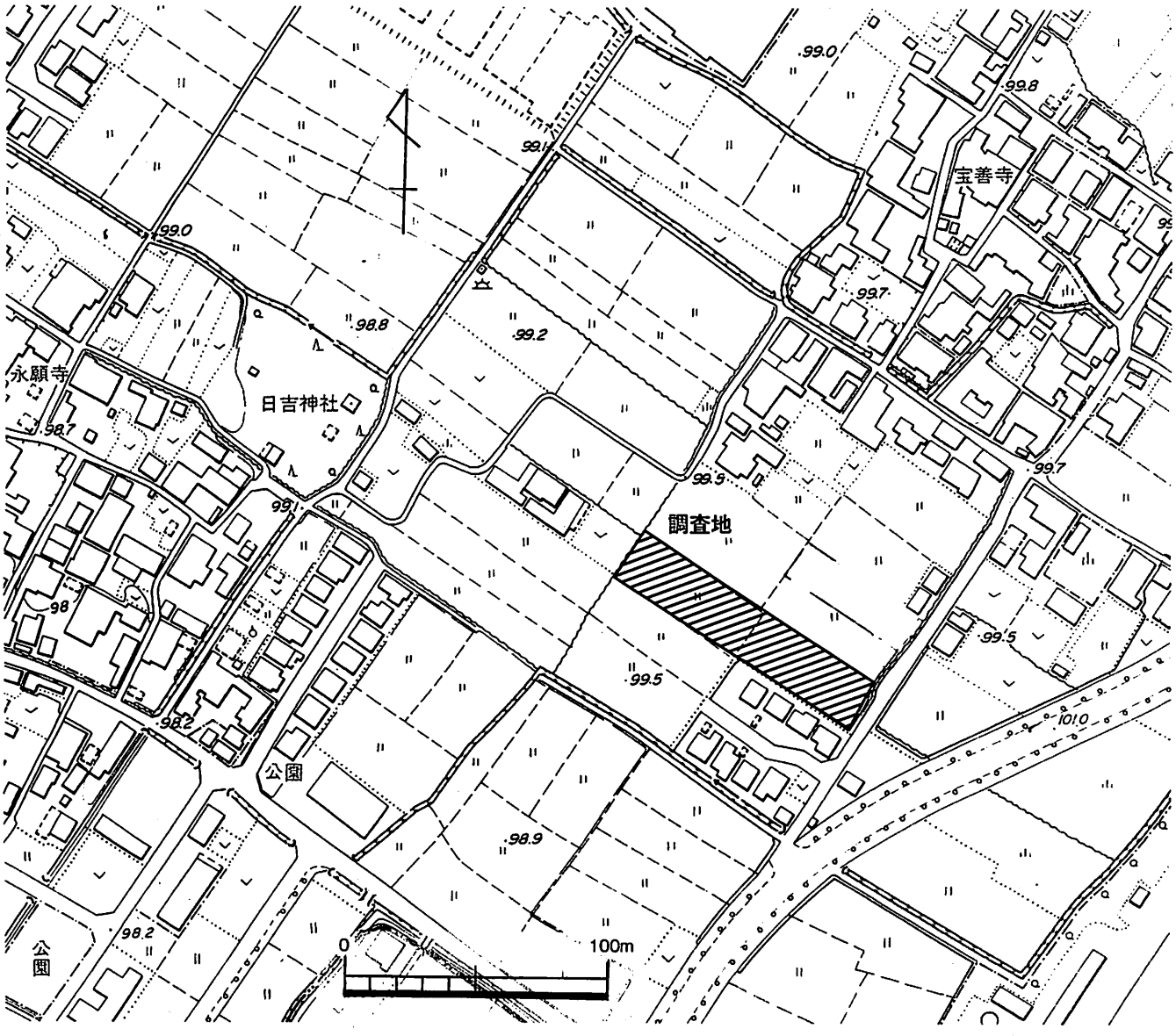
第2章　伊勢遺跡の調査成果

第1節　第74次調査の成果

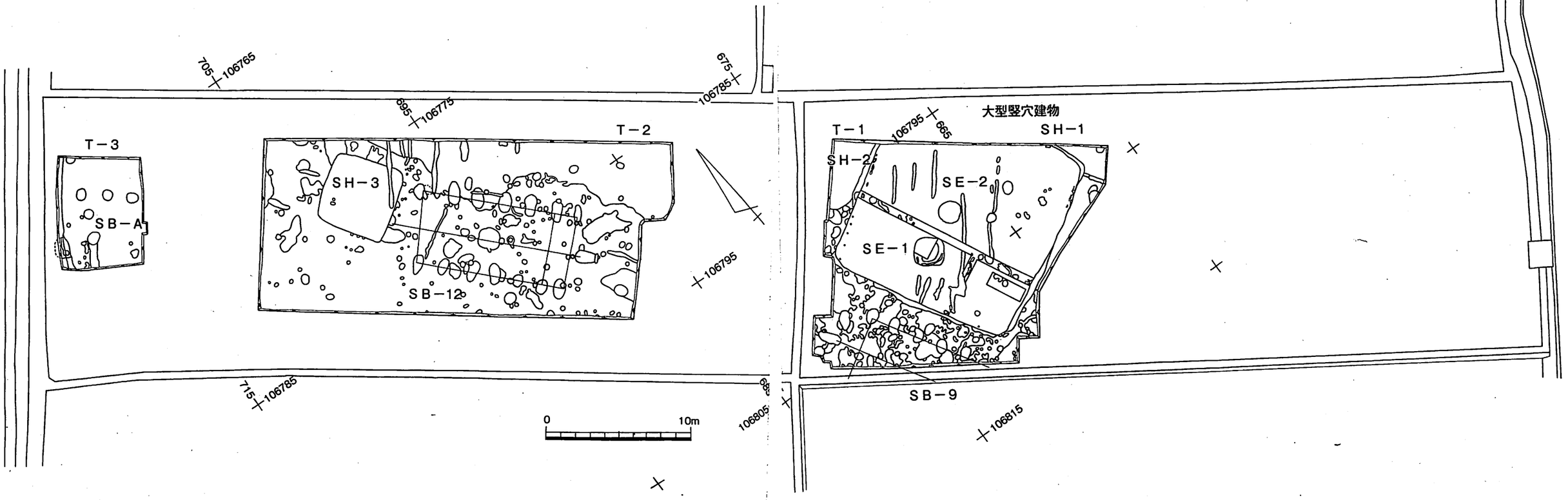
1、調査の経緯と経過

平成10年度から平成12年度にかけて、伊勢遺跡の中心部と目される伊勢町字南東浦、伊勢町字中東浦、阿村町字下番田の水田地で確認調査を実施してきた。その結果、南東浦では独立棟持柱付き大型建物二棟が縦方向に並び建つことが判明したほか、阿村町字下番田では方形区画に隣接して楼観とみられる大型建物が存在することが判明した。さらに、伊勢町字北東浦地区では伊勢遺跡の北東部に旧河道が存在することが判明し、伊勢遺跡の広がりが少しずつ押さえられるようになった。今回の調査は伊勢遺跡中心部の東側の様子を確認するために実施した。調査地は阿村町字下大洲166-1、167番地で、地権者である阿村町在住の今井孝雄氏の承諾を得て平成13年９月５日から同12月21日の期間実施した。調査地の隣接地は平成６年度、民間の宅地造成工事に先立ち発掘調査を実施している。約2,000㎡の調査で独立棟持柱付き大型建物２棟のほか、約3000個の柱穴が検出された。伊勢遺跡のなかでも最も遺構密度の高い地域であり、その広がりが確認されるものと期待された。

調査終了後、平成13年12月８日に現地説明会を開催し、調査成果を公開した。現地説明会では1300名もの市民が訪れ、大型竪穴建物や独立棟持柱付き大型建物跡を見学して頂いた。



挿図３　伊勢遺跡74次調査位置図



挿図4　伊勢遺跡74次調査全体図

2、検出した遺構

現地調査は3つのトレンチを設定し調査を行った。以下、トレンチごとに検出した遺構について説明を加える。

T－1　阿村町字下大洲166-1番地の水田地の西側にトレンチ1を設定した。当初、独立棟持柱付き大型建物SB－9の北東側の桁柱6個と北側の棟持柱が予想通り検出された。これは、民間の宅地造成に伴い平成6年度に発掘調査を実施した際、南西側の桁柱と南側の棟持柱を検出していたもので、その存在が予想されていたものである。調査の結果、予想通り大型建物SB－9の東側桁柱6個と北側の棟持柱1個が検出された。さらに6個の桁柱に沿って大型竪穴住居とみられる南西部のコーナーが検出されたことから、トレンチを広げ調査を進めた。

SB－9　調査区西隅においてその一部を検出した。平成7年度に民間の宅地造成工事に伴う発掘調査によって、6個の桁柱と南側の棟持柱を1つ検出していたことからその存在が予想されていたものである。今回の調査で予想通り柱穴が検出され、そのプランがほぼ確定した。しかし、中心の棟持柱については二つの調査区の間にあたり検出することができなかった。桁行柱は大型竪穴建物の西辺に正しく平行する位置にあるが、その距離は2mと狭く、同時併存したとは考えにくい。SH－1の床面から出土した土器群は伊勢遺跡のなかでも古い様相を持つことから、大型竪穴建物の廃絶前後に造営された遺構と推定される。二つの調査区の図面を合わせると1間×5間、梁行9m、桁行4.8m、床面積43.2㎡を測る大型建物が復元される。柱穴には暗茶褐色粘質土の堆積がみられた。桁柱間は約1.8mで、伊勢遺跡内で発見されている独立棟持柱付き大型建物の標準規模である。棟持柱は梁から約2.3m外側に離れた地点に位置している。柱穴は長径約1.2m、短径約0.8mで楕円形の平面を呈している。棟持柱は長径約2mを測り、桁柱よりもひとまわり大きくて長い柱であったと推定される。平成7年度の調査で、桁柱及び棟持柱の柱根は残存せず、ぬきとられたと推定される。棟持柱P－1からは尖頭状の甕底部(74-19)が出土している。特異な形状の土器であるが、底部が安定しない形態であり、弥生後期でもやや新しい時期の遺物とみられる。

大型竪穴建物SH－1　調査区中央において検出した。当初、西辺のプランが検出され、竪穴住居にしては大きすぎるため、調査範囲を広げて全体を把握するように努めた。その結果、一辺13.5m、床面積185㎡を測る大型竪穴建物であることが判明した。伊勢遺跡内の大型建物の2倍以上の規模であり、最も大きな構造物と考えることができる。また、SB－9の桁柱列に平行しているが、近接しすぎで同時併存は考えられないが、位置関係からみて前後する時期に造営されたとみられる。同建物は柱穴群を切っており、小柱穴群よりも新しい遺構と考えることができる。また、耕作痕の他、中世とみられる黄白色の柱穴及び井戸に切られていた。井戸と見られるSE－1を一部掘削し、断面状況を観察することができた。平面検出時に壁際に板状の焼壁材が点々と四辺に分布しており、ひとつの巨大な構造物であることがわかった。特に南辺中央の焼壁材の残りがよく、そのうちの2つを取り上げた。長さ約40～45cm、高さ約30cm、厚さ8～13cmを測る板状の焼壁材であることが判明した。大型竪穴建物は超大型であるばかりではなく、壁際に特異な施設をもつことが予想された。

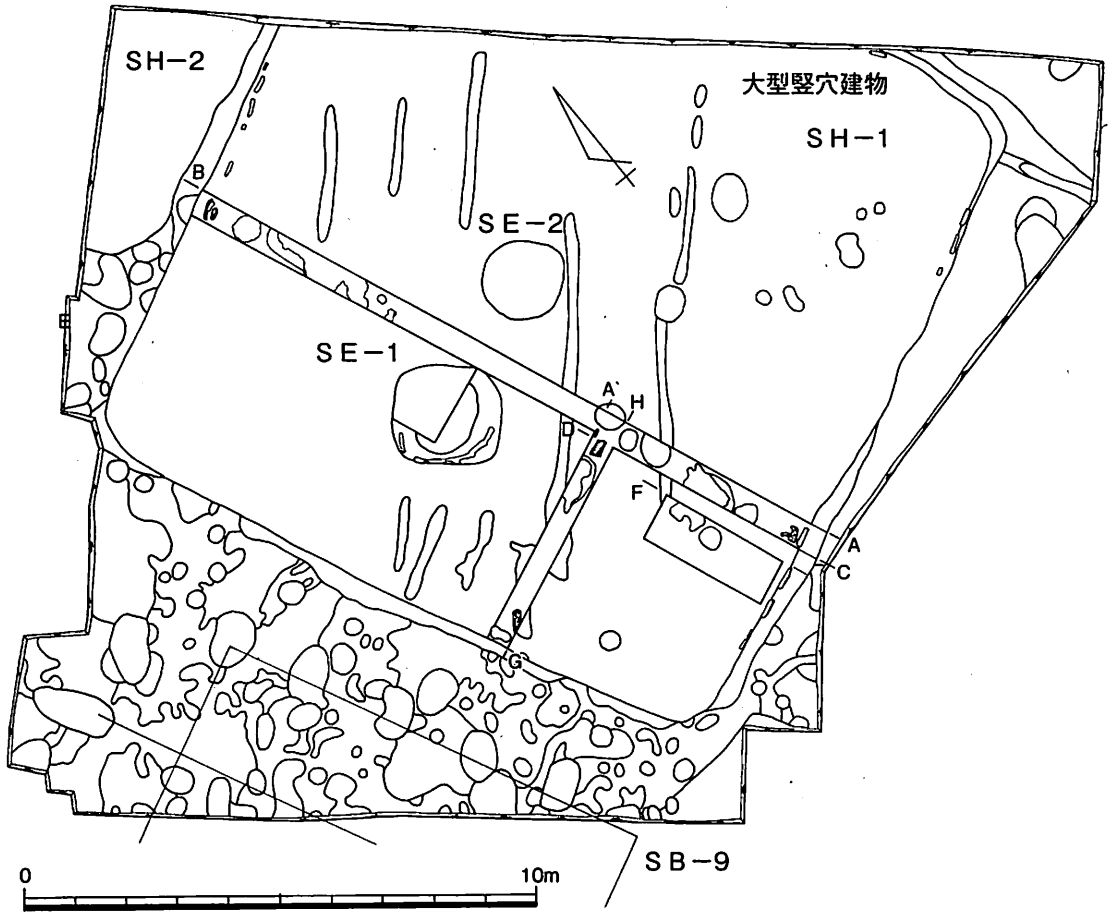
床面及び壁際の構造を把握するため、T字状にサブトレンチを入れ掘削調査を行った。その結果、残存壁高は45～50cmで、床面より出土した土器から弥生時代後期中葉の遺構であることがわかった。また、壁から2mほど内側に入る位置で、南西から北西中央よりに焼かれた床材が広がっていることがわかった。SE－1の断面観察の結果、同地点の地山は礫を多く含む灰色砂土であるが、それを掘り込んで約30cmの黄色シルトを貼床材として使用していることがわかった。さらに精良な粘土を5～8cm貼り粘土表面を焼いていたとみられる。黄色シルトと精良な粘土の間に砂礫を挟んでいる場所もみられた。南側の焼かれた床材は直径1～2cm程の孔が多数あけられていた。垂直方向もあるが斜め方向もみられ、大きさ及び方向はランダムである。孔の断面も赤く発色しており、孔があけられた後、焼かれたものとみられる。この焼き床は床面全体に広がるのではなく、壁際及び中央部には見られず限定的であることが予想された。このような遺構は平成12年度に実施した伊勢遺跡67次調査で検出されたSX－1に伴う焼土塊遺構に極めて似ており、竪穴住居に伴う床施設であった可能性がある。いずれにしても、特異な床構造をもつ竪穴とみられ、類例の増加がまたれる。

壁際の床面上から長頸壺（74-1）と大型鉢（74-2）が出土している。

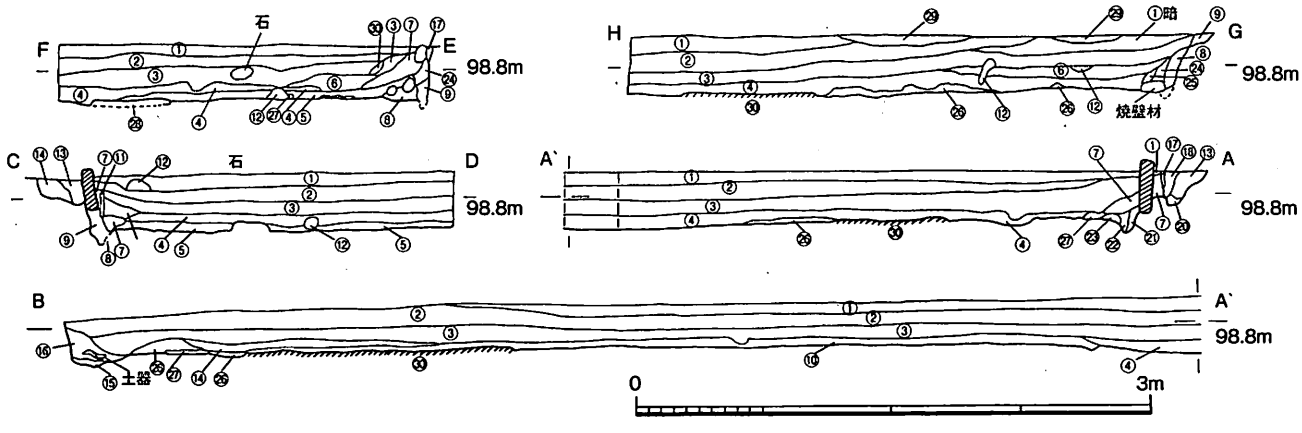
ＳＨ－２　調査区の北隅において竪穴住居の一部とみられる落ち込みを検出した。一辺5.3m以上の方形プランの竪穴住居とみられる。ＳＨ－１から約30～50cm離れた位置にあり、大型竪穴建物の北辺に概ね平行する。茶褐色粘質土（7.5ＹＲ2/2）の堆積がみられ、砂礫が多く含まれていた。ＳＨ－１に前後する弥生後期の竪穴住居と思われる。

この他、直径20～40cmを測る多数の柱穴が検出されたが、建物等を復元するには至らなかった。大洲地区では3000個に及ぶ柱穴が検出されているが、大型建物の柱穴や竪穴住居などの遺構に切られており、これらの遺構に時期的に先行するものと考えられる。

Ｔ－２　Ｔ－１の西側の水田地（阿村町字下大洲167番地）においてトレンチを設定し調査を進めた。隣接地の宅地造成時の調査で独立棟持柱付き大型建物Ｓ.Ｂ－８が約18m離れた地点で検出されていたことから、その北側の有無を確認するために調査区を設定したものである。

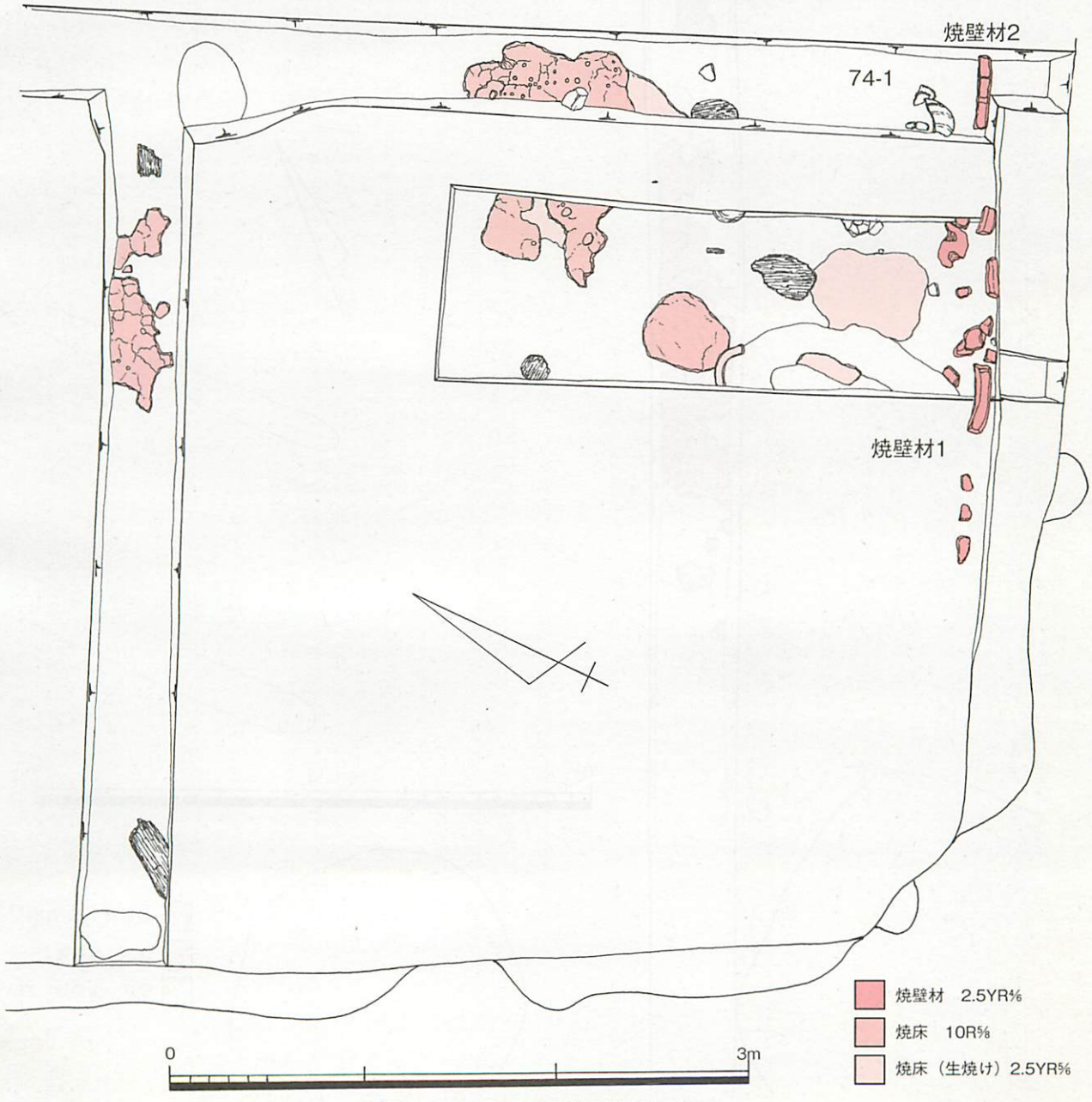


① 灰褐色粘質土　5YR4/1（1cm～5mmの砂礫含む）
② 暗黒褐色粘質土　7.5YR3/2（5mm～3cmの礫含む）
③ 茶褐色粘質土　5YR4/1（1cm～20cm大の石含む）
④ 灰黄褐色砂含粘質土　10YR4/1
⑤ 暗黄灰色砂土　10YR4/2
⑥ 暗灰褐色砂含土　7.5YR4/1
⑦ 赤褐色粘質土5YR4/4（5mm～2cmの砂礫含む）
⑧ 明灰白色砂土　7.5YR8/2（焼土粒含）
⑨ 灰褐色砂含粘質土　2.5YR4/1（焼土粒含）
⑩ 黄褐色シルト　10YR5/6
⑪ 灰白黄色粘質土　10YR8/1
⑫ 黄灰色地山ブロック　10YR5/6
⑬ 灰褐色砂土　7.5YR4/1
⑭ 黄灰色シルト　10YR5/2
⑮ 暗黄褐色シルト　10YR3/4
⑯ 黒褐色粘質土　7.5YR3/2（焼土粒多く含）
⑰ 灰白黄色粘質土　10YR8/1
⑱ 灰黄褐色粘質土　10YR4/2
⑲ 灰褐色砂土　7.5YR4/1
⑳ 赤黒褐色粘質土　10R3/1
㉑ 赤褐色粘質土　2.5YR4/6
㉒ 暗赤褐色粘質土　2.5YR3/6
㉓ 赤混黄褐色粘質土　7.5YR4/6
㉔ 暗灰色砂土　2.5YR3/1
㉕ 赤褐色粘質土　2.5YR4/6（焼土粒多く含）
㉖ 黄混褐色シルト　2.5Y5/3
㉗ 炭層
㉘ 焼床土　10R5/6
㉙ 明黄色砂土　10YR6/4
㉚ 焼土塊



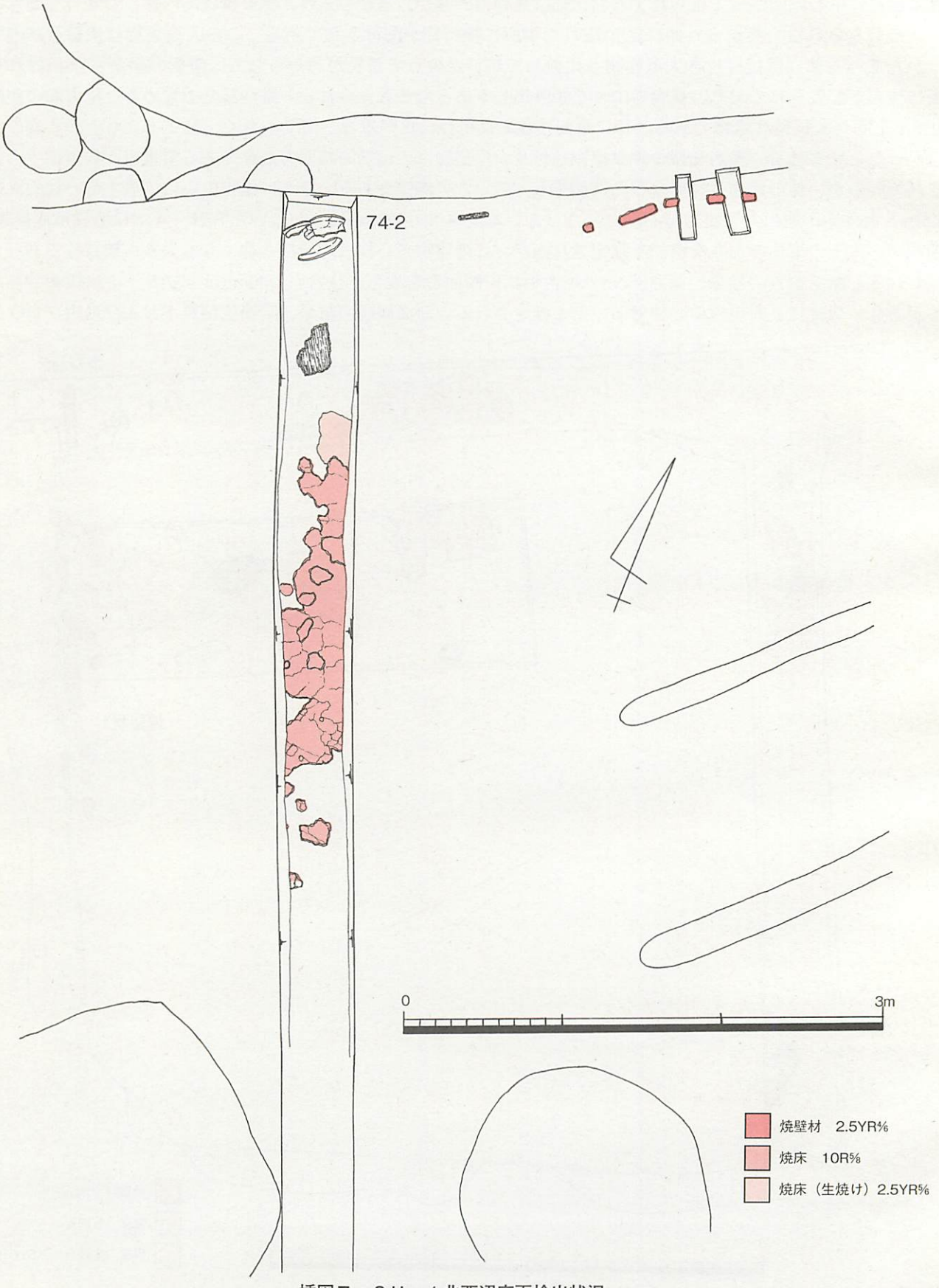
挿図５　Ｔ－１ＳＨ－１平面図・断面図

ＳＢ－12　Ｔ－２中央において独立棟持柱付き大型建物ＳＢ－12を検出した。１間×５間、梁行５ｍ、桁行約９ｍ、床面積約45㎡の大型建物である。北側の棟持柱はＳＨ－３に一部切られていたが、サブトレンチを入れ柱穴の輪郭を捉えた。棟持柱は長径約1.6m、短径0.8mを測る楕円形で、建物に向かって幅広くなっている。.桁柱も長径１～1.6m、幅50～90cmを測る楕円形で、建物に向かって幅広い堀方となっている。伊勢遺跡の大型建物は概ね斜路をもつ堀方の柱穴が一般的であるが、大きくて長い柱を落とし込み建てあげるためと考えられる。斜路は建物の中心に向かって掘られており、柱は建物の外側から落とし込み、縄を掛けて内側にむかって建てあげられたとみられる。梁から外側に2.3m離れた場所に棟持柱が配置されている。この大型建物は伊勢遺跡内で見つかっている独立棟持柱付き大型建物と比較して幾つかの点で差異が認められる。南側の梁から1.5m離れた位置に柱穴が配置されており、露台のような張り出しがあったと考えられる。露台部分を含めると桁方向の距離は10.5mを測り大規模な建物である。特に東側の柱穴は桁柱に比べると一回り小さく、軒まで立ち上がるものではなかったと見られる。露台を持つ独立棟持柱付き大型建物は、ほぼ同時期の遺跡である栗東市下鉤遺跡でも発見されているが、他の建物とは異なった機能をもっていた可能性がある。さらに建物中心に位置する心柱の直径が1.5mと大きく、他の大型建物の心柱と異なっている。すべての柱が残存していたＳＢ－４では心柱は直径20cm前後で、床下の束柱のような機能と推定されるが、この建物の心柱は両棟持ち柱よりも大きな棟持柱であったと思われる。断ち割りの結果、深さ85cmで逆台形状の断面形をもち、柱穴底が40cmほどフラットに成形された痕跡があり、棟持柱と同規模の心柱であったと推定される。断面観察の結果、暗褐色粘質土および地山ブロックの



挿図６　ＳＨ－１南隅床面検出状況

レンズ状の堆積が認められ建物廃絶後、柱は抜き取られたと考えられる。柱穴がまた、東側桁柱列の北隅の柱穴は他の柱間距離よりも20cmほど広くなっており、やや台形状の平面プランとなっている。この位置に入り口が設定されたためであろうか。伊勢遺跡内の独立棟持柱付き大型建物は柱穴距離や形状において規格的であるが、やや歪みをもつ点でも異なっている。露台の南東側には不定形の落ち込みがあり焼土が残存していたが、ＳＢ－12と係わりがあるか不明である。



挿図７　ＳＨ－１北西辺床面検出状況

ＳＨ－３　ＳＢ－12の北側で、棟持柱を切る竪穴住居ＳＢ－３を検出した。一辺５ｍを測る方形プランの竪穴住居で、伊勢遺跡内部ではやや小型といえる。暗黒褐色粘質土（7.5YR2/1）の堆積がみられた。サブトレンチ掘削時に受口状口縁甕の口縁部（74-16）が出土しているが、口縁部外面は無文で、肩部にやや斜め方向の刷毛目が残るものである。古墳時代初頭の竪穴住居である可能性が高い。

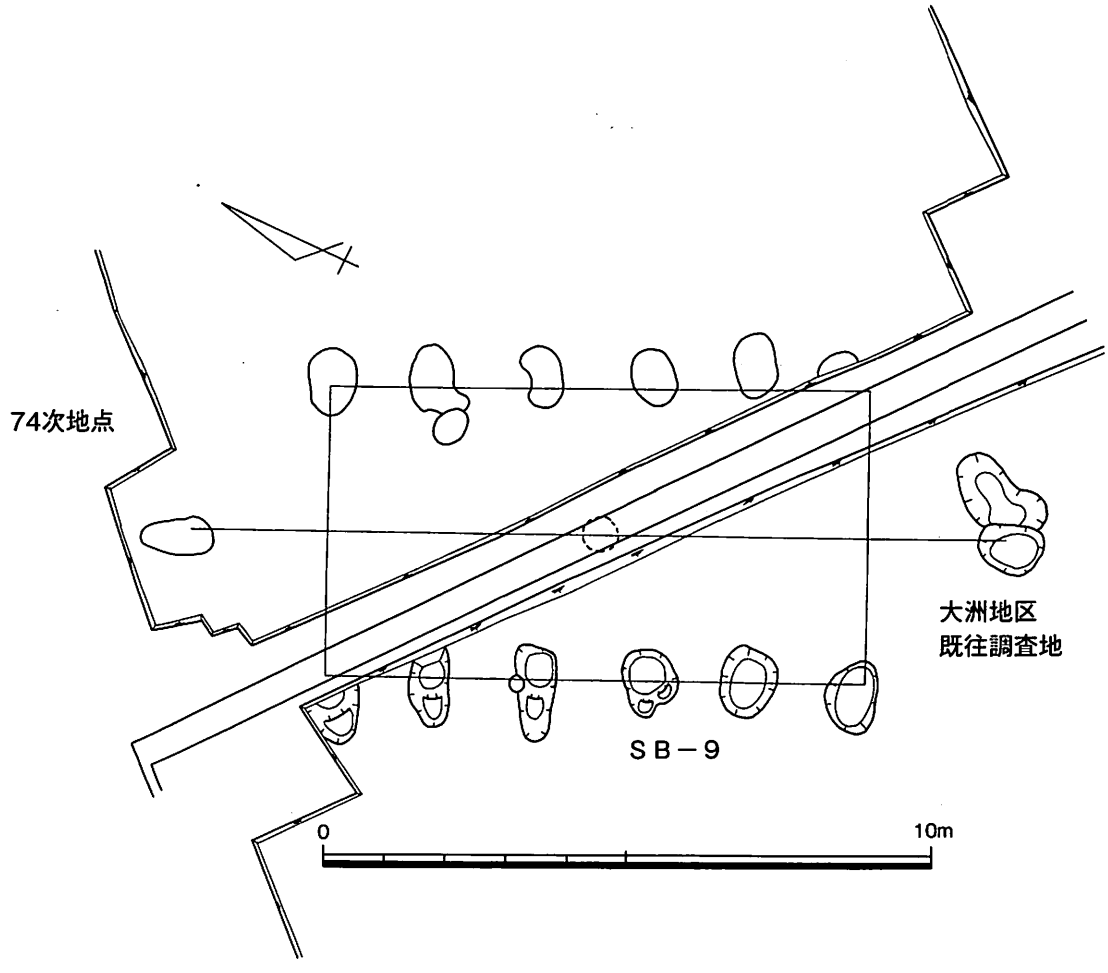
ＳＤ－１　ＳＨ－３の南辺に平行して長さ3.8m、幅15cmの直線的にのびる小溝を検出した。埋土は暗茶褐色粘質土（7.5YR3/2）で弥生後期の一連の遺構と同質である。竪穴住居から約３ｍ離れた位置にあり、ＳＨ－３に係わりをもつ遺構の可能性がある。

調査区の東側には灰褐色粘土の不定形な堆積がみられたが、大型建物が切り込んでおり、地形的に低くなった部分に堆積した粘土とみられ地山と理解できる。この他、不定形の落ち込みや中近世の遺構とみられる灰白色の柱穴が検出されたが、建物等を復元するには至らなかった。

Ｔ－３　Ｔ－２の調査で想定通りＳＢ－12が検出されたことから、さらにその西側に建物が存在するかどうか確認するためトレンチを設定した。

ＳＢ－Ａ　平面検出の結果、６個の柱穴を検出した。直径70～90cmを測る円形の柱穴で、大型建物の柱穴である可能性がある。Ｐ－１は大型建物ＳＢ－12の棟持柱から約18m離れた地点にあたる。柱穴内には黒褐色粘質土の堆積がいずれもみられ、弥生後期の遺構と推定される。Ｐ－１～３は直線的に並び、柱間距離は約２ｍを測る。Ｐ－４～６は直線的に並ぶが、柱間距離は３～3.4mと広く不揃いである。建物が想定されるとすればＰ－１～３の並びであると推定される。しかし、円形の掘方をもつ大型建物は独立棟持柱付き建物ではなく、栗東市野尻地区ＳＢ－６のような屋内棟持柱付大型建物など異なった建物ではないかとおもわれる。Ｐ－１～３を桁柱列とみれば、Ｐ－６やＰ－４は屋内棟持柱である可能性もある。いずれにしても、独立棟持柱をもつ建物とは異なった建物である蓋然性が高い。

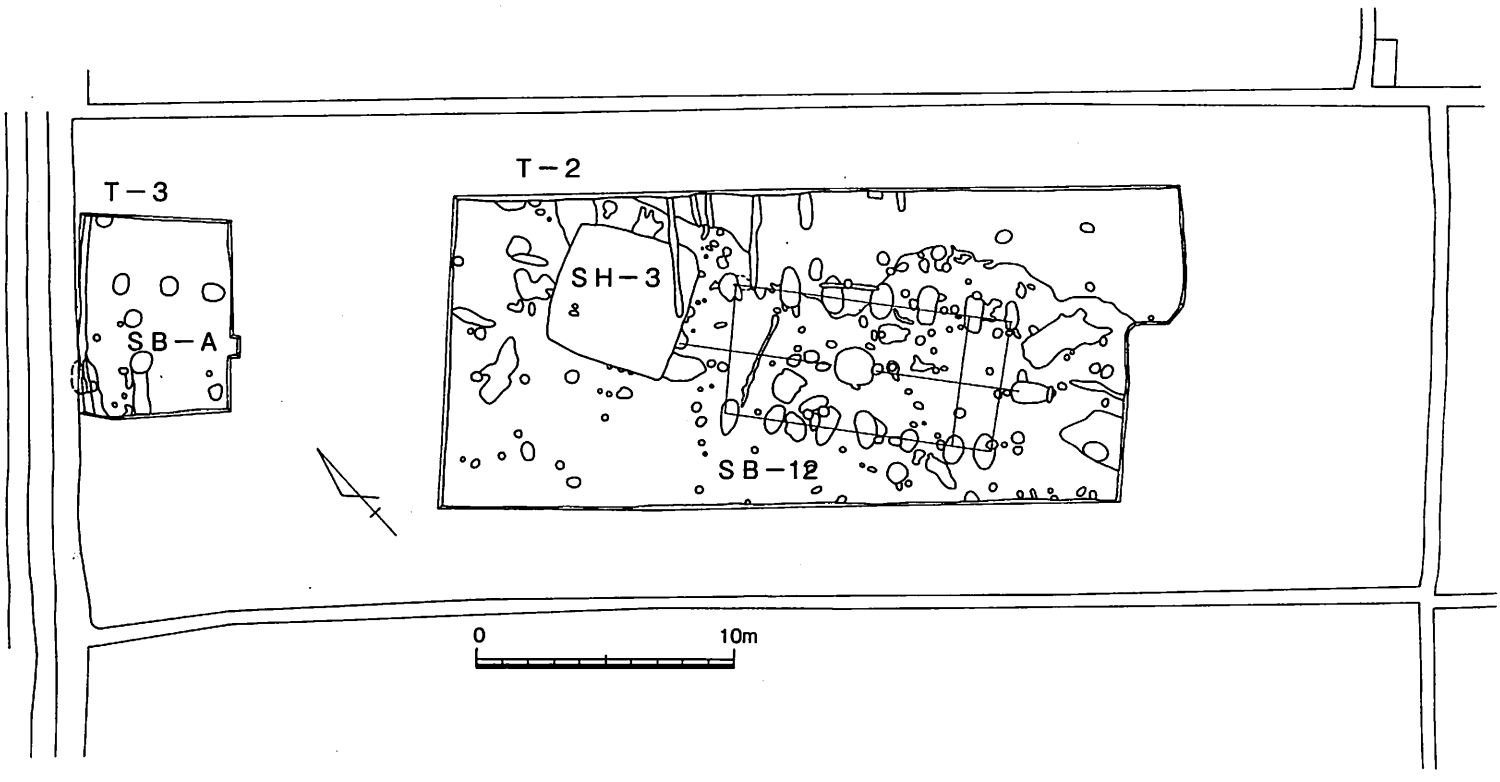
調査区の北西隅は近現代の水路跡が検出され、その肩口にも柱穴とみられる落ち込みが一部に見られた。



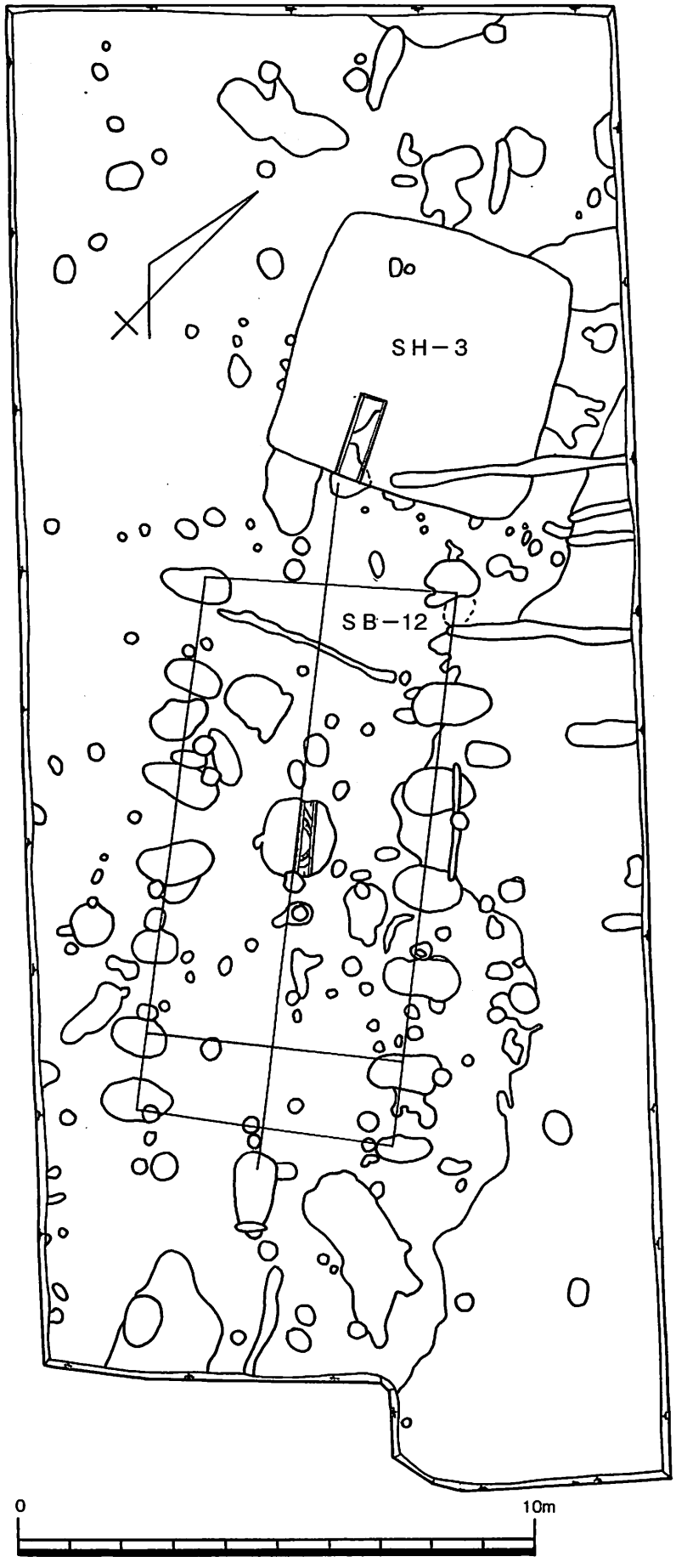
挿図８　Ｔ－１　ＳＢ－９検出状況

3、出土した遺物

今回の調査では大型竪穴建物を中心に幾つかの遺物が出土した。以下、出土遺構及び層位別に出土遺物について概観する。74-1は十字サブトレンチの南壁際の床面より出土した壺である。球型の体部に垂直に立ち上がる頸部が付く長頸壺とみられる。頸部付け根に貼付突帯が付けられ、刻目が施される。体部下半にも貼付突帯が付けられ、受口状口縁甕と同じく縦方向の刻目の後、ヘラ工具による横方向の沈線を加え中央分割している。体部には板小口による直線文と列点文からなる単位文を３段に施し、最下段には波状文が加えられている。頸部外面及び体部下半部には縦方向の刷毛目調整がみられ、内面は指ナデによる調整が観察された。頸部内面には体部との間につなぎ痕が残る。形態的には弥生後期に典型的な長頸壺であるが、文様構成および調整手法は受口状口縁甕と同じく在地の土器製作技術と共通する手法によっており、個性的な土器と言える。内外面ともに赤橙色に焼かれている。74-2は十字サブトレンチの北壁際で出土した土器である。３つに割れた口縁部を重ね、壁際に片づけられた状態で出土したもので、口縁径46cmを測る大型の鉢である。浅い椀状の体部から屈曲し、短く外上方へ伸びる口縁部が付く。口縁端部は小さな面を持ち、下端部がやや肥厚する。外面は荒い斜め横方向の刷毛で調整され、内面は横方向の刷毛調整の後、縦方向のヘラ磨きが加えられている。弥生後期の大型鉢の場合、液体を入れるためか片口であるものが多いが、本遺物も片口であった可能性がある。74-3～5は南壁沿いのサブトレンチ床面から出土した遺物である。74-3は受口状口縁甕で、短く外反する第１口縁から屈曲し、やや内傾気味に立ち上がる第２口縁部からなる。口縁部はシャープさに欠け、丸みをもって調整されている。口縁部外面及び肩部に縦方向の列点文が施されている。形状からみて野洲川流域に典型的な在地の甕ではないと思われる。74-4は受口状口縁甕の体部下半の一部で、貼付突帯が残る。右上がり方向に刻みを施し、ヘラ沈線で中央を２分割している。74-5は甕底部とみられる。突出しない小さなドーナツ状のあげ底である。74-6～12はサブトレンチ掘削時に下層より出土した土器群である。74-6は短頸壺の口縁部である。絞られた頸部から短く外上方へ直線的に立ち上がる口縁部が付く。端部は尖頭状に収められ、口頸部内外面に指頭痕が残る。74-7～10は受口状口縁甕の口縁部である。74-7は第２口縁部が垂直に立ち上がり、内斜する端面をもち外側にやや肥厚する。口縁部下端に列点文が施され、肩部に列点文、直線文が観察される。頸部外面に荒い刷毛目が観察され、体部内面に指頭痕が残る。形態・調整は在地の典型的な特徴を示している。74-8は頸部の立ち上がりが短く、第１口縁部が外上方に直線的に伸び、第



挿図９　伊勢遺跡74次調査Ｔ－２・３平面図



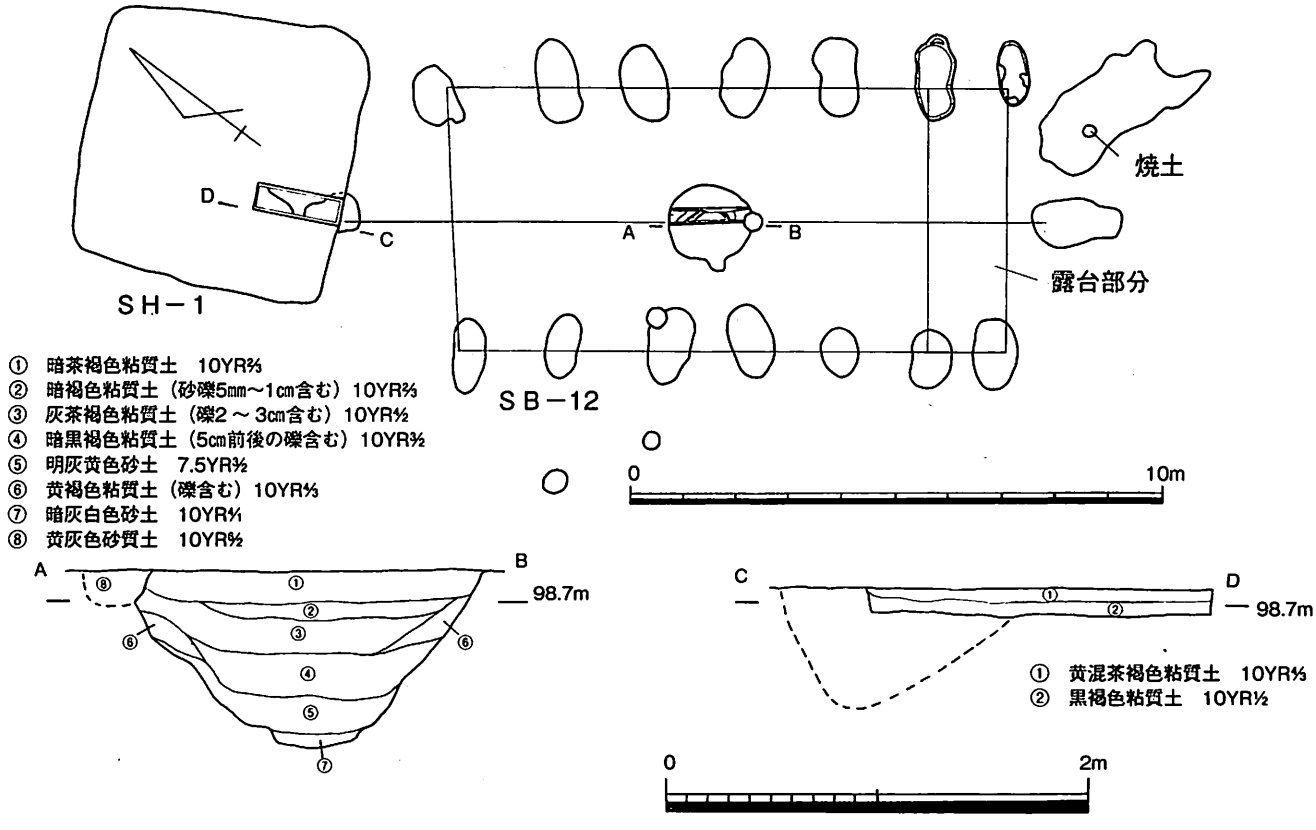
挿図10　伊勢遺跡74次調査Ｔ－２平面図

２口縁部がやや内傾し立ち上がる。端部内面がやや肥厚する。口縁部下端に列点文が施され、肩部には直線文が観察される。体部内面に指頭痕が残る。74-9は水平に伸びる第１口縁部から外上方に立ち上がる第２口縁部が付く。端部は外方にややつまみだされており、形態的にはやや新しい要素と言える。74-10は絞られた頸部から短く外上方に伸びる第１口縁部と緩やかに屈曲し、外上方に立ち上がる第２口縁部からなる。端部は外方へややつまみだされている。口縁部外面、肩部は無文で、形式的に新しい要素を示している。74-11は高杯脚部で絞られた脚中部から緩やかに開脚する。３方透かしで、内面に横刷毛が残る。74-12は器台脚中部で、中空部が広い筒状の体部から緩やかに開脚する。端部は尖頭状に収められる。体部に３方透かしがみられ、外面にヘラ磨きが僅かに観察される。74-13は中・下層の茶褐色粘質土層より出土した器台口縁部である。外上方へ直線的に伸びる口縁部で、両端部は肥厚する。口縁端部には４本１単位の棒状浮文が施されている。形態的に古墳時代初頭の新しい要素を持つ個体である。74-14～16は中層より出土した遺物である。74-14は小型丸底壺で、小さな扁平球型の体部から外上方に直線的に伸びる口縁部が付く。端部は尖頭状に収められている。口縁部内面に細かい横方向の刷毛が観察される。74-15は壺底部で、やや突出する平底である。74-16は短く外上方に伸びる第１口縁部から緩やかに屈曲して外上方に伸びる第２口縁からなる受口状口縁甕である。口縁部の稜線は甘く、端部は外斜する面をもって終わる。口縁部から肩部にかけては無文で、肩部に斜方向の刷毛目が観察される。床面上で出土した土器は弥生後期中葉の古い形式を残しているが、中・下層出土の土器は古墳時代初頭から古墳時代前期の古段階の特徴を示す土器が多くみられ、大型竪穴建物が廃絶した後、長い間完全に埋まりきっていなかったとみられる。

74-17・18は大型竪穴建物の中・下層の埋土内より出土したサヌカイト製の石鏃である。二点とも有基式の石鏃で、74-17は長径3.5cmとやや大型の石鏃である。大洲地区から東中浦地区にかけて縄文時代後期の遺構や遺物が見つかっていることから、大型竪穴建物に伴う遺物ではなく混入品とみられる。

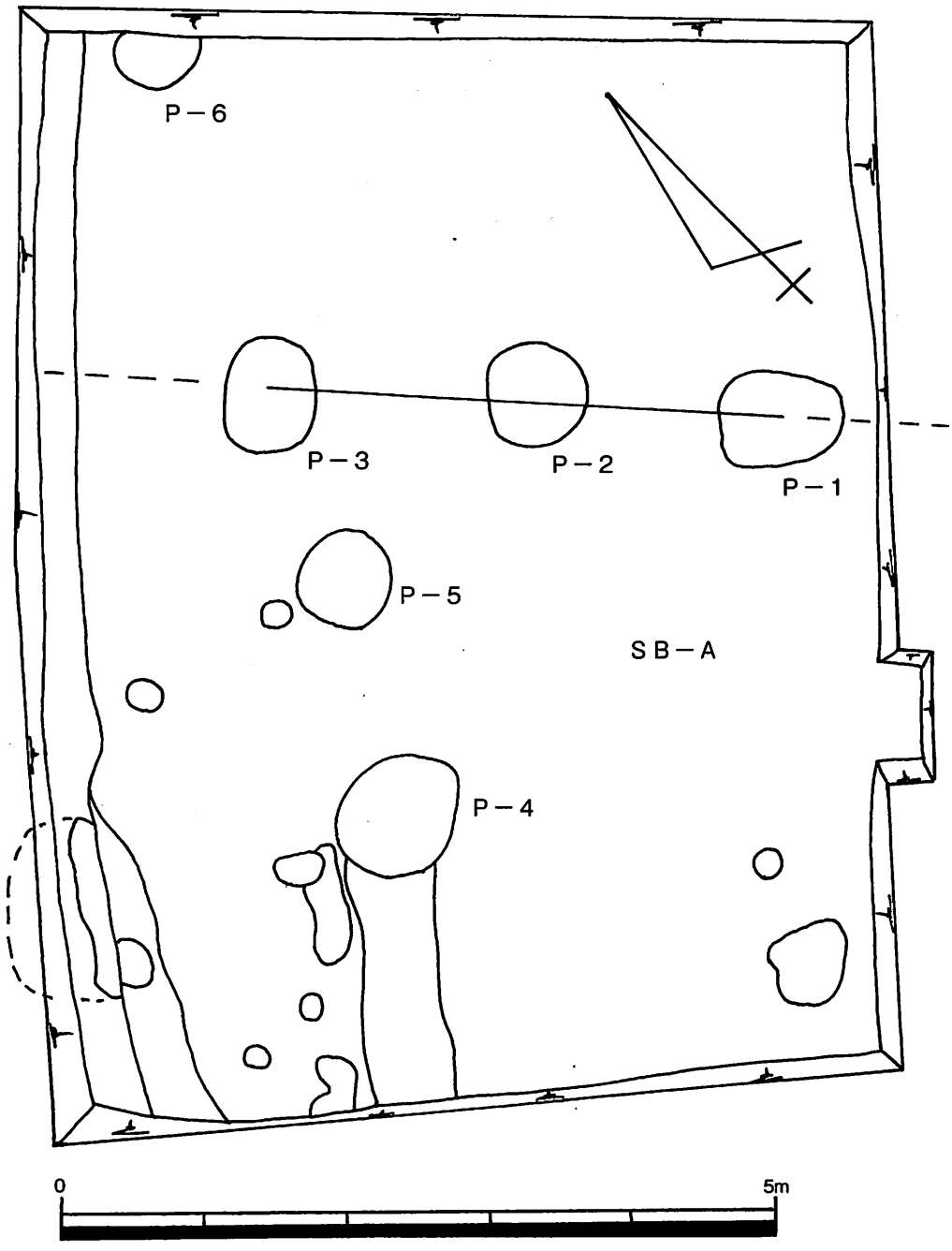
ＳＢ－９の北側の棟持柱Ｐ－１より甕の体部とみられる74-19が見つかった。柱穴の平面検出時に出土したもので、大型建物の廃絶過程で混入した遺物とみられる。倒鐘形の体部で、底部は尖頭状に収められている。底部外面は荒いヘラ削りが施されており、内面は板小口による調整痕がみられる。形態･調整ともに粗い仕上がりで、在地の土器とはみられない。

Ｔ－１の平面検出に伴って74-20～30までの土器が出土した。遺構面上に５～10cmの茶褐色粘土の遺物包含層

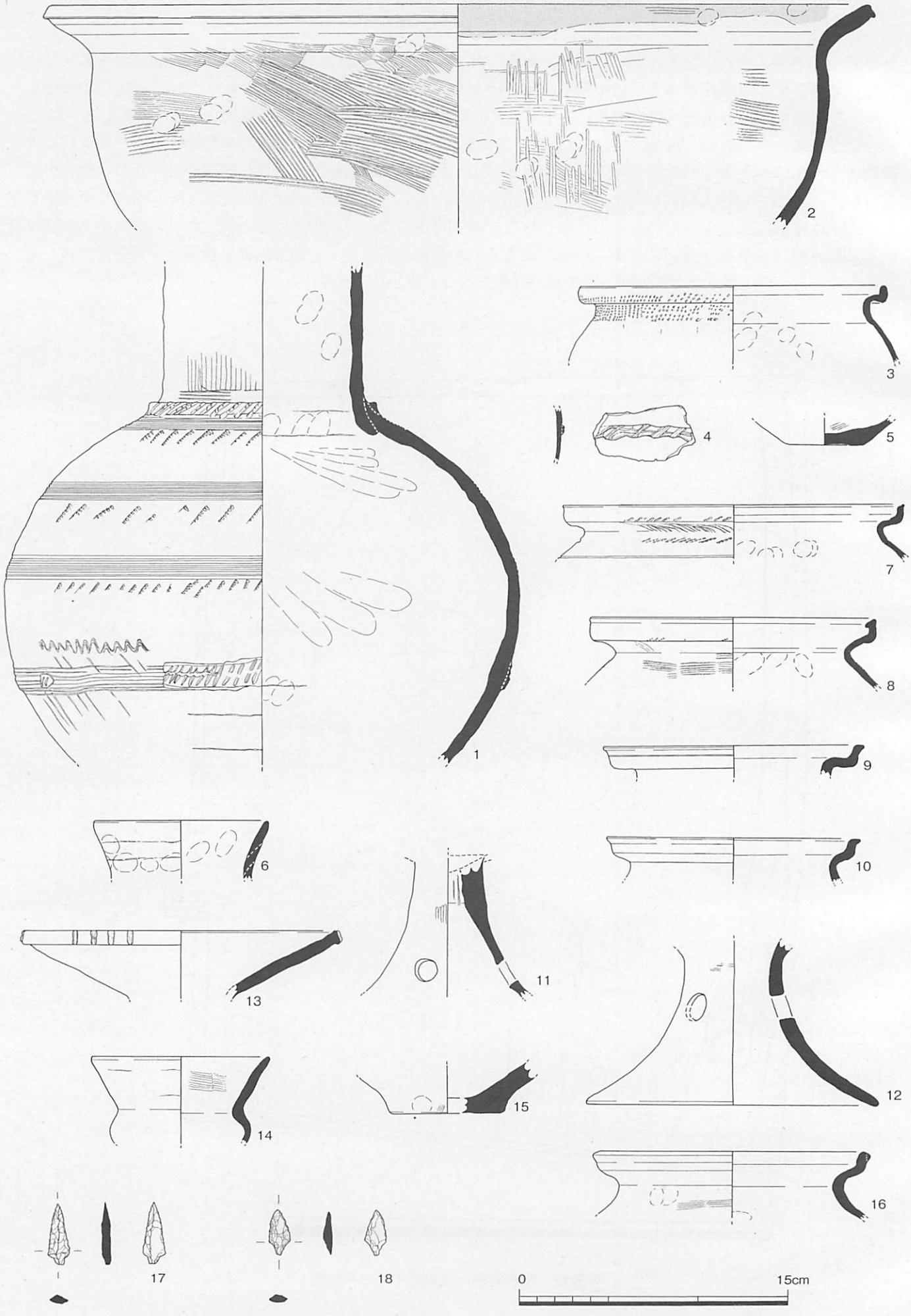


挿図11　伊勢遺跡74次調査ＳＢ－２平面図・断面図

が堆積しており、それに含まれていた遺物である。74-20は二重口縁壺の口縁部で、絞られた頸部から外反したのち長く外反する口縁部がつく。口縁頸部に強い稜をもち、端部は円頭状に収められる。74-21は広口加飾壺とみられ、口縁端部が外下方へ長方形状に垂下する。外面には細かい櫛工具による波状文が施されている。74-22～26は壺底部とみられる。74-22・23・25は突出する平底の底部である。74-24・26はやや突出するドーナツ状の上げ底で、外面にヘラ磨きが観察される。74-27・28は受口状口縁甕の口縁部で、伴に稜線が甘く新しい様相を示している。74-27の口縁上端面は外下方につまみ出されている。74-28は短く外上方に屈曲する口縁部で肩部が張り、体部は球形に近くなっているものと思われる。74-29は小さな上げ底の甕底部と見られ、外面に刷毛調整が残る。74-30はくの字状の甕口縁部で、端部は面をもち両端部が肥厚する。頸部内面に横刷毛が観察される。形状からみて在地の土器とはみられず、やや古い様相をもつ土器とみられる。

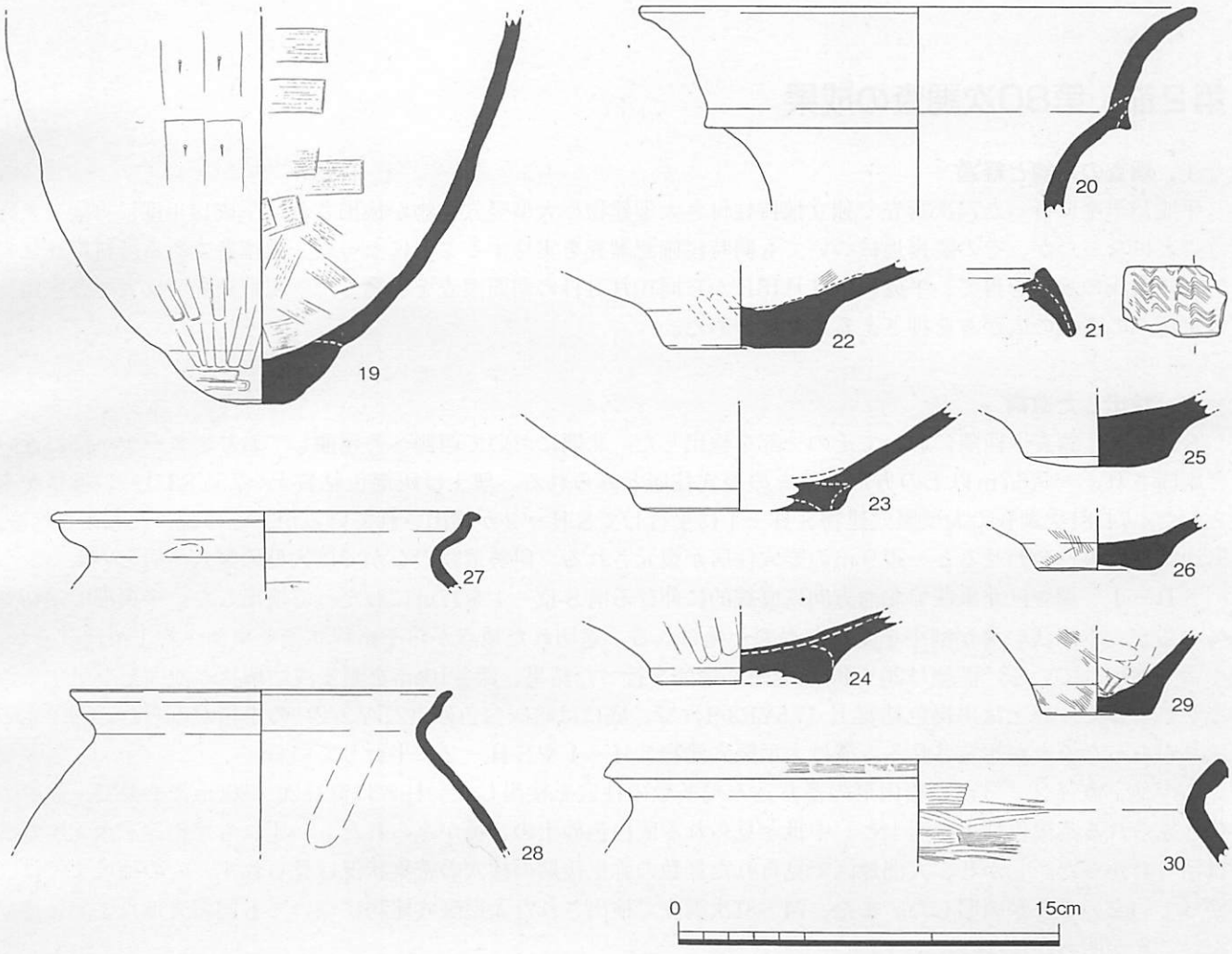


挿図12　伊勢遺跡74次調査Ｔ－３平面図



挿図13　伊勢遺跡74次調査出土遺物実測図

大型竪穴建物　床面（1～5）　下層（6～12）
中・下層（13～16）　下層（17、18）



挿図14　伊勢遺跡74次調査出土遺物実測図　　ＳＢ－１・Ｐ－１（19）平面検出（21～30）

床面および下層から出土した土器は弥生時代後期中葉の様相をもち、竪穴建物の年代に近い遺物とみられる。埋土中から出土した遺物は、縄文時代の石鏃とみられる遺物もあり、さらには古墳時代初頭から前期の新しい遺物も含まれている。平面検出時に出土した土器は、古墳時代前期後葉の様相をもつものが最も新しく、遺跡の廃絶期の年代を示していると思われる。

４、調査成果のまとめ

今回の調査成果を以下列挙し、まとめとしたい。１、平成７年度にその存在が予想された独立棟持柱付大型建物ＳＢ－９の全体像が明らかになった。その規模は１間×５間で、梁行4.5m、桁行９m、床面積約40㎡を測る大型建物である。残念ながら中央の心柱の規模については確認できなかった。棟持柱は梁から2.25m離れた位置にあり、梁行の1/2の距離にあたる。ＳＢ－９は伊勢遺跡内で発見されている独立棟持柱付大型建物の標準サイズといえる。２、ＳＢ－９に平行して大型竪穴建物を検出した。一辺13.5m、床面積185㎡を測り、伊勢遺跡内部では最大規模の構造物であることが判明した。一部掘削調査を行った結果、壁際に板状の焼壁材を縦方向に置き、床面の一部に精良な粘土を貼り、表面を赤橙色に焼いた特殊な施設をもつ竪穴建物であることが判明した。床面より出土した土器から弥生時代後期中葉の竪穴建物であることが判明した。３、ＳＢ－９から北へ約18m離れた地点で独立棟持柱付大型建物ＳＢ－12を新たに検出した。この建物は１間×５間、梁行５m、桁行９m、床面積約45㎡を測る大型建物で、南側の梁に露台をもつことがわかった。また、心柱が通常より大きく、両サイドの棟持柱と同じ規模をもつことが推定された。大洲地区で発見されたＳＢ－８、ＳＢ－９、ＳＢ－12の３棟の独立棟持柱付き大型建物は、棟持柱の心々距離が18.4m離れて建てられていること、さらに棟方向を８°西側に振りながら円弧状に配置していることが判明した。何らかの計画的な配置原理、測量技術が存在するとみられる。４、ＳＢ－12より北西に18m離れた地点で大型建物とみられる柱穴を６個検出した。柱穴の規模・形状からみて独立棟持柱建物ではなく、屋内に棟持柱をもつ野尻地区ＳＢ－６に似た建物であった可能性が高い。

大型竪穴建物については一部の掘削にとどまったため、床や壁面の構造や主柱穴配置など不明な点が多く、今後の調査に期待される。

第２節　第80次調査の成果

１、調査の経緯と経過

平成13年度に行った74次調査で独立棟持柱付き大型建物や大型竪穴建物が検出され、平成14年度に再調査を行うことになったが、その隣接地についても同時に確認調査を実施することになった。地権者である阿村町在住の竹中昭蔵氏の承諾を得て、平成14年９月18日から同10月31日の期間調査を実施した。現地調査では大型竪穴建物の東側への遺構の広がりを押さえることに努めた。

２、検出した遺構

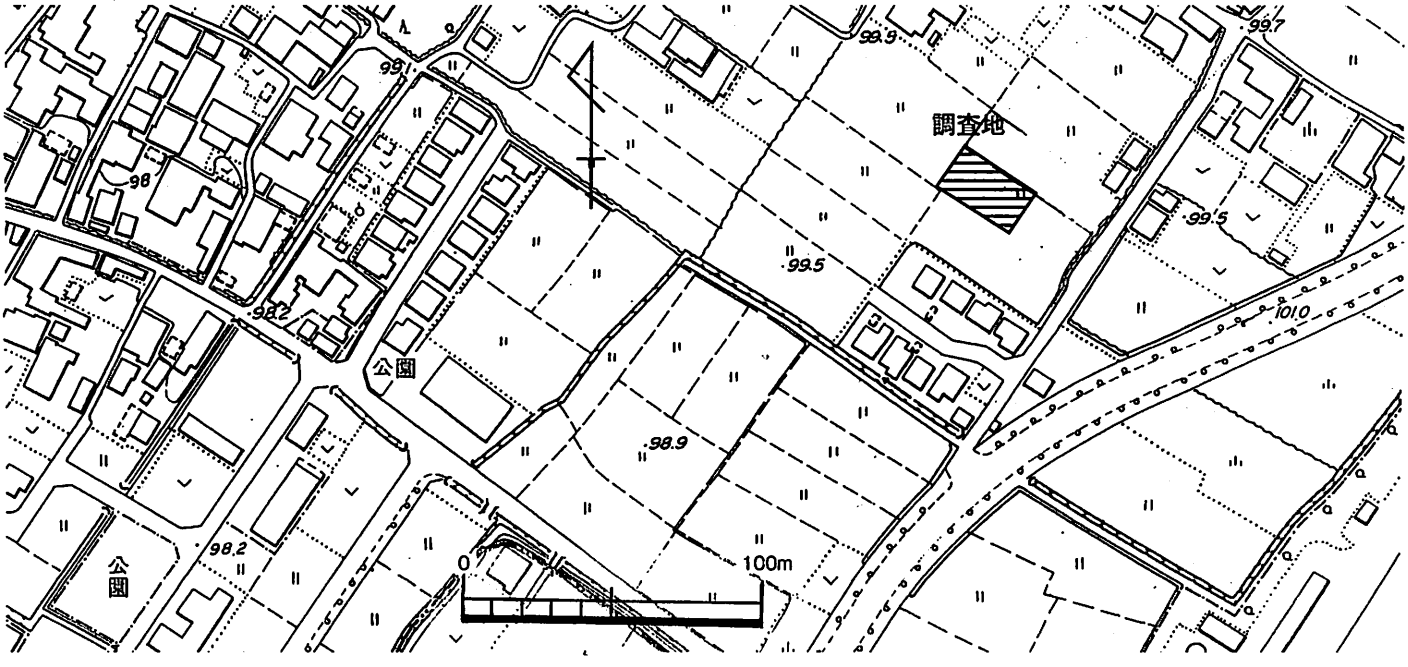
ＳＨ－２　調査区西隅においてその一部を検出した。北隅において西側へと屈曲しており、コーナー部に近いと判断され、一辺6.7m以上の方形プランの竪穴住居とみられる。埋土は灰褐色粘質土（7.5YR3/1）の堆積がみられた。74･81次調査で大型竪穴建物ＳＨ－１に平行してＳＨ－２が検出されているが、その続きと考えられる。81次調査成果と合わせると一辺９mの竪穴住居が復元される。伊勢遺跡のなかでは大型の竪穴住居といえる。

ＳＤ－１　調査区北東側で北西方向に直線的に伸びる溝ＳＤ－１を17mにわたって検出した。中央部で途切れているが、本来浅い溝が削平を受けたものと見られる。途切れた地点から１m程北側で東側へ約１m伸びるが、やはり途切れている。溝幅は20～40cmで一部掘削を行った結果、深さ10cmを測る浅い椀状の断面形を呈することがわかった。埋土は黒褐色粘質土（7.5YR3/1）で、底には暗灰白色砂（2.5Y2/2）の堆積がみられ、若干水の流れがあったことが想定される。溝は大型竪穴建物ＳＨ－１やＳＨ－２に平行している。

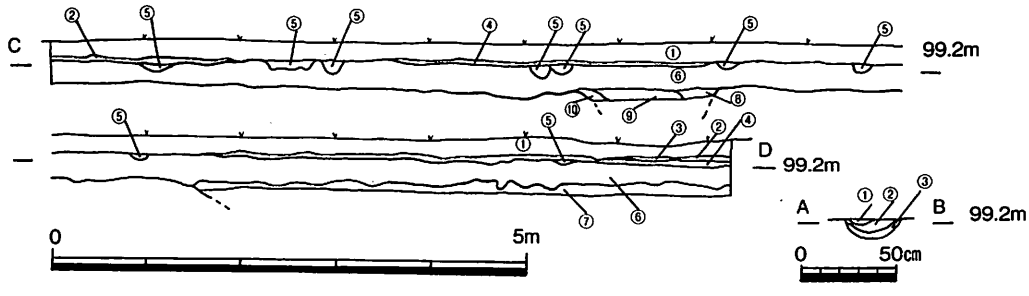
この他、直径２～３mの楕円形の落ち込みや多数の柱穴を検出した。柱穴は直径20～30cmと小型で、弥生時代と見られる茶褐色粘土の埋土と、中世と見られる灰白色砂土の２種がみられた。いずれも建物等を復元するには至らなかった。しかし、大洲地区で見られた無数の弥生後期の柱穴の密集状況は見られず、この地域までは広がっていないことが判明した。また、74・81次調査で検出された大型竪穴建物についても同調査地点までは伸びないことが明らかになった。

３、調査成果のまとめ

今回の調査では大型竪穴建物の北東側の様子が判明した。大洲地区の中では遺構密度が少なく、中心部から離れていることがわかる。同地点の南側で平成16年度に実施した96次調査（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ　平成19年３月刊）では、ＳＤ－１の続き部分が検出されているが、これに平行して幅３～４mの区画溝が検出されている。この２つの溝は約12m離れて弧状に伸びていることが判明している。大洲地区で独立棟持柱付き大型建物が弧状に配置されていることがわかっているが、ＳＤ－１はそれに沿って伸びる区画溝の一部と考えられる。ＳＨ－１及び大型竪穴建物は溝に平行しており、建物配置の軸線があったとおもわれる。



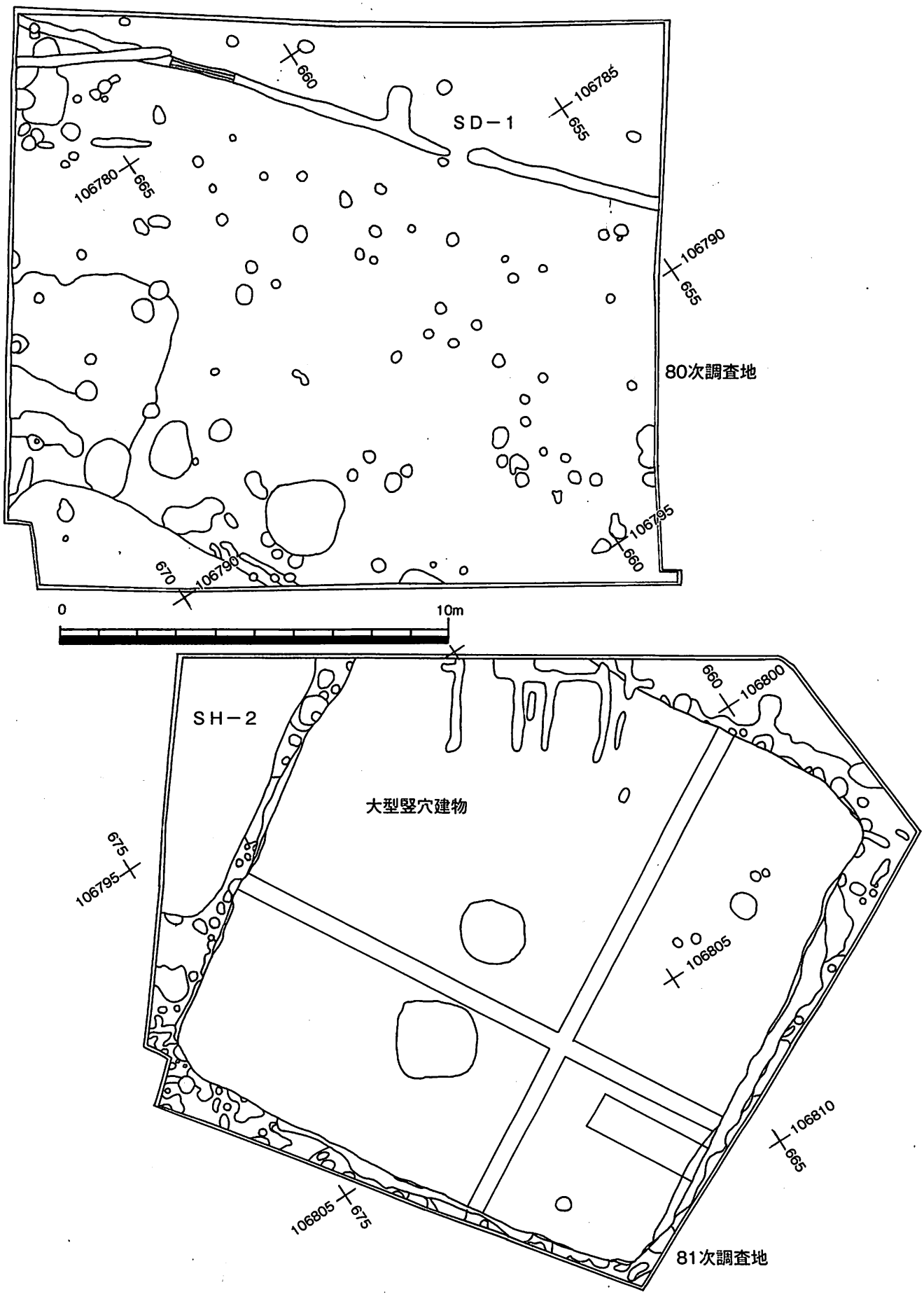
挿図15　伊勢遺跡80次調査位置図



① 耕土
② 床土
③ 黄灰色砂土（5Y⅝）
④ 黄混褐色砂土（10YR⅝）
⑤ 灰黄色砂土（2.5Y⅝）
⑥ 暗茶褐色粘質土　10YR⅜
（砂礫多く含む）
⑦ 暗灰褐色粘質土　7.5YR¾
⑧ 暗黒褐色粘質土　10YR¾
⑨ 灰褐色砂礫含粘質土（2.5Y¼）
⑩ 暗灰褐色砂含粘質土（10YR¼）

① 黄褐色粘質土（10YR⅝）
② 黒褐色粘質土（7.5YR¾）
③ 暗灰白色砂層（2.5Y⅞）

挿図16　伊勢遺跡80次調査平面図・断面図

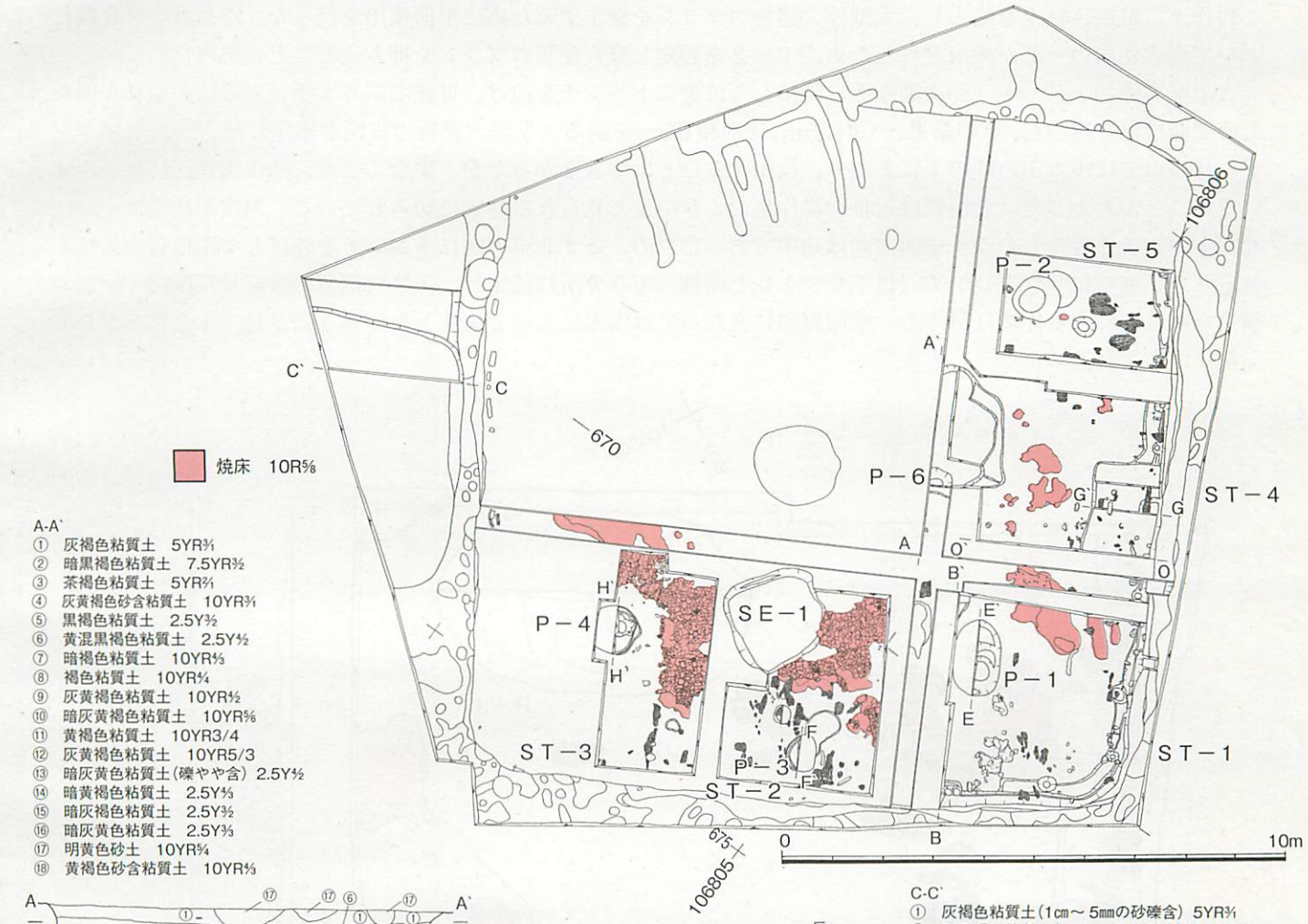


挿図17　伊勢遺跡80・81次調査平面図

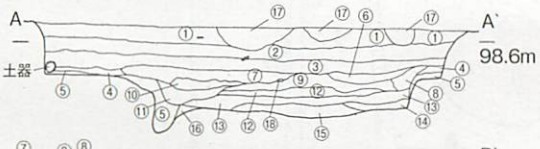
第３節　第81次調査の成果

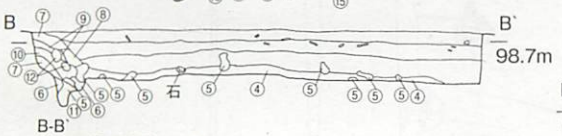
１、調査の経緯と経過

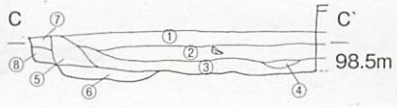
平成13年度に行った74次調査では大型竪穴建物が検出されたが、この大型建物の構造や性格が判然としないため、地権者である今井孝雄氏の承諾を受けて再調査を行うことになった。再調査では、滋賀県教育委員会の指導を受け、竪穴建物の床面を検出し、柱穴配置や床面の構造を明らかにすることに努めた。現地調査は平成14年10



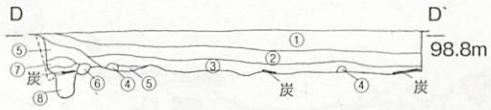
A-A`
① 灰褐色粘質土　5YR3/1
② 暗黒褐色粘質土　7.5YR3/2
③ 茶褐色粘質土　5YR3/2
④ 灰黄褐色砂含粘質土　10YR3/1
⑤ 黒褐色粘質土　2.5Y3/2
⑥ 黄混黒褐色粘質土　2.5Y1/2
⑦ 暗褐色粘質土　10YR4/3
⑧ 褐色粘質土　10YR5/4
⑨ 灰黄褐色粘質土　10YR4/2
⑩ 暗灰黄褐色粘質土　10YR5/6
⑪ 黄褐色粘質土　10YR3/4
⑫ 灰黄褐色粘質土　10YR5/3
⑬ 暗灰黄色粘質土(礫やや含) 2.5Y4/2
⑭ 暗黄褐色粘質土　2.5Y5/3
⑮ 暗灰褐色粘質土　2.5Y3/2
⑯ 暗灰黄色粘質土　2.5Y3/3
⑰ 明黄色砂土　10YR5/4
⑱ 黄褐色砂含粘質土　10YR5/3





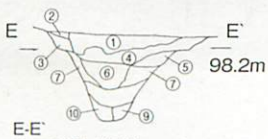


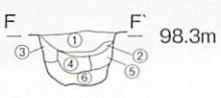
C-C`
① 灰褐色粘質土(1cm～5mmの砂礫含) 5YR3/1
② 暗黒褐色粘質土(5mm～3cmの礫含) 7.5YR3/2
③ 茶褐色粘質土(1cm～20cm大の石含) 5YR3/1
④ 灰茶褐色粘質土　7.5YR3/2
⑤ 暗黄褐色粘質土　5YR3/1
⑥ 淡灰褐色砂土　2.5Y4/1
⑦ 明黒褐色粘質土　10YR3/2
⑧ 灰茶色砂土　10YR3/3

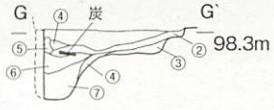


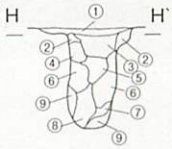
D-D`
① 灰褐色粘質土(1cm～5mmの砂礫含) 5YR3/1
② 暗黒褐色粘質土(5mm～3cmの礫含) 7.5YR3/2
③ 茶褐色粘質土(1cm～20cm大の石含) 5YR3/1
④ 黄灰色シルト 2.5Y5/4
⑤ 暗褐色粘質土(砂含) 10YR3/3
⑥ 灰茶褐色砂含土(炭多含) 7.5YR3/1
⑦ 暗茶褐色砂含粘質土　10YR3/3
⑧ 暗黄褐色粘質土　2.5Y3/2

B-B`
① 灰褐色粘質土　5YR3/1
(1cm～5mmの砂礫含)
② 暗黒褐色粘質土　7.5YR3/2
(5mm～3cmの礫・土器片多く含)
③ 茶褐色粘質土　5YR3/1
④ 灰黄褐色砂含粘質土　10YR3/1
⑤ 黄褐色砂含粘質土　10YR3/3
⑥ 暗褐色粘質土　10YR3/3
⑦ 黒褐色粘質土　7.5YR3/2
(砂礫・炭含)
⑧ 暗褐色粘質土　10YR3/3
⑨ 黒褐色粘質土　7.5YR3/2
⑩ 赤褐色粘質土　5YR3/4
⑪ 暗黒褐色混赤色粘質土　10YR3/2
⑫ レンガ状焼土塊









E-E`
① 暗褐色粘質土　10YR3/3
(砂礫含)
② 黄褐色砂含粘質土　2.5Y5/4
③ 灰黄褐色粘質土　10YR4/2
④ 黄混灰褐色粘質土　10YR4/2
⑤ 黒褐色粘質土　10YR3/2
⑥ 暗黒褐色粘質土　10YR3/2
⑦ 暗灰褐色粘質土　10YR3/3
⑧ 灰黄色粗砂含土　5Y5/1
⑨ 暗黄褐色粘質土　2.5Y3/3
⑩ 灰黄色砂土　5Y5/1

F-F`
① 暗灰褐色粘質土　10YR3/2
② 暗茶褐色粘質土(炭含) 10YR3/1
③ 暗茶褐色粘質土　10YR3/1
④ 茶褐色粘質土　10YR3/2
⑤ 灰褐色粘質土(砂多く含) 2.5Y3/1
⑥ 暗灰茶色粗砂　5Y5/1

G-G`
① 灰黒褐色粘質土　7.5YR3/1
② 暗黒褐色粘質土(炭含) 7.5YR3/1
③ 灰褐色粘質土　10YR3/1
④ 黄茶褐色粘質土　10YR3/3
⑤ 黄褐色砂含粘質土　10YR5/3
⑥ 暗茶褐色粘質土　10YR3/2
⑦ 茶褐色粘質土　10YR3/2

H-H`
① 灰茶褐色砂含粘質土　5YR3/1
② 灰黄色シルト　10YR5/2
③ 暗灰褐色粘質土(砂含) 10YR3/2
④ 暗茶褐色粘質土　10YR3/1
⑤ 茶褐色粘質土　10YR3/2
⑥ 灰褐色粘質土(砂含) 2.5Y3/1
⑦ 黄褐色砂土　10YR3/3
⑧ 黄灰褐色砂土　2.5Y3/2
⑨ 暗灰黄色粗砂　5Y5/1

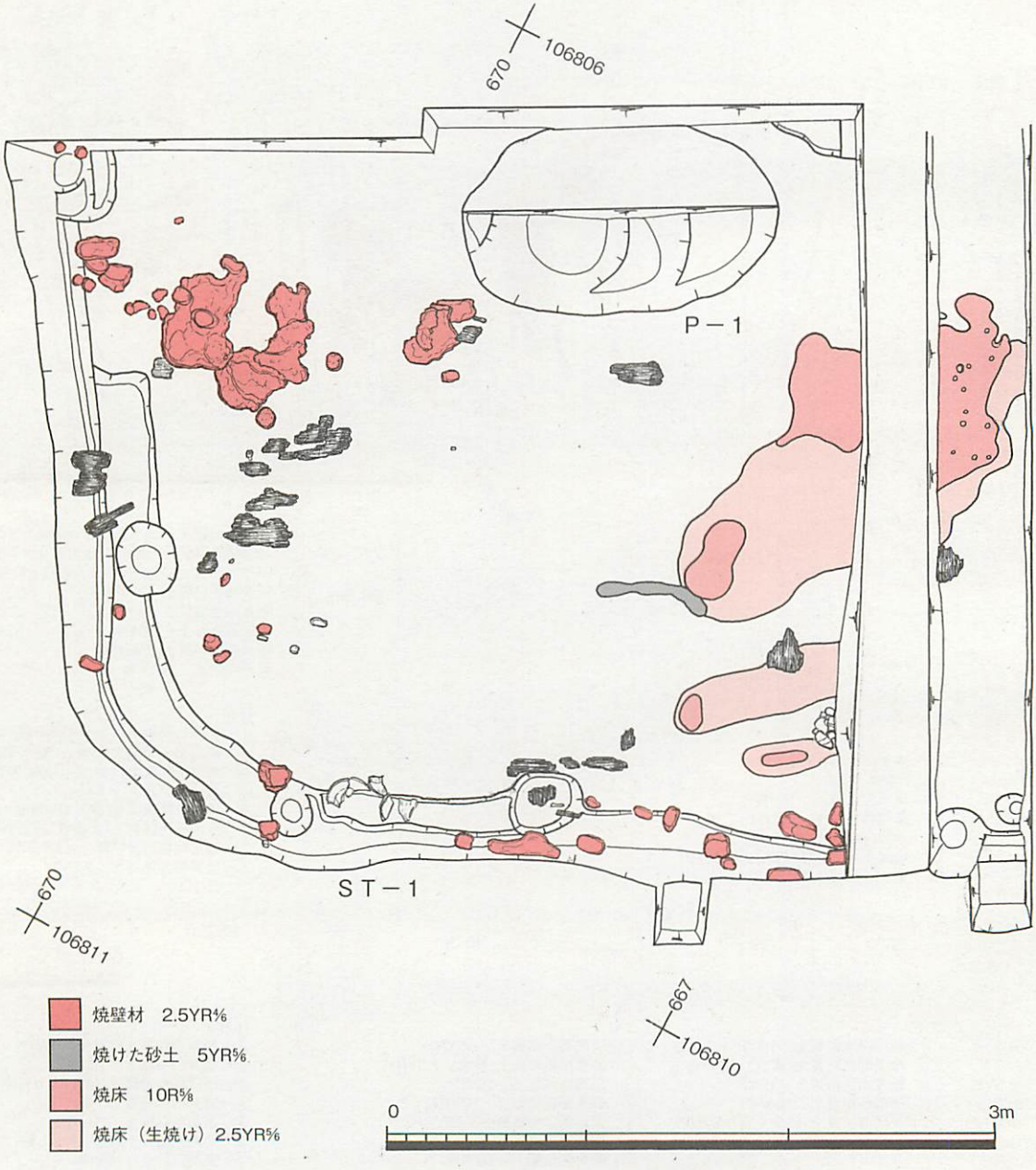
挿図18　伊勢遺跡81次調査SH-1平面図・断面図

月１日に開始し、３月15日までの期間実施した。その成果については平成15年２月22日に現地説明会を行い公開した。あいにく雨にたたられたが、約500名の市民に大型竪穴建物を見学頂いた。調査終了後、掘削場所についてはシート及び山砂で埋め戻し、遺構の保存を図った。

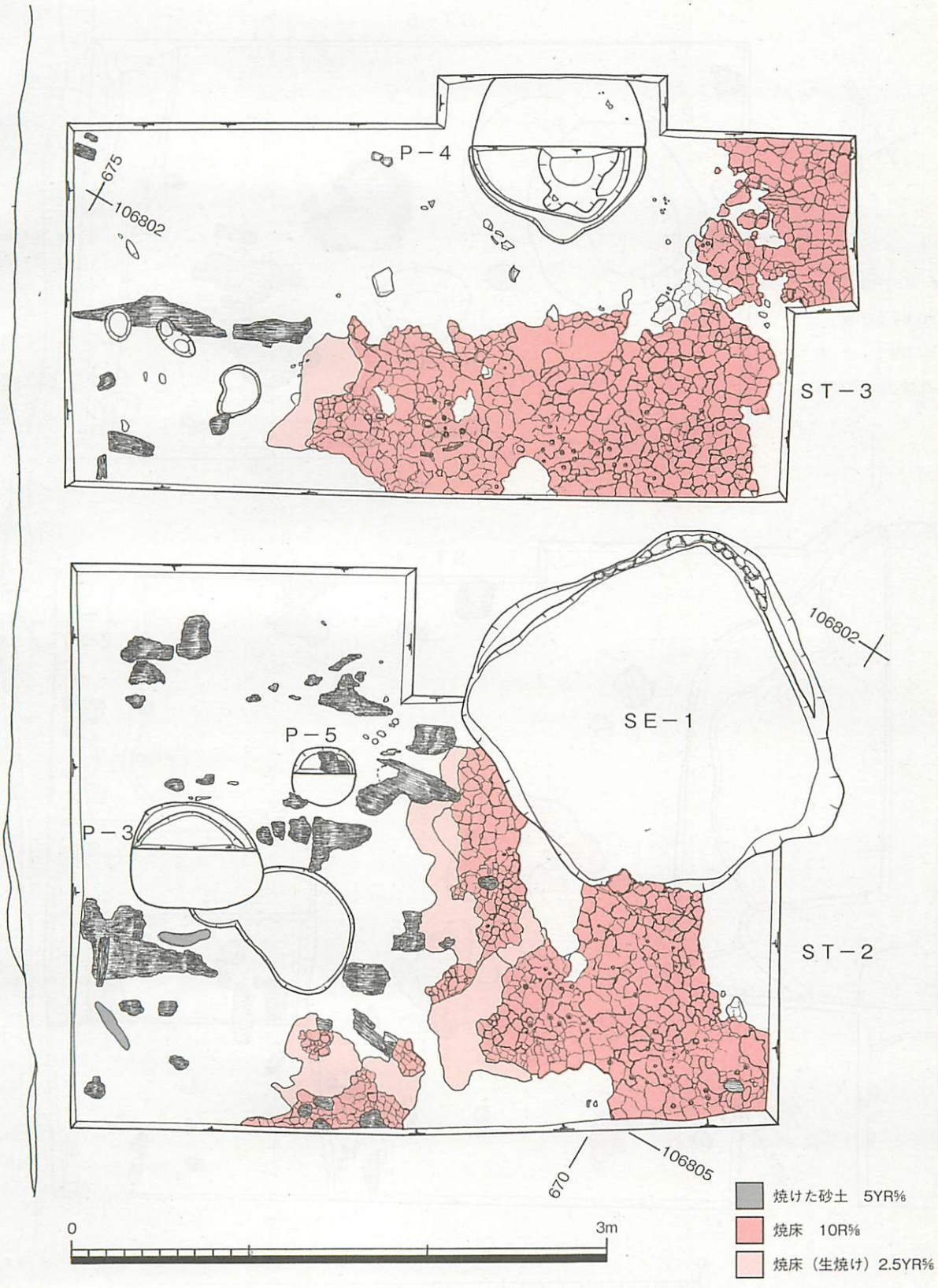
２、検出した遺構

耕作土、暗褐色粘土を除去し、大型竪穴建物のプランを確定するために平面検出を行った。なお調査区北隅において竪穴住居の一部が検出されたため、Ｔ－２を設定し竪穴住居のプランを押さえることに努めた。

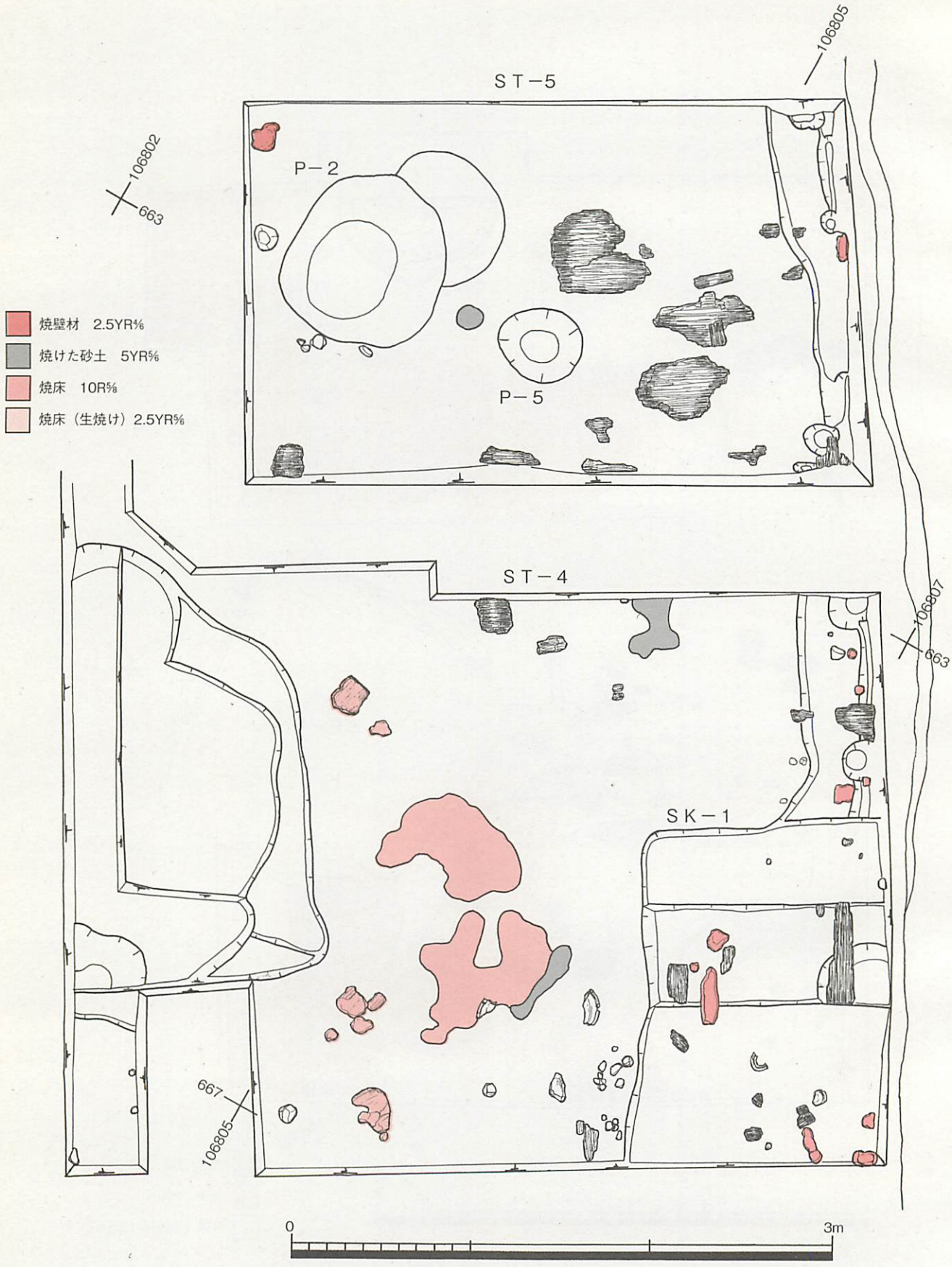
大型竪穴建物ＳＨ－１　80次調査区に隣接した位置にトレンチを設け、可能な限り大型竪穴建物の全体を掴むため平面検出を行った。その結果、一辺13.5m、床面積185㎡を測る大型竪穴建物の規模が確定した。ただ、北隅コーナーについては現水田の畦の下にあたり、検出することはできなかったが、少なくとも、80次調査区には及んでいないことがわかった。北西側は近世の耕作痕および中世と見られる柱穴に切られていた。74次調査では十字にサブトレンチを設定したが、東西方向は途中であったため、まず北東方向にトレンチを伸ばして東西辺の規模を確定した。さらにサブトレンチ（以下サブトレと略称）を５カ所に設定し、主柱穴位置の確定及び床面・壁面の構造を明らかにする作業に努めた。平面掘削にあたっては雨水によって劣化しないようにＳＨ－１全体をテントで覆い、作業を進めた。



挿図19　ＳＨ－１　ＳＴ－１床面検出状況



挿図20　ＳＨ－１　ＳＴ－２・３床面検出状況



挿図21　ＳＨ－１　ＳＴ－４・５床面検出状況

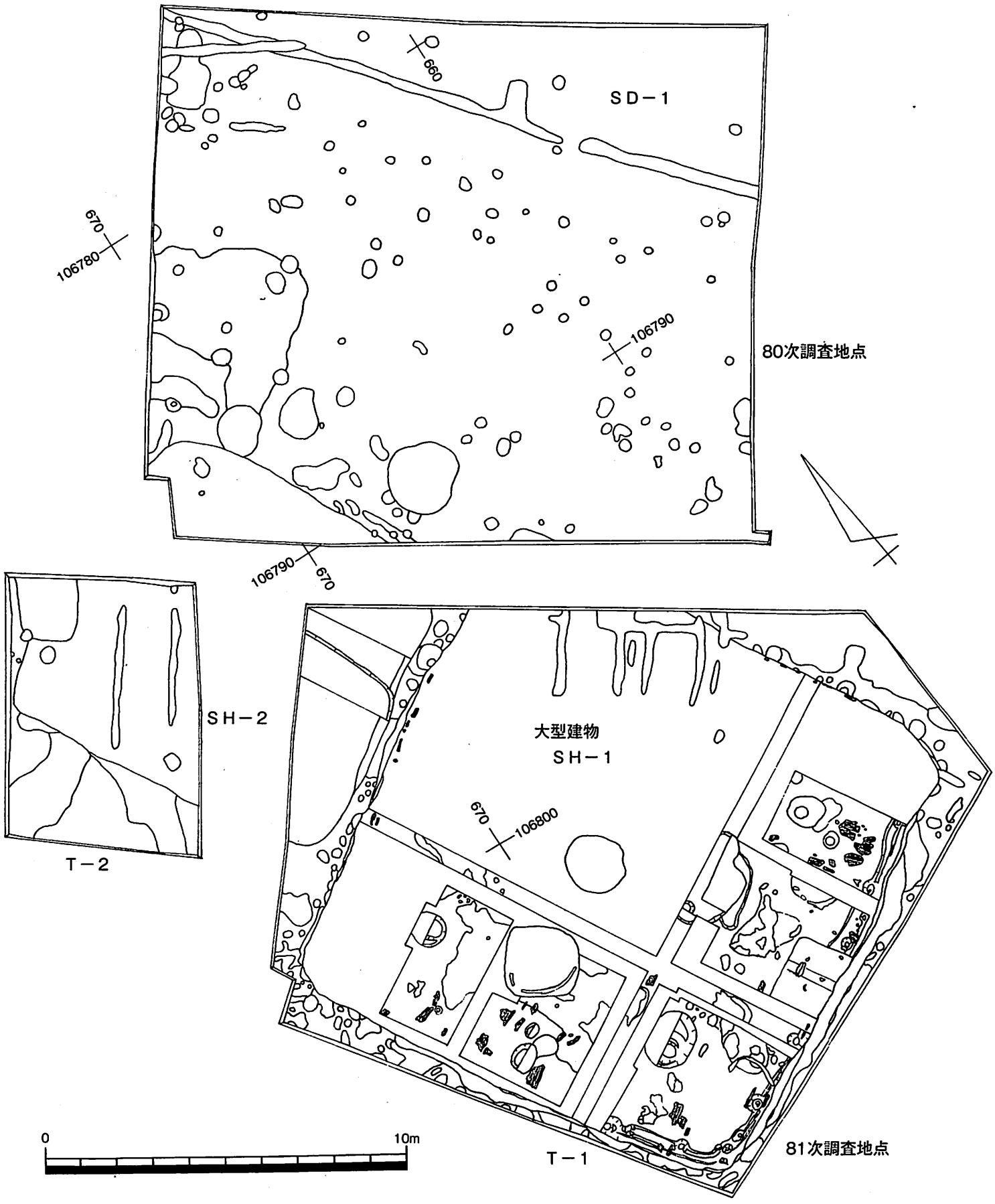
ＳＴ－１　十字に切ったサブトレンチに沿って、南コーナー部にＳＴ－１を設定し掘削調査を行った。約45cm掘削を行った結果、床面を検出した。ＳＴ－１北隅において主柱穴Ｐ－１を検出した。楕円形の平面形状で東西方向に長く東西1.5m、南北１ｍを測る。掘削調査を行った結果、深さ90cmを測る深い逆台形の柱穴で、東側にやや斜路をもつことがわかった。大型建物と同じく、太くて長い柱を落とし込むためにこのような堀方をしているものと見られる。暗褐色粘質土（10YR1/3）の堆積がみられ、柱根は残存していなかった。柱穴底は直径40cmほどフラットに成形された面が観察された。壁際には幅20～30cm、深さ10cmの周壁溝が巡っていた。さらに壁面際に幅５cm、深さ８～10cmの落ち込みがあり、周壁溝が２段掘りになっていることが判明した。この幅の狭い溝断面には板状の炭化材が見られた。壁際に板材が巡らされていた可能性が高い。浅く幅広の周壁溝には1.3～２ｍ間隔で柱穴が巡っていた。直径20～30cm、深さ15～20cmを測る小柱穴で、板壁材の内側に配置されていた。さらに板壁材の外側に板状の焼壁材が縦方向に置かれていたとみられ、東壁際ではその位置を保っていたが、西側では床面に倒壊した状態（焼壁材３）で出土した。床面東側中央では十字のサブトレンチから伸びる焼床材が南北２ｍ、東西１ｍの範囲に広がっていることがわかった。床面には壁より２ｍほど離れた位置に炭化材がみられたが、板壁材が内側に倒壊したものとみられる。さらに西壁側では焼けた砂土の堆積がみられたが板状の焼壁材の一部とみられる。

ＳＴ－２　竪穴建物西辺中央部にトレンチを設定した。板状の焼壁材の崩落を防ぐため、壁から30cm離れた位置で掘削調査を行った。その結果、45cm下で床面を検出した。西壁際中央で直径80cmを測る柱穴Ｐ－３を検出した。掘削を行った結果、深さ60cmを測る逆台形の断面形状で、主柱穴に比べてやや小さく浅い柱穴であることがわかった。その北側に直径35cm、深さ約10cmを測る小柱穴Ｐ－５を検出したが、柱穴というより小さな落ち込みと見られる。壁際より２ｍほどの範囲には板壁材とみられる炭化材が検出された。幅30～40cmほどの板材とみられ、どの炭化材も内側にむかって壁から直角方向に倒壊した状態で出土している。トレンチ北東半には幅２ｍ、長さ３ｍ以上にわたって赤橙色に焼かれた焼床材が帯状に検出された。ＳＥ－１によって破壊されていたが、ＳＴ－３の焼床に連続するとみられる。東側の焼床表面には直径１～３cmの孔が垂直方向や斜め方向にランダムにあけられていた。この孔の用途、性格については不明である。

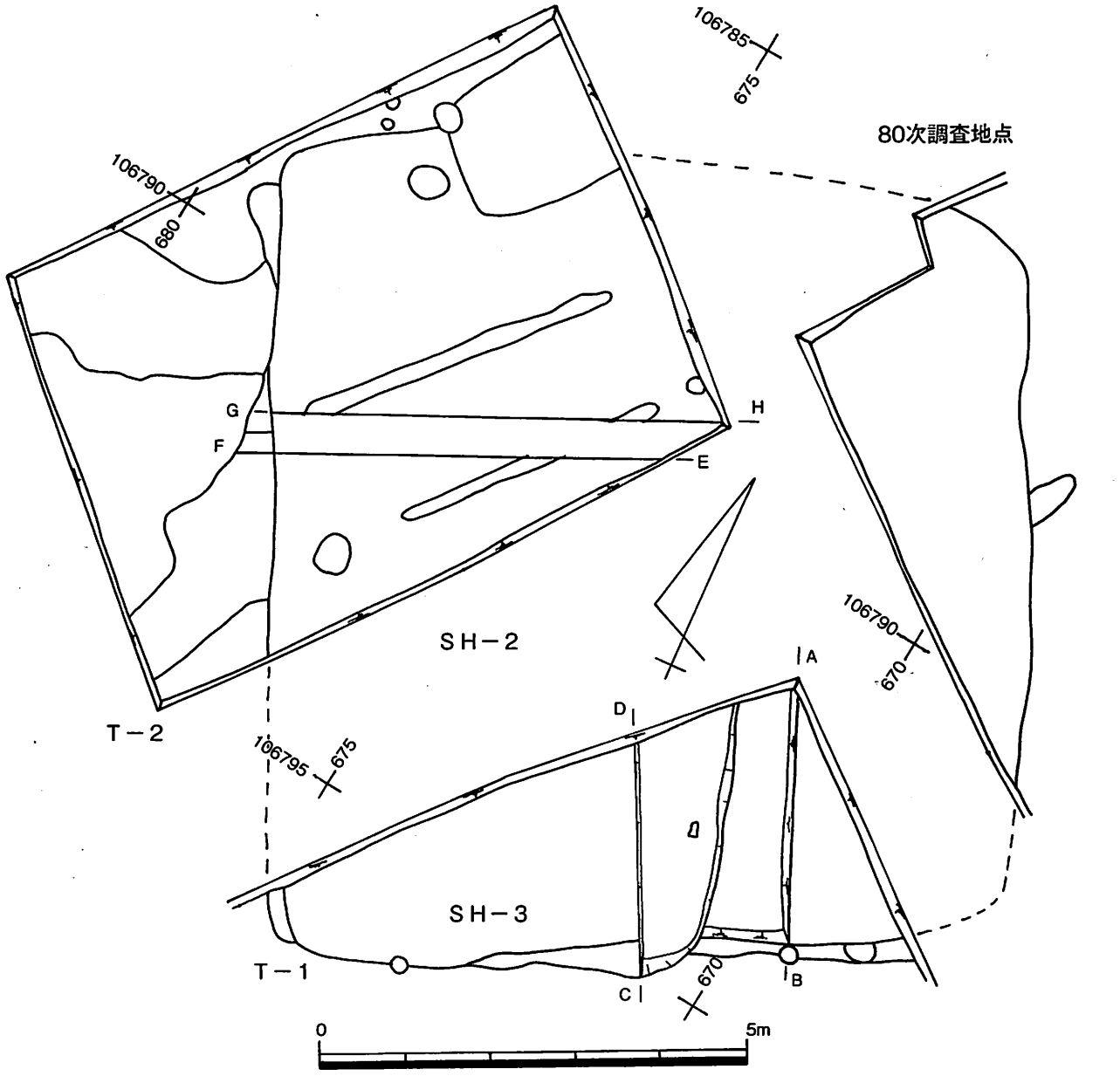
ＳＴ－３　ＳＴ－２に隣接して北西側に設定したトレンチである。約45cm掘削し、床面を検出した。北西側中央で主柱穴とみられるＰ－４を検出した。直径１ｍの円形の堀方で、５cmほど掘削したのち直径50cmの柱穴を検出した。深さ約90cmを測る深い柱穴である。Ｐ－１に対応する主柱穴と考えてよい。西壁際では内側に向かって板状の炭化材が検出された。その下で直径20～30cm、深さ５cm程の小さな落ち込みを検出したが、柱穴とは見られない。中央から北隅にかけて赤橙色に発色した焼床がＳＴ－２から連続して検出された。中央の焼床部分には直径２～３cmの孔がランダムにあけられていた。焼床材は主柱穴および壁際を避けて付設されている様子が確認された。

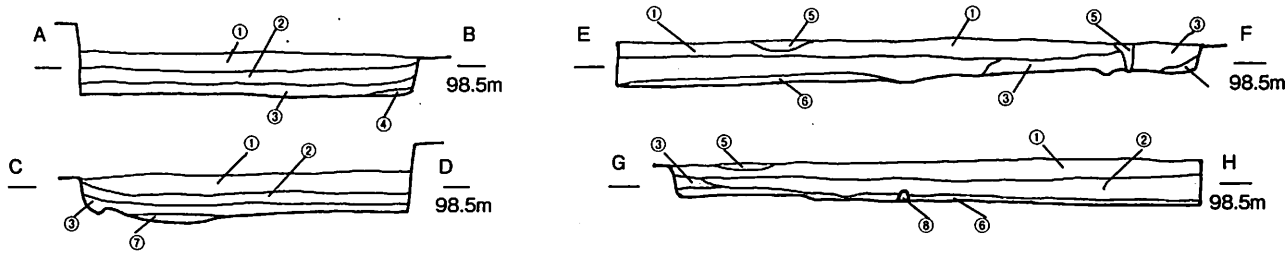
ＳＴ－４　竪穴建物の東辺中央に設定したサブトレンチである。やはり、壁際の焼壁材の崩落を防ぐために15～20cm内側にトレンチを設けた。約50cm掘削し、床面を検出した。サブトレンチ北西隅で直径約３ｍの緩やかな落ち込みを検出した。その西隅において直径50cm深さ40cmの柱穴を検出した。しっかりした堀方をもち、東西方向のほぼ中央に位置することから、屋根を支える補助柱の可能性がある。壁際中央で短辺1.3m以上、長辺２ｍ以上の方形の貯蔵穴ＳＫ－１を検出した。約20cmの深さで、壁際に直径50cm以上の柱穴が見られた。この貯蔵穴内で壁に平行する板状の炭化材が検出された。他の炭化材は壁に直交する方向に検出されていることから、貯蔵穴を塞ぐ板材が横方向に並べられていた可能性がある。壁際には周壁溝が巡っており、80cm間隔で柱穴が掘られていることがわかった。さらに壁際には深くて狭い堀方の溝が掘られており、板材が立てられていたことが推定された。中央には幅50cm、長さ1.3mの範囲で赤橙色に発色する焼床の一部が検出されたが、ＳＴ－２・３と比較すると小規模なものである。床面からは受口状口縁甕の破片が出土している。

ＳＴ－５　ＳＴ－４の東側に設定したサブトレンチで、Ｐ－１、Ｐ－４に対応する主柱穴を検出するために設定した。約45cm掘削し、床面を検出した。平面検出を行った結果、予想した位置でＰ－２を検出した。直径約１ｍを測る柱穴で、暗黒褐色粘質土の堆積がみられた。Ｐ－２の南側で直径50cm、深さ10cmの浅い落ち込みＰ－５を検出したが、柱穴ではないと思われる。壁際には周壁溝が巡り、10～20cmの柱穴が0.7～1.2mの間隔で配置されていた。さらに壁際には板材を立てたとみられる細く深い溝がめぐっていることを確認した。トレンチ中央では壁に直交する方向で幅約50cmを測る板状の炭化材が出土した。



挿図22　伊勢遺跡80・81次調査全体図





① 黒灰色粘質土（砂礫含）
② 暗灰褐色粘質土（やや炭・礫含む）
③ 暗灰色砂礫含粘質土
④ 暗灰白色粘質土

① 黒灰色粘質土
② 暗灰褐色粘質土（やや炭含）
③ 暗灰黒色砂礫層
④ 暗灰色砂礫層
⑤ 灰黄色砂土
⑥ 暗灰黄色粘質土
⑦ 地山ブロック（黄灰色シルト）

挿図23　ＳＨ－２・３検出状況

今回の掘削調査によって判明した大型竪穴建物の構造について以下、列挙する。1、主柱穴は4本と想定され、P－1～P－2は7.6m、P－1～P－4は7.3mの柱間距離を測る。2、P－3はP－1とP－4の中間3.7m、さらにその軸線の外側2.4mに位置し、東西方向に伸びる屋内棟持柱と推測される。3、P－1～P－2の中間3.6m、その軸線の1.4m内側にP－6が位置するが、南北方向の補助柱の可能性がある。4、周壁溝が巡り、0.7～1.3m間隔で柱穴が掘られ、その外側に板材が縦方向に打ち込まれていたことが推測された。さらに板材の外側に板状の焼壁材が並べられていたと考えられる。5、南東辺壁際中央に長方形の貯蔵穴が設置されていた。この位置は五角形住居と共通するパターンで、その上に板材が並べられていたと推測される。6、竪穴の床構造は1m以上掘削し、黄色シルトを約30cm貼り、一度赤く発色する程度に上面を焼き、細かい砂礫を敷いた後、精良な粘土を5～8cm貼っている。さらに粘土が固まる前に棒で孔をあけ、さらに上面を赤く発色するまで焼いて床を形成したと考えられる。

この焼床上で弥生土器が出土していることから生活面であったと考えることができる。いずれにしても、厚い貼り床構造や焼床構造、さらに立て板及び板状の焼壁材が巡る壁構造など極めて特殊な構造物であったと言える。また、主柱穴配置からみても特異な上屋構造をもつ竪穴建物であったとみられる。

SH－2　T－1の北隅及び80次調査でその一部を検出し、T－2で北西コーナーを押さえることができた。南北方向がやや長く10m、東西方向は9mを測る方形プランの竪穴住居である。T－1の南辺中央にやや歪みが認められたことから、一部掘削を行った結果、SH－3に切られていることが判明した。残存壁高は約30cmで黒褐色粘質土の堆積が見られた。伊勢遺跡の中でも大型の竪穴住居で、SH－1の軸線にほぼ平行することから大型竪穴建物廃絶前後に営まれた可能性がある。

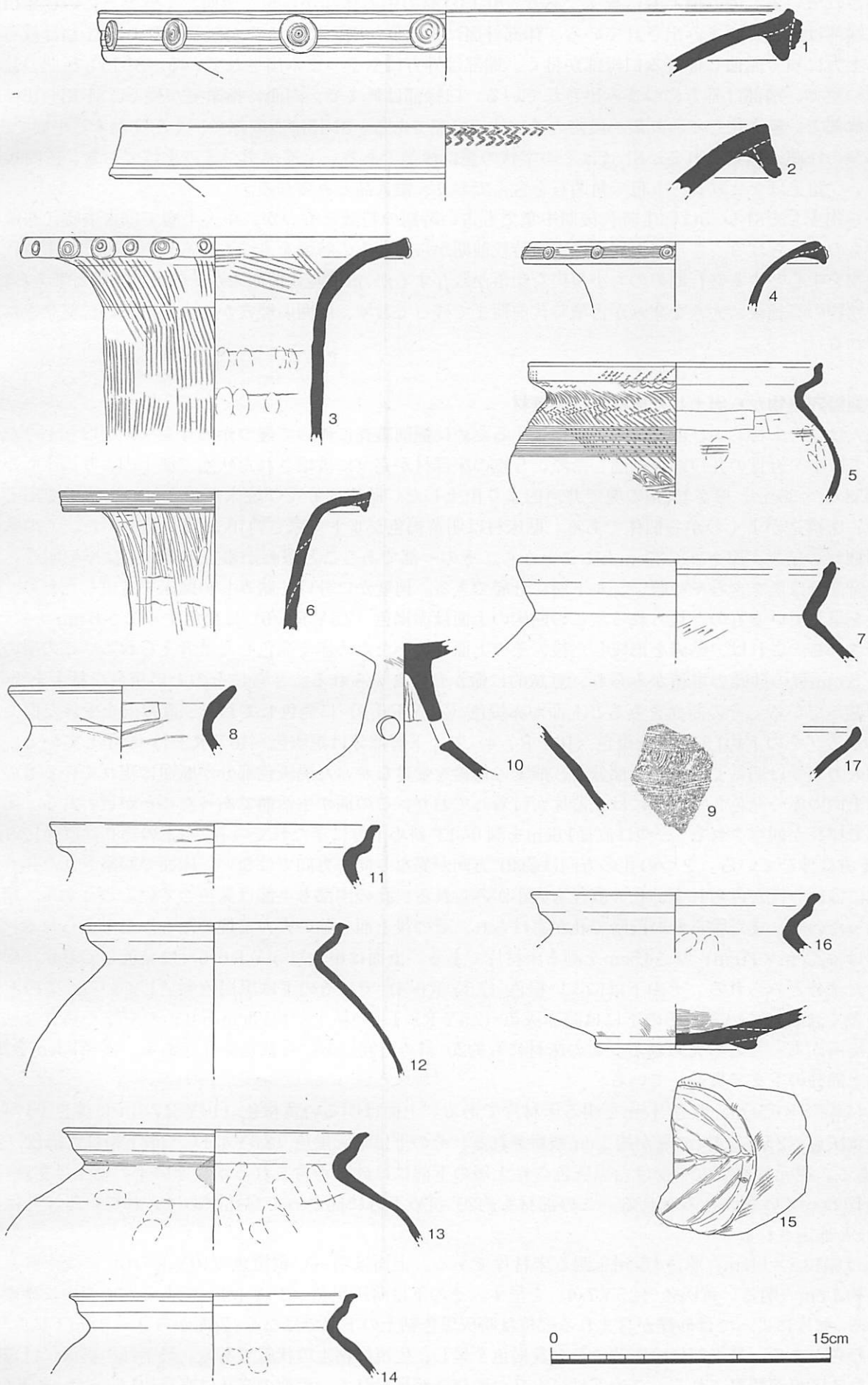
SH－3　SH－2を切ってつくられており、一辺約5mの方形プランの竪穴住居と推定される。残存壁高は約35cmで灰黒褐色粘質土の堆積が認められた。T－2側の平面検出ではSH－2とSH－3の切り合い関係が明確でなかったが、T－1の掘削調査で明確な切り合いが観察された。時期については出土した破片からみて古墳時代初頭から前期の所産とおもわれる。

3、出土した遺物

大型竪穴建物の掘削調査によって81-1～15の遺物が出土した。床面上からは81-1～5の土器が出土した。81-1は大型の広口壺の口縁部である。外上方に直線的に開き、下方に逆三角形状に垂下する口縁部が付く。口縁部外面は3状の擬凹線が施され、等間隔に円形浮文が巡る。円形浮文には同心円状に竹管文が付けられている。チョコレート色の胎土で角閃石を多く含むことから生駒西麓産と考えられ、搬入品と見られる。81-2も広口壺で、外上方に外反した後、外下方に垂下する口縁部が付く。内面に刺突文が施され、外面には擬凹線が残る。81-3は長頸壺の口縁部である。筒状に長く伸びる頸部より短く外反する口縁部が付く。口縁部には等間隔に円形浮文が施され、竹管文が加えられている。外面には荒い縦刷毛、口縁部内面には横刷毛が残る。頸部内面には輪積み痕が残りその上から指押さえの痕跡が認められた。81-4も短く外反する広口壺で、端部は逆三角形状に垂下する。5条の細かい擬凹線が施され、等間隔に円形浮文が巡る。81-5は受口状口縁を有する浅鉢で、扁平な体部から短く立ち上がり、垂直にのびる第2口縁部が付く。端部は内斜する短い面をもつ。外面は荒い刷毛目が残り、内面には板小口による横方向の調整痕が観察される。口縁部には列点文、肩部には列点文、体部及び下腹部には直線文と波状文が施されている。形態・文様構成は弥生後期中葉の特徴を示している。

中・上層からは81-6～11が出土している。81-6は筒状の頸部から外方に直線的に開く口縁部が付く長頸壺である。端部は上・下端にやや拡張されている。外端面には細かい擬凹線が施されている。頸部外面には縦方向のヘラ磨きが観察される。81-7は短く上方に立ち上がる短頸壺である。やや内湾し立ち上がり、端部は尖頭状に収められている。内面に刷毛目が残る。81-8は絞られた頸部から短く外上方に外反する口縁部がつく短頸壺である。端部は短い面をもって単純に収められている。頸部内面に荒い削り痕が残る。81-9は壺型土器の体部の一部で、2帯の直線文の間に扇状文が施されている。二次焼成を受けたためか、灰燈色に発色している。81-10は高杯脚部である。絞られた円錘状の脚中部から屈曲し開脚する裾部が付く。3方に穿孔をもつ。81-11は受口状口縁甕で、短く立ち上がる頸部から僅かに屈曲し、外上方に伸びる第2口縁部が付く。端部は外方へつまみ出される。口縁部には2条の波状文が施され、肩部には斜沈線が僅かに残る。

上層及び平面検出時に81-12～15の土器が出土している。81-12～16は受口状口縁甕の口縁部である。81-12は球形の体部から短く屈曲して外上方に伸びる口縁部が付く。屈曲が甘く、稜線も緩やかである。端部は外下方に



挿図24　伊勢遺跡81次調査出土遺物　　ＳＨ床面（1～5）　ＳＨ中層（6～11）ＳＨ上層（12～15）

つまみ出されている。内外面ともに無文である。81-13は肩の張る体部から短く屈曲して外上方にのびる口縁部が付く。端部は外方につまみ出されている。体部外面に指頭痕、内面に指ナデが観察される。81-14は絞られた頸部から上方に短く屈曲し伸びる口縁部が付く。端部は外方にややつまみ出されている。81-16も屈曲の甘い口縁部をもつ甕で、端部は外方につまみ出されている。口縁部は無文で、内面に指頭痕が残る。81-13～16は屈曲の甘い口縁部で、無文化しており最終段階の受口状口縁甕である。81-15は壺底部で、やや突出する平底である。底部に木葉の圧痕が観察される。81-17はくの字状の甕口縁部である。上端部をつまみ上げており、庄内式の甕とみてよい。胎土はチョコレート色で角閃石を含んでおり、搬入品とみられる。

床面から出土した81-1～5は弥生時代後期中葉でも古い時期の特徴をもつが、中・上層では古墳時代初頭の様相をもつものがみられる。さらに上層では古墳時代前期から前期末の特徴をもつものも見られる。弥生時代後期の大型建物を中心とする盛行期ののち小規模な集落が残存するが、古墳時代前期末がその最終段階と考えられる。大型竪穴建物の廃絶後、大きな窪みが古墳時代前期まで残っており、周囲の竪穴から土器がそこに廃棄されたものとみられる。

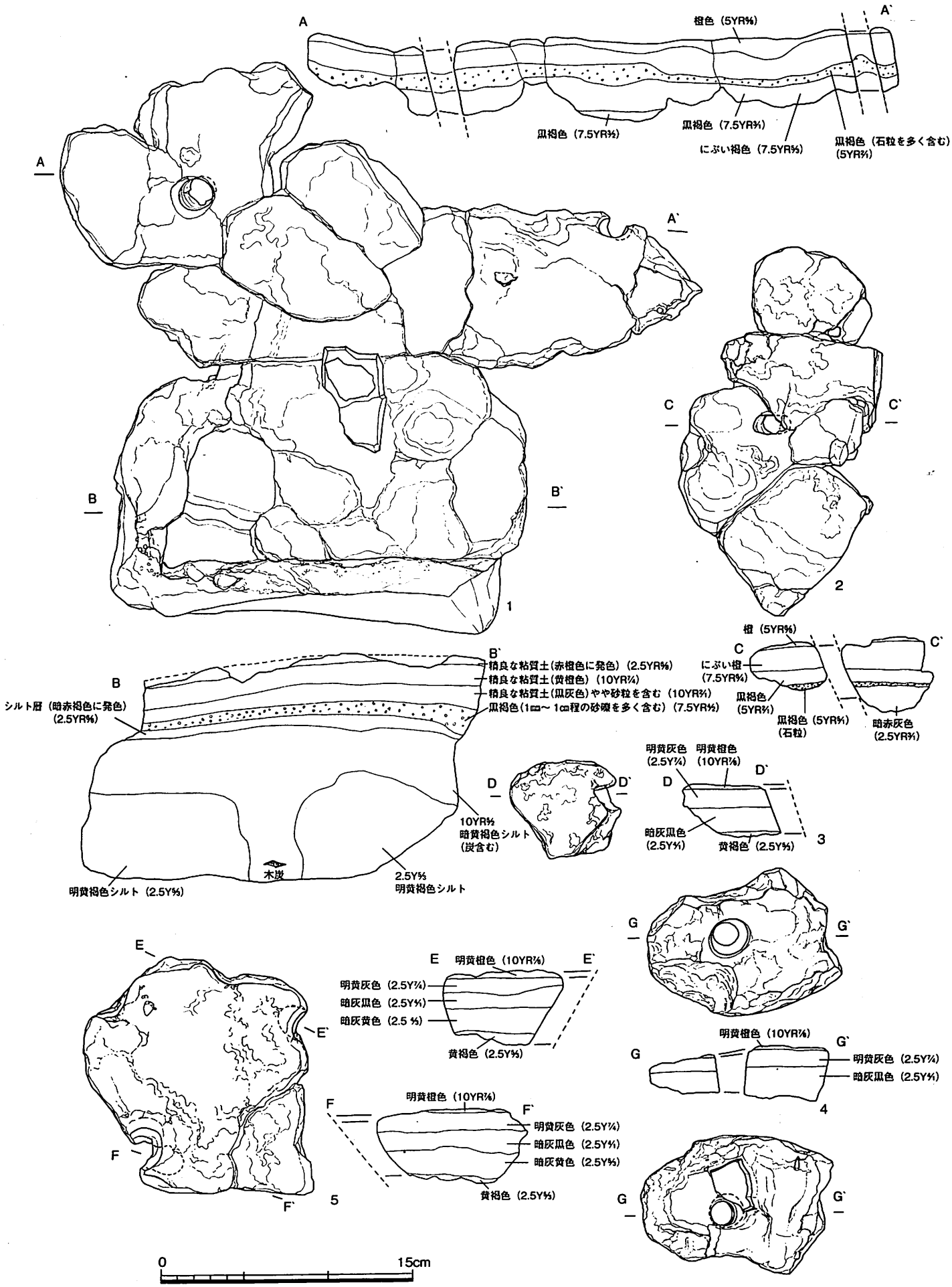
4、大型竪穴建物から出土した床材及び焼壁材

大型竪穴建物の床材および壁材について検証するために掘削調査に伴って幾つかのサンプルを取り上げた。床材については中・近世の井戸跡を掘削した際、5点の床部材が完全に破壊された状態で埋土内より出土した。床材1は幅38cm×36cm、厚さ13cmの塊で井戸内より出土した。貼床部分及び焼床が張り付いた状態で出土したことから、床構造がよくわかる個体である。貼床材は明黄褐色シルトで厚さ約10cm残存していた。この貼床部分は断面観察の結果、厚さ25～30cmあることから、その一部であることがわかる。下層部分はやや明るいシルトで、上層部分は炭を含むやや暗いシルト層に分層できる。何度かに分けて踏みしめ貼床を造成したため、断面が版築状を呈しているものと見られる。この貼床の上面は赤褐色（2.5Y R6/6）に発色する厚さ6mm～1.5cmの面が観察される。これは、貼床を形成した後、その上面を焼いたため赤く発色したと考えられる。この層の上面には2～5mm程の砂礫の堆積がみられ、意識的に撒かれたと見られる。さらにその上に精良な粘土を約4cmの厚みで貼っている。その断面をみると上面が赤燈色（2.5Y R6/8）に発色しており、直接火を受けた面であることがわかる。その下約1.5cmは黄燈色（10Y R7/4）で、下層部分は黒灰色（10Y R2/1）を呈している。上面から強い火力を受け明るく発色した部分と、酸素の供給を受けなかった黒灰色部分が断面に現れているものとみられる。上面の赤く発色した部分には土器片が付着しており、この面が生活面であったことが窺われる。床材には2カ所で穿孔が観察される。一つは直径1.6cmを測り、13°斜め下方に穿たれている。右上の穿孔は直径1.3cmで、10°斜め下方に伸びている。2つの孔の方向は約40°方向が異なり同一方向ではない。床面で観察された孔も同様で、方向には統一性がみられず、孔の直径も大小がみられる。孔の内部も上部は発色していることから、精良な粘土を貼ったのち、まだ柔らかい段階で孔があけられ、その後上面を強い火力で焼いたものと考えられる。

床材2は幅22cm×11cm、厚さ4.5cmを測る床材片である。上面は橙色（5Y R6/6）に発色しており、直接火力をうけた部分とみられる。その下はにぶい橙色（7.5Y R6/4）で、その下は黒褐色を呈している。この下部には砂礫が多く含まれている。その下には暗赤灰色（2.5Y R3/1）の粘土が約1.5cmあり、やや厚く精良な粘土が貼られた場所があったと考えられる。この床材にも約20°斜め方向にあけられた穿孔がある。直径1.3cmを測り、精良な粘土部分の下まで貫通している。

床材3は幅5.5×6.5cm、厚さ3cmを測る床材片である。上面は明るい黄橙色（10Y R7/6）に焼き上げられ、その下は黄灰色（2.5Y7/4）の層が約1cm観察される。その下は暗灰黒色（2.5Y4/1）で最下端は黄褐色（2.5Y 5/3）である。還元状態で火を受けた黒灰色の粘土層の下部には砂礫が含まれるが、その下の粘土は生焼けで、熱が十分伝わっていないとみられる。この部材も約20°斜め下方に向かって穿孔があけられている。孔は直径1.5cm前後と推定される。

床材4は幅13.5×14cm、厚さ4.5cmを測る床材片である。上面は明るい黄橙色（10Y R7/6）に焼かれ、その下は厚さ約1cmの明るい黄灰色（2.5Y7/4）を呈す。その下は暗灰黒色（2.5Y4/1）であるがその中に砂礫が含まれている。材片によっては砂礫が含まれる部位は暗灰黒色粘土の下部ではなく、表面から2～3cm下にみられ、その量もむらがある。最下部は暗灰黄色及び黄褐色を呈し、生焼け粘土の状態である。最下部の裏面には植物の茎と思われる圧痕が観察される。この部材にも2つの穿孔が見られる。手前の穿孔は直径約1.6cmで、約40°斜め下方にあけられている。右上の穿孔は直径約1.7cmと推定され、30°斜め下方にあけられている。2つの斜め方向

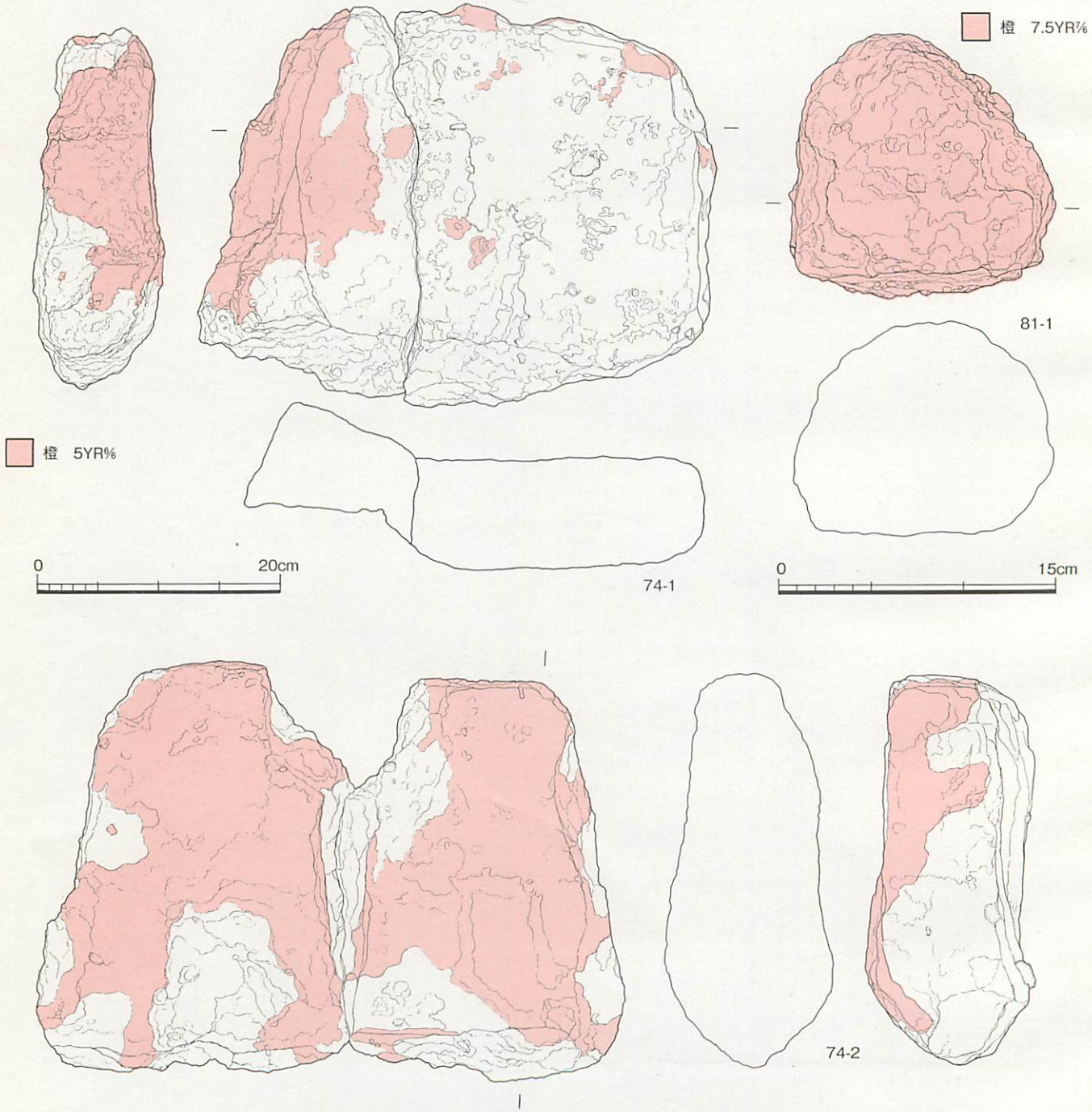


挿図25　伊勢遺跡大型竪穴建物出土焼床材実測図　　ＳＥ－１（１～５）

の穿孔は逆方向で、方向に統一性がみられない。

床材５は幅11×８cm、厚さ３cmを測る床部材片である。上面は明るい黄橙色（10ＹＲ7/6）に焼かれ、その下は明黄灰色（2.5Ｙ7/4）を呈す。下部は暗灰黒色（2.5Ｙ4/1）で、他の床部材断面と共通している。下部には土器片が付着しているが、この部位は砂礫が多く含まれる位置であり、貼床を形成した後、精良な粘土を貼る前に砂礫を敷く段階で、土器片なども撒かれていたとみられる。中央には垂直方向にあけられた穿孔があり、上面で直径1.8cm、下面で1.5cmを測る。

以上の床部材を観察した結果、厚い貼床に黄色シルトが入れられ、一度表面を焼いた後に土器片を含む砂礫が敷かれたと考えられる。その上に３～５cmの厚みで精良な粘土が塗られ、まだ固まらない間に穿孔があけられたと考えられる。さらに、上面から強力な火力で表面を焼いたことが推定される。この床材は大型竪穴建物の壁際や中央、そして主柱穴部分を避けてドーナツ状に広がっている。伊勢遺跡62次調査でみつかった焼土塊遺構もドーナツ状に広がっており、竪穴住居の中心部を避けドーナツ状の焼床を形成する傾向があったと見られる。さらに、主柱穴をさけていることから、床を完全に仕上げてから主柱穴を含む上屋の建築に入ったのであろう。



挿図26　伊勢遺跡大型竪穴建物出土焼壁材実測図　（74-1・74-2・81-1）

焼壁材１　74次調査で南壁際に立てられた状態で出土した遺物である。幅42cm、高さ32cm、厚さ11cmを測る板状の焼壁材である。縦方向に割れた部分で内側に湾曲している。両サイド及び表裏面は成形され面をもっている。それぞれの面は橙色（５ＹＲ6/6）に発色しており、長方形の板状材を他の地点で焼成し、壁際に置いていったと考えられる。廃絶過程で浸食によって住居内に崩落、あるいは粒状化したとみられ、焼壁材３は床上で出土している。また断面観察から多量に粒状化した赤橙色の土が壁際に堆積していることから、かなり浸食を受けていることが推測された。

焼壁材２　74次調査で焼壁材１と並んで南壁際に立てられた状態で出土した遺物である。幅48cm、高さ33cm、厚さ13cmを測る板状の焼壁材である。両サイド及び表裏面、上面が成形され面をもっている。それぞれの面は橙色（５ＹＲ6/6）に発色しており、意図的に焼成したものと考えられる。焼壁材１、２ともに胎土内に多数の花崗岩粒や砂礫がふくまれている。

焼壁材３　81次調査でサブトレンチ１の壁に近い床面上で出土した遺物である。西壁際には多量に壁材が床面に崩落しており、その１つを取り上げたものである。幅14cm以上、高さ14cm以上、厚さ11.5cmを測る部材片である。恐らく、焼壁材１、２と同じく板状の焼壁材とみられ、崩落時に割れたと考えられる。全体が橙色（7.5ＹＲ7/6）に発色しており、強力な火力で焼かれたものとみられる。径３mm～１cmの砂礫が多く含まれている。

大型竪穴建物の壁際に置かれたと見られる焼壁材は、幅48cm、高さ33cm、厚さ13cm程の長方形の板材で、それぞれの面が成形されている。さらに、赤く表面が発色していることから意図的に焼かれたとみられる。胎土には多量の砂礫が混入されており、粘土に混和剤を混ぜて成形したと考えられる。大型竪穴建物の四辺にはこのような焼壁材が巡っていることは平面検出によって確認されていることから、他の地点で成形し、焼成した部材を壁際に並べていったと考えることができる。

５、調査成果のまとめ

今回の調査では、大型竪穴建物の構造がいくつか明らかになった。まず、主柱穴の配置が確定した。主柱穴は４本と想定され東西の柱穴間距離は7.3m、南北7.6mを測り、さらに屋内に棟持柱をもつ特異な柱穴配置をとることがわかった。床構造は黄色シルトを25～30cm貼り、一度赤く発色するほど焼き、砂礫を敷いたのち精良な粘土を貼りさらに赤橙色に焼き上げられている。竪穴住居の床構造としては類似例がなく、伊勢遺跡62次調査で出土した焼土塊遺構に似ている。壁面は周壁溝を巡らせ、0.8～1.3m間隔で柱穴が掘られ、壁際には立板が打たれていたとみられる。さらにその外側には板状の焼壁材が縦方向に置かれていたと考えられる。以上のとおり、大型竪穴建物は床面積185㎡を測る巨大な構造物であるばかりでなく、床や壁に特異な施設が施されていることがわかった。さらに床面から出土した遺物から弥生時代後期中葉に廃棄されたとみられ、伊勢遺跡の形成段階の主要な遺構であったと考えられる。

第3章　まとめ

74・80・81次調査では２棟と大型建物の規模や内容が明らかになった他、もう１棟の大型建物（ＳＢ－Ａ）の存在が予測された。また、大型竪穴建物が新たに発見され規模や内容の一端が明らかになった。最後に今回の調査成果を列挙し、まとめとしたい。

１、平成７年度の民間の宅地造成に伴う調査によって、独立棟持柱付き大型建物ＳＢ－９の存在が予想されていた。今回の調査では、ＳＢ－９が桁行９m、梁行4.5mの規模で、棟持柱が梁から2.25m外側に位置することが判明した。大型建物ＳＢ－８とＳＢ－９の棟持柱間の距離は18.4mを測る。

２、ＳＢ－９の北側で独立棟付き大型建物ＳＢ－12が新たに発見された。ＳＢ－９とＳＢ－12の棟持柱間の距離は18.4mを測り、３棟の大型建物は等間隔に配置されていることがわかった。しかし、ＳＢ－12は桁行９m、梁行５mとやや大きく、南側の梁に露台が付設されていることが判明した。伊勢遺跡内部の独立棟持柱付き大型建物は、１間×５間という規格性が認められるが、梁行など柱間距離に若干の差がみられ、露台のような施設を持つものがあり、若干の個性が存在することがわかる。

３、ＳＢ－12の北側約18mの地点で、大型建物の柱とみられる柱穴が幾つか検出された。柱配置からみて独立棟持柱建物ではないと考えられ、今後の調査課題となった。柱配置からみてＳＢ－６のような屋内棟持柱付き大型建物である可能性がある。

4、大洲地区で発見されたこれらの独立棟持柱付き大型建物は等間隔に配置されているほか、棟方向を約14°西側に屈折させている。その結果、大型建物は弧状に配置されていることになる。既往の調査で発見されている独立棟持柱付き大型建物は方形区画や楼観を中心に約220mの円周上に概ね位置することがわかる。

5、伊勢遺跡内の大型建物群の柱間距離や梁行及び桁行には規格性がみられるが、その背景には高い測量技術があった可能性がある。また建物配置には計画性がみられ、遺跡構成の軸線があったと思われる。

6、ＳＢ－９に隣接して大型竪穴建物が検出された。一辺13.5mの方形住居で床面積185㎡を測る大型竪穴建物である。床面より出土した土器から弥生時代後期中葉に廃棄されたとみられ、伊勢遺跡形成期の主要な構造物であったと考えられる。

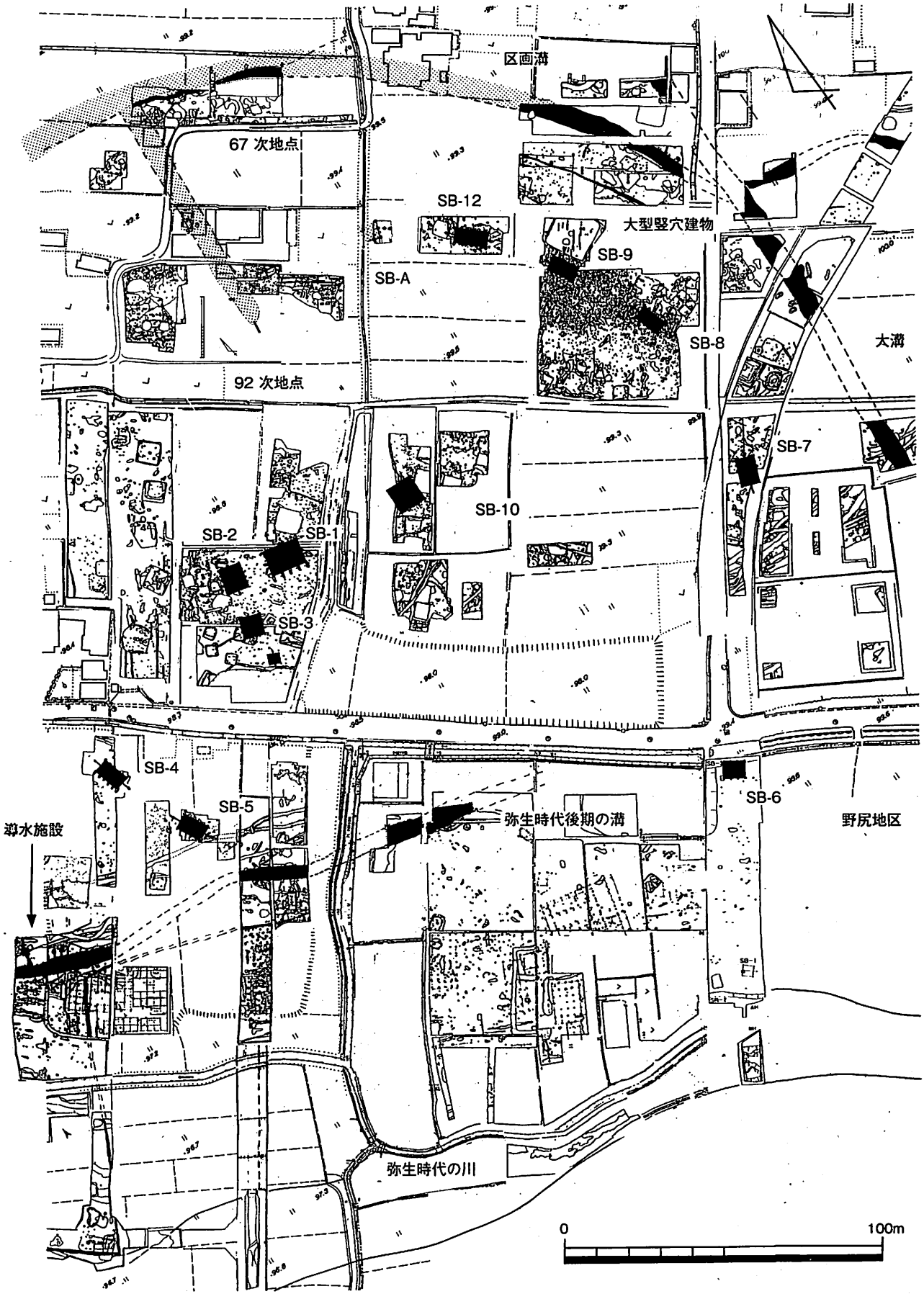
7、大規模な建物というばかりでなく、床や壁に特殊な施設がみられた。床は厚い貼床で、精良な粘土が貼られた後、上面を焼成して床を形成している。壁には長方形の板状に焼かれた焼壁材が縦方向に置かれていた。しかし、方形住居や五角形住居と同じく南東辺中央に貯蔵穴が配置され、周壁溝が掘られるなど、一般の竪穴住居との共通性もみられる。

8、大型竪穴建物からは金属器などの工房を示唆する遺物や痕跡がみられず、甕や壺、大型鉢など生活に密着する土器が出土していることから、特殊な工房ではなく、首長の居所あるいは饗応の祭りを行う「大屋」のような性格が与えられるのではないか。

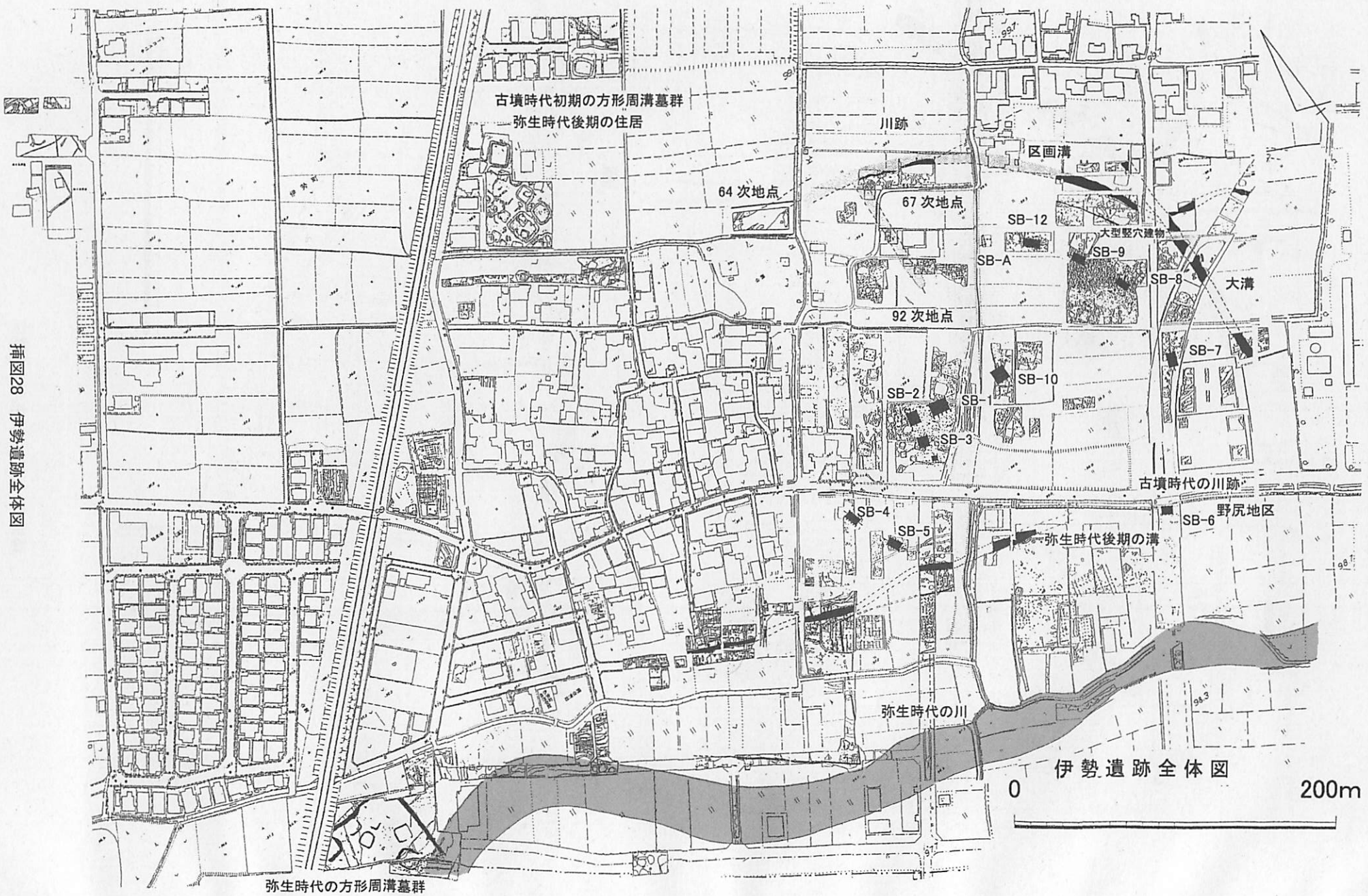
大型竪穴建物の床や壁に施された建築技術は殆ど類例をみないものである。しいて類例を挙げれば時期は異なるが、中国大陸や朝鮮半島の竪穴住居に「紅焼土（こうしょうど）」と呼ばれる床・壁材に焼かれた粘土材を使用する例がある。朝鮮半島の例は弥生時代後期に並行し、共時的であるが類例の増加が待たれる。かりに、技術的源流が大陸に求められるとすれば、鉄などと伴に日本海を通して人や物の交流が盛んに行われていたことになる。また「國」の形成にとっても、社会の組織化や統治の仕組みなども断片的にもたらされていた可能性も十分に考えられる。

（注）大貫静夫編「韓国の竪穴住居とその集落」国際日本文化研究センター千田研究室刊 2001.3

大貫氏より原三国時代後期の大也黒遺跡の中に壁・床材を焼く例があることを教示をうけた。東アジアの建築技術の流れの中に焼床・焼壁材が位置する可能性も否定できない。日本における政治社会の形成にあたっても、大陸や半島の仕組みが少なからず影響を受けたのではなかろうか。



挿図27　伊勢遺跡東半部遺構図



挿図28　伊勢遺跡全体図

大型竪穴建物とSB-9検出状況（南西から）

大型竪穴建物とSB-9検出状況（北西から）

大型竪穴建物掘削状況（西から）

大型竪穴建物掘削状況状況（南西から）

Ｔ－１検出状況（西から）

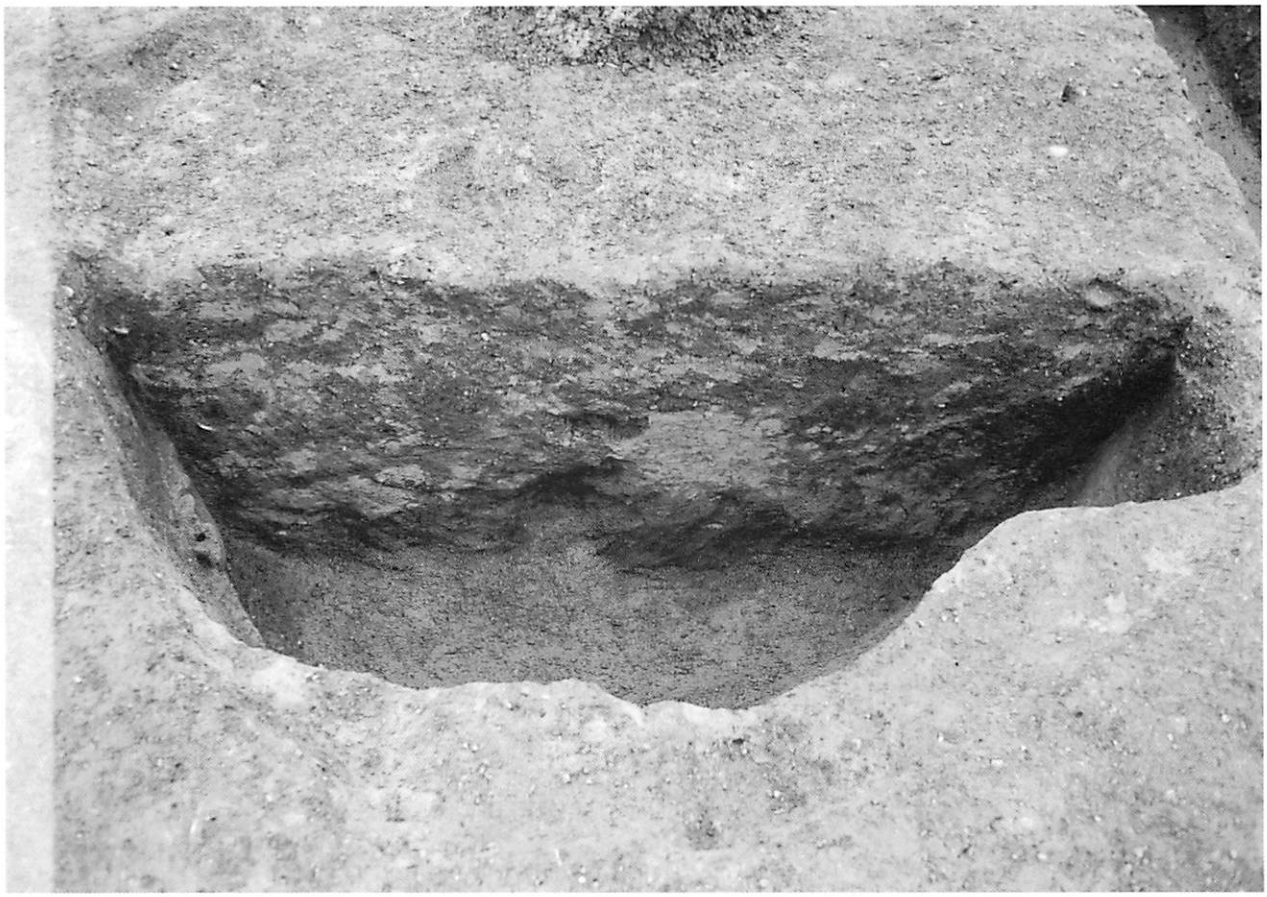
Ｔ－１検出状況（西から）

大型竪穴建物検出状況（南西から）

大型竪穴建物検出状況（南西から）

Ｔ－１調査地全景（西から）

焼壁材出土状況（北から）



ＳＥ－１断面状況（南東から）

ＳＥ－１焼床露頭状況（西から）

Ｔ－２調査地全景（南東から）

Ｔ－２調査地全景（北西から）

ＳＢ－12検出状況（東から）

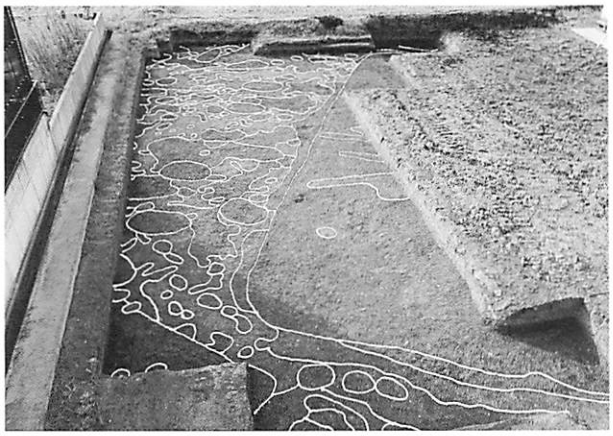
ＳＨ－３検出状況（北西から）

Ｔ－３調査地全景（南東から）

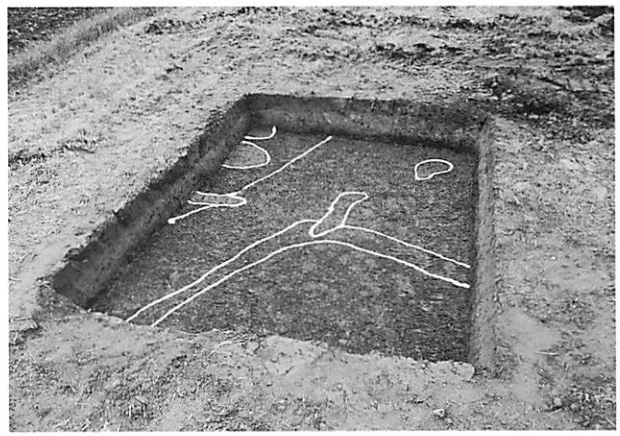
Ｔ－３調査地全景（北東から）

Ｔ－３柱穴検出状況（南から）

Ｔ－３柱穴検出状況（北西から）

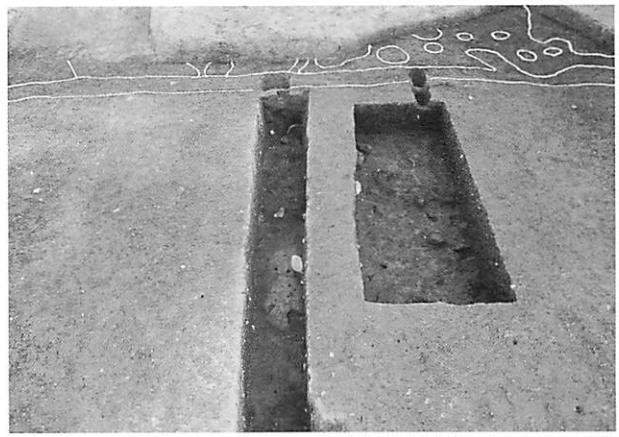


大型建物検出状況（南東から）



大型竪穴建物東隅検出状況（西から）

大型竪穴建物検出状況（南東から）

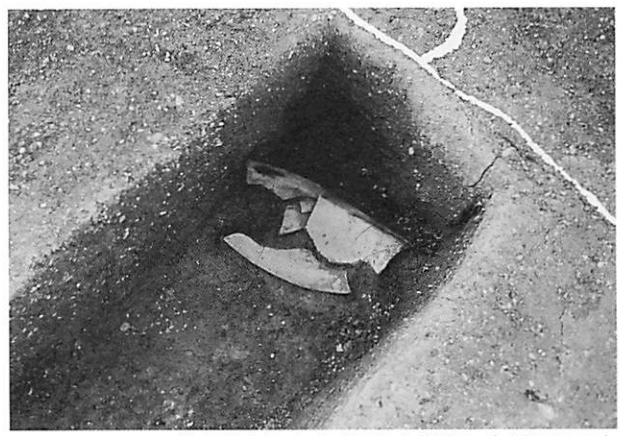


焼床検出状況（北西から）

土器出土状況（北西から）

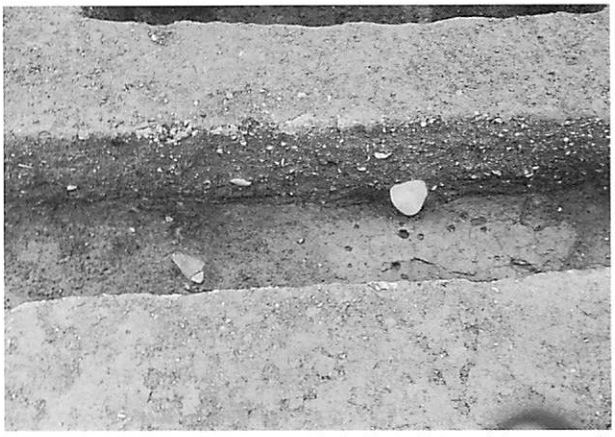
南東辺調査状況（北東から）

南東辺中央土器出土状況（北から）



北西辺中央土器出土状況（南東から）

焼床検出状況（南東から）



焼床検出状況（南西から）

南東辺壁際焼壁材検出状況（南西から）

ＳＥ－１内焼床材出土状況

南東辺焼壁材出土状況（北から）

南東辺焼壁材出土状況（北から）

南東辺焼壁材出土状況（北から）

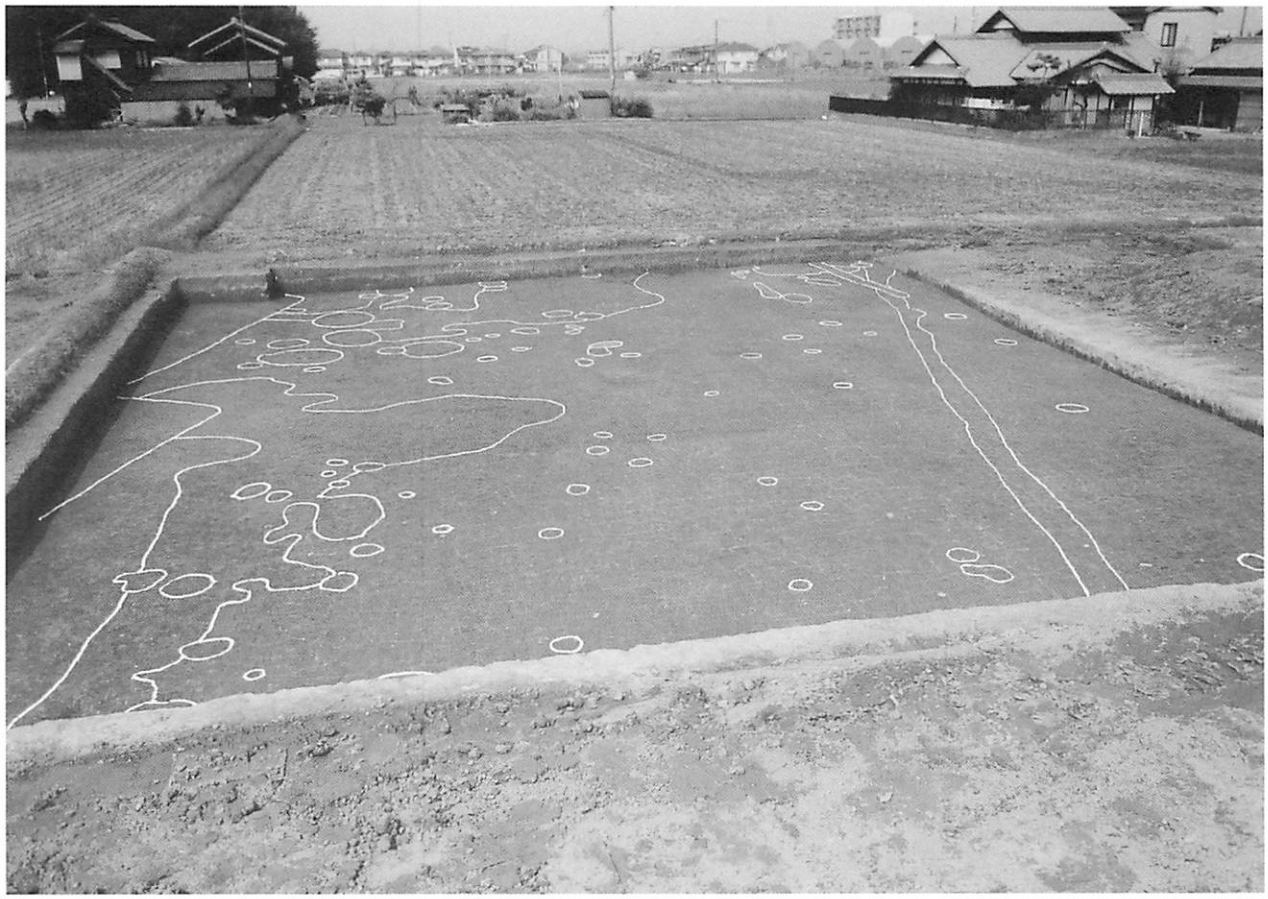
南東辺焼壁材出土状況（西から）

調査地全景（南東から）

調査地全景（西から）

ＳＤ－１検出状況（北から）

遺構検出状況（南東から）



遺構検出状況（南東から）

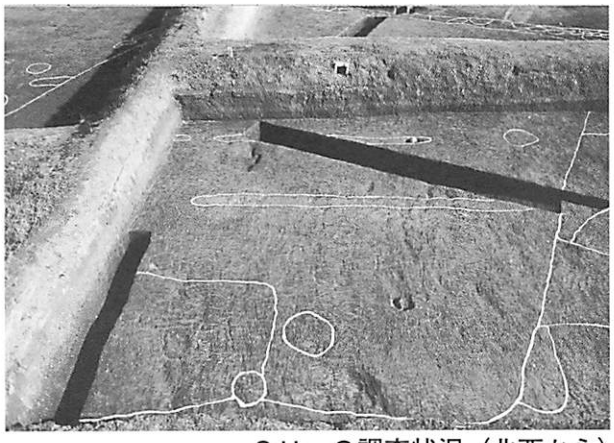
遺構検出状況（南から）

第80・81次調査地全景（南西から）

第80・81次調査地全景（南東から）

第80次調査ＳＤ－１掘削状況（南東から）

ＳＨ－２検出状況（北西から）



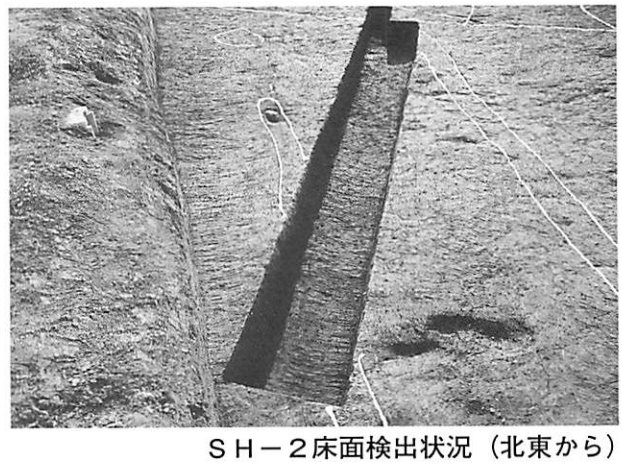
ＳＨ－２調査状況（北西から）

Ｔ－２調査地全景（南から）

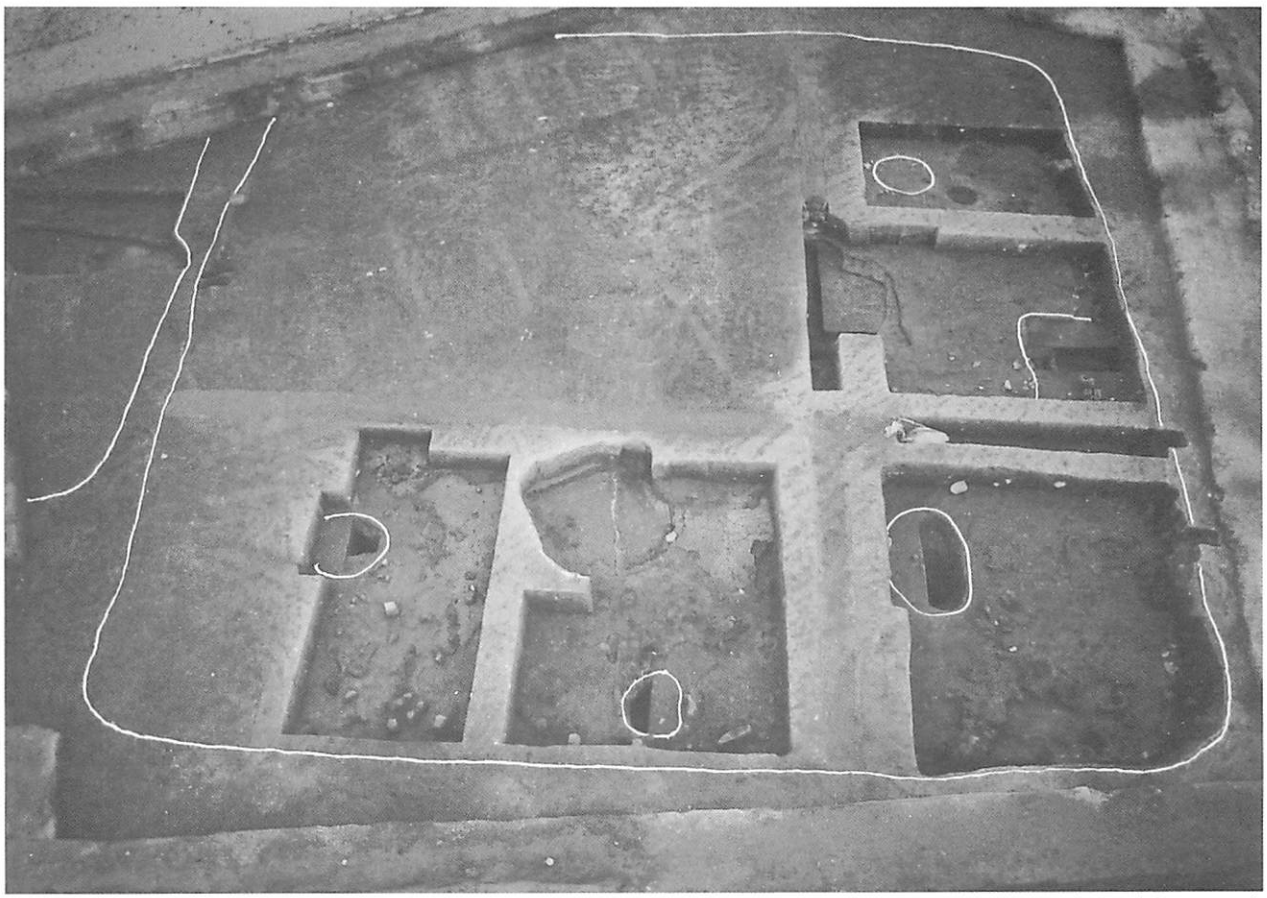
ＳＨ－２全景（南から）

ＳＨ－２調査状況（南から）

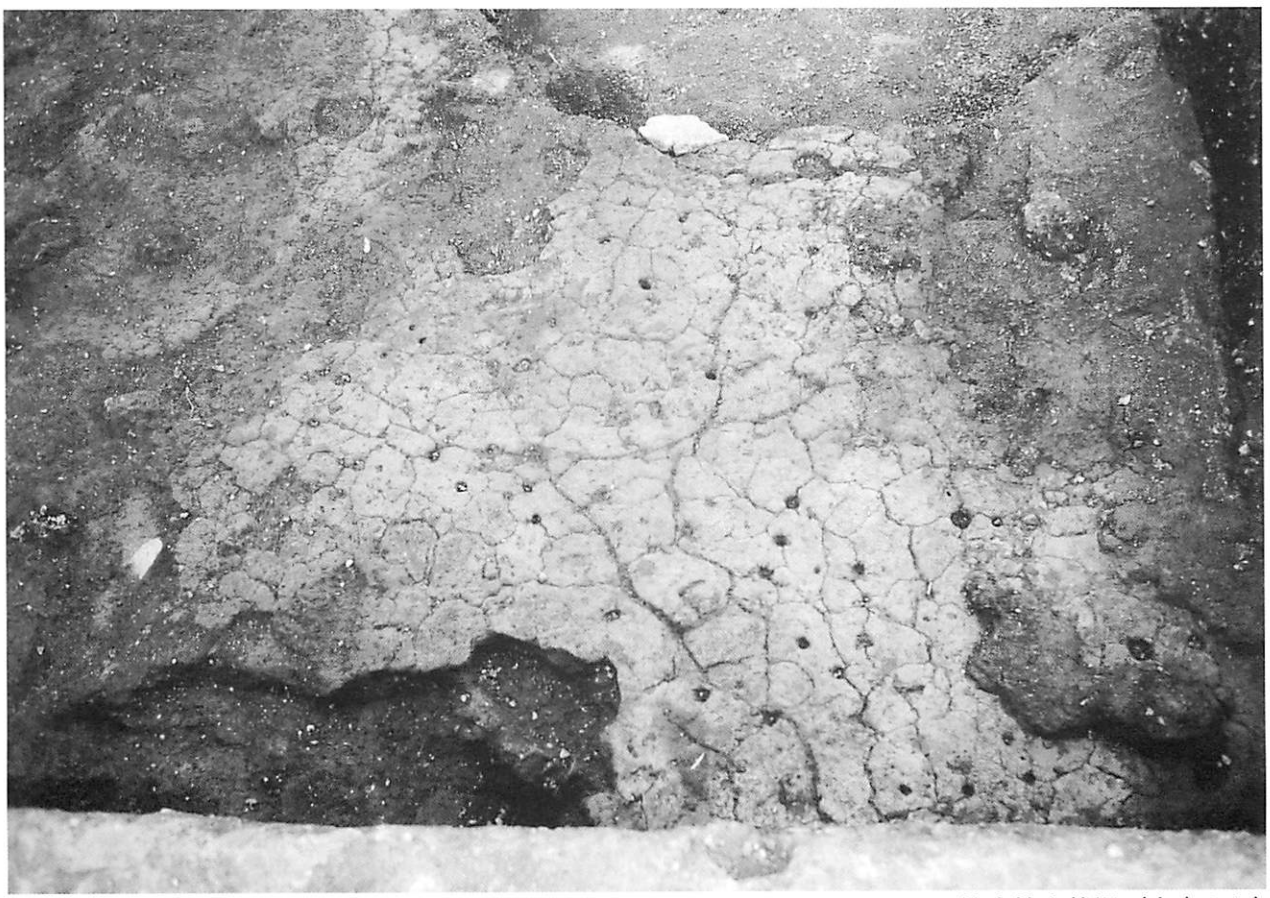
ＳＨ－２調査状況（北西から）



ＳＨ－２床面検出状況（北東から）

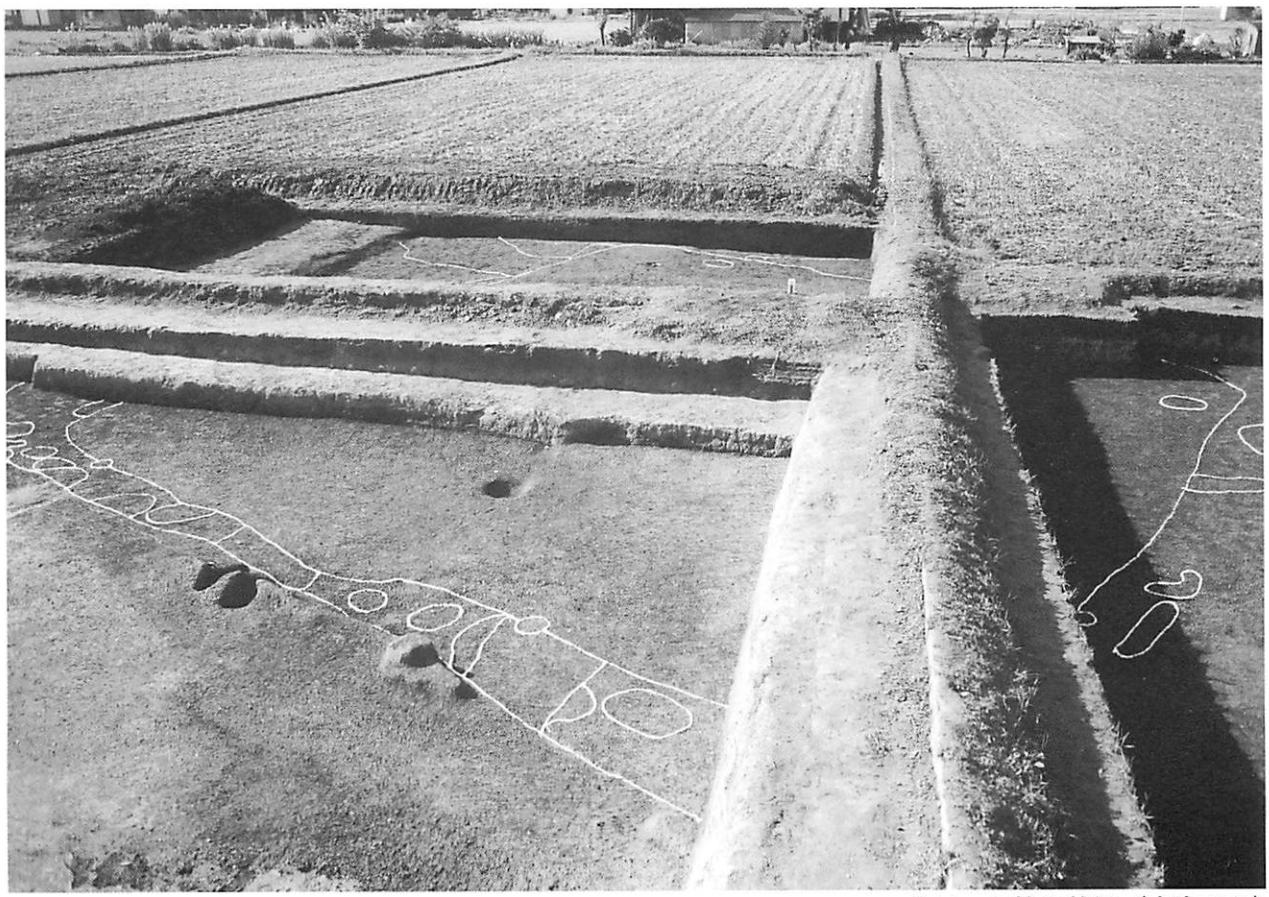


ＳＨ－１全景（南西から）

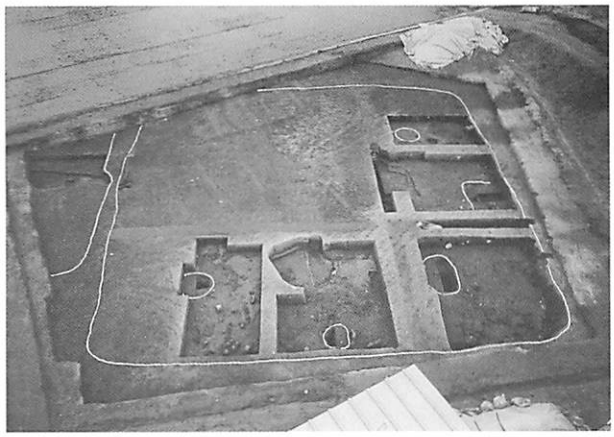


焼床検出状況（南東から）

ＳＨ－１検出状況（東から）



ＳＨ－２検出状況（南東から）



ＳＨ－１全景（南西から）

ＳＨ－１調査状況（南東から）

ＳＨ－１中央断面（東から）

ＳＨ－１東壁断面（北東から）

ＳＨ－１中央断面（東から）

ＳＨ－１東壁側土坑（北東から）

ＳＨ－１東壁側土坑（北東から）

ＳＨ－１東壁側土坑（南東から）

ＳＨ－１　Ｐ－１断面（南東から）

ＳＨ－１　Ｐ－３断面（北西から）

ＳＨ－１　Ｐ－４（北西から）

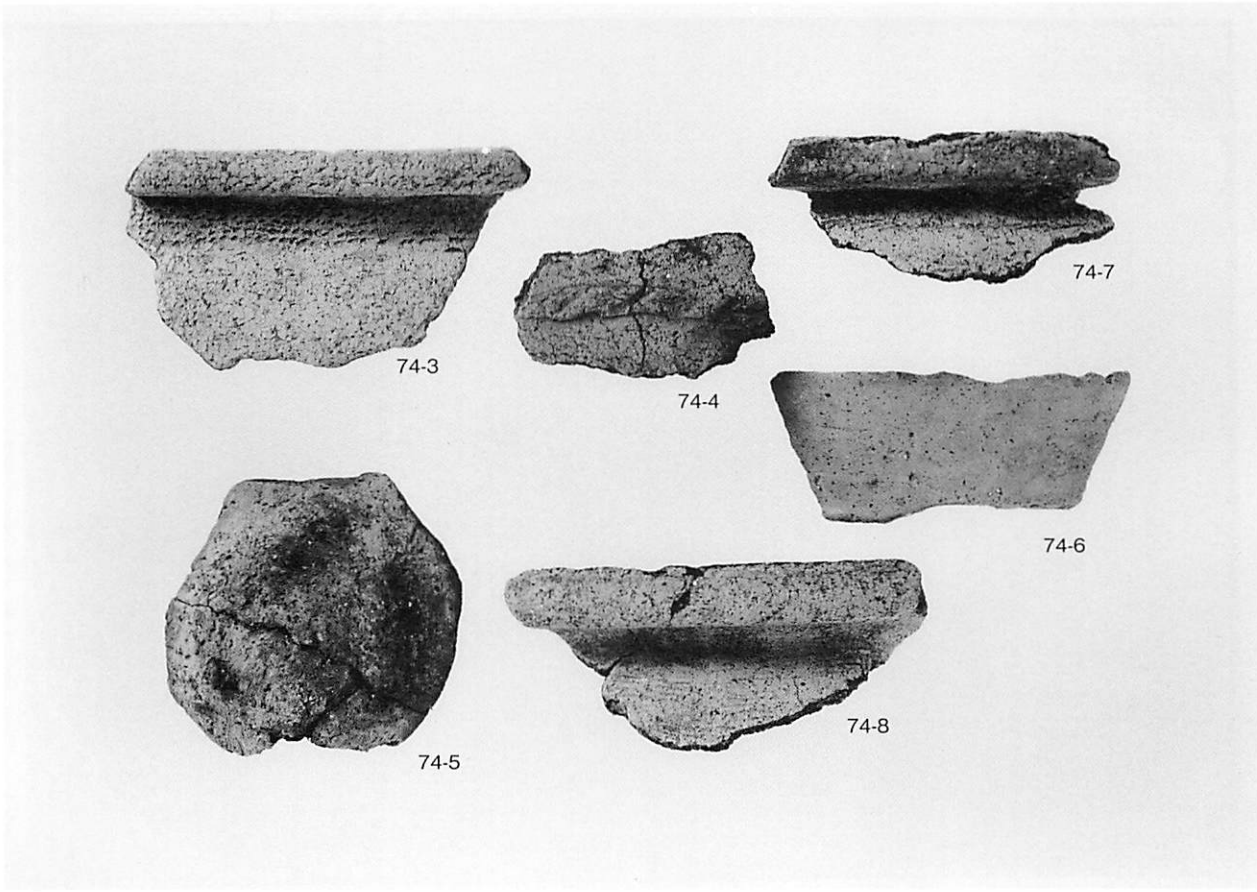
ＳＨ－１　Ｐ－４断面（南東から）

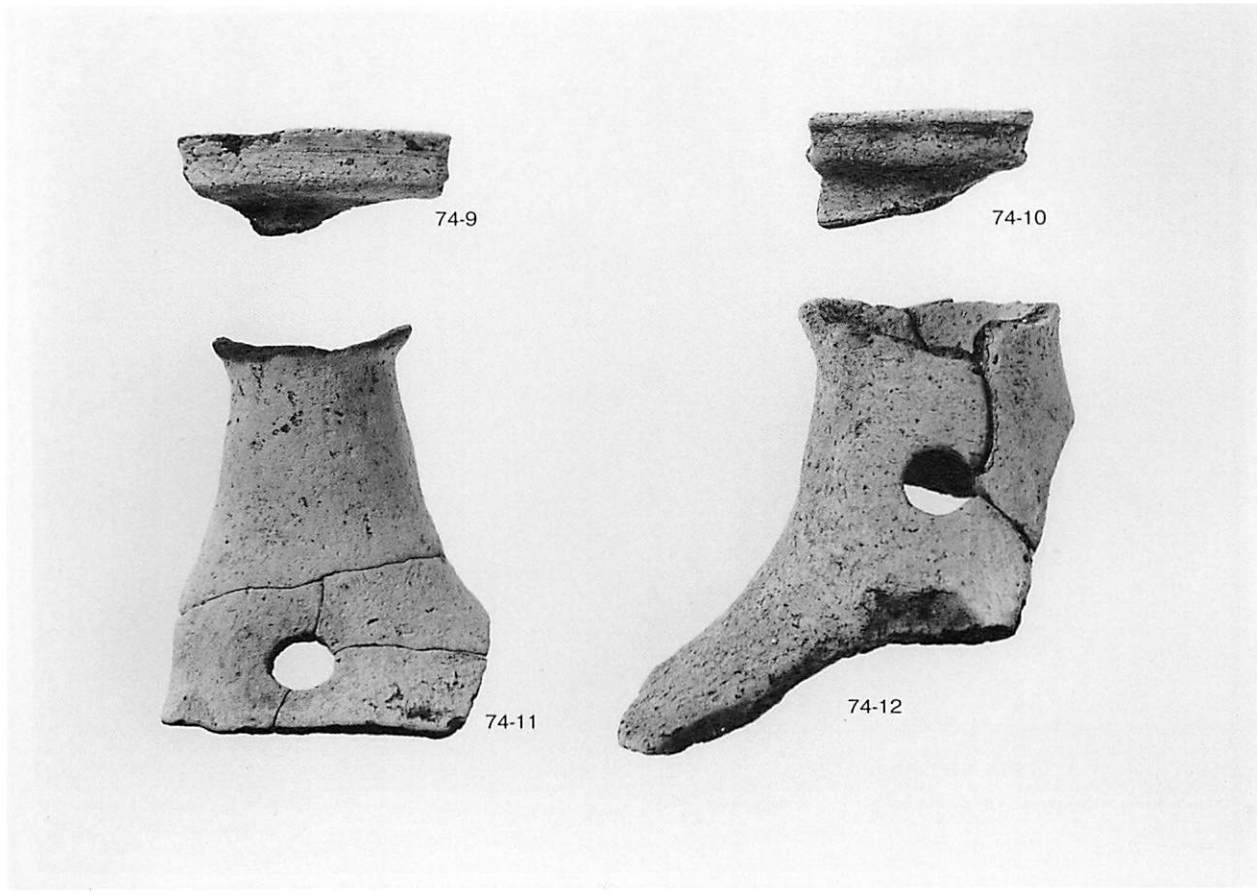
ＳＨ－１焼床検出状況（北東から）

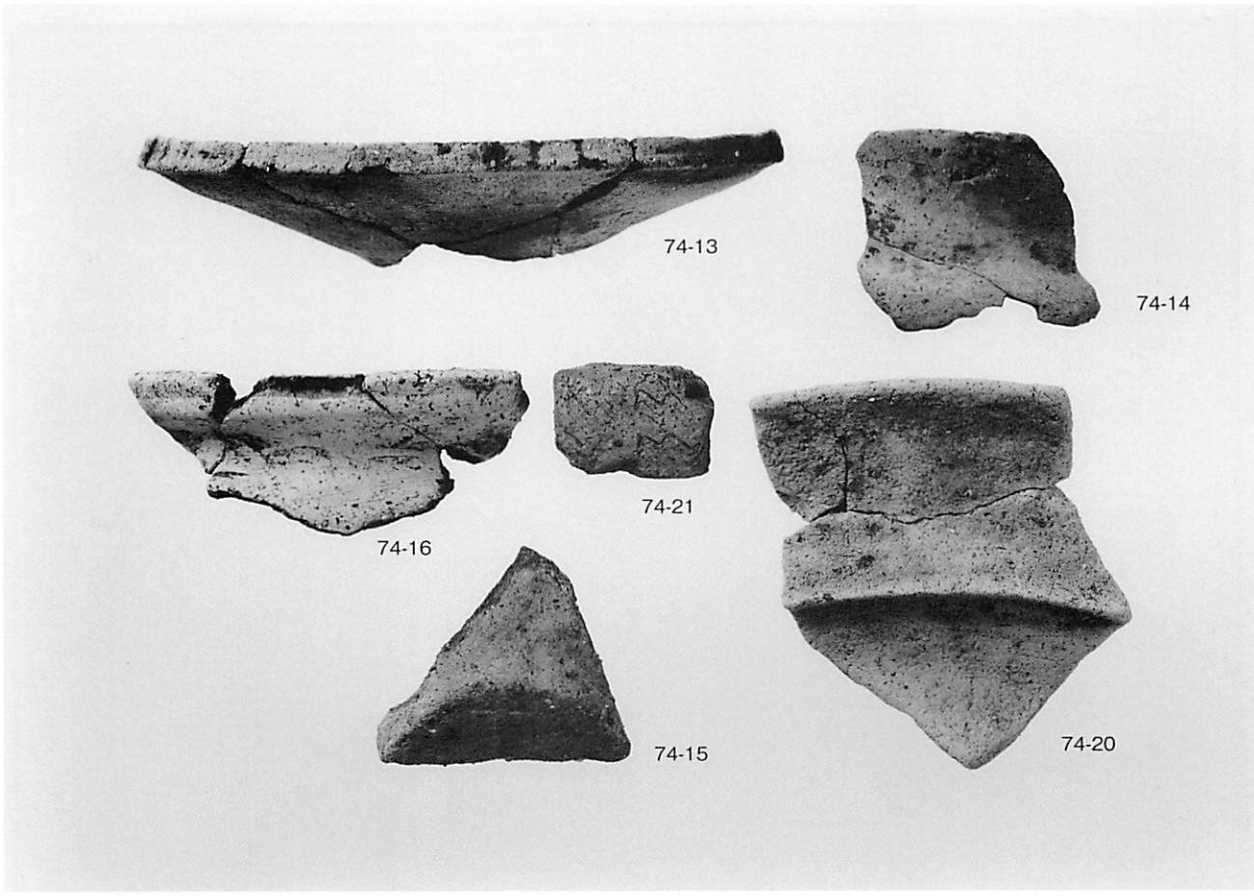
ＳＨ－１焼床検出状況（南から）

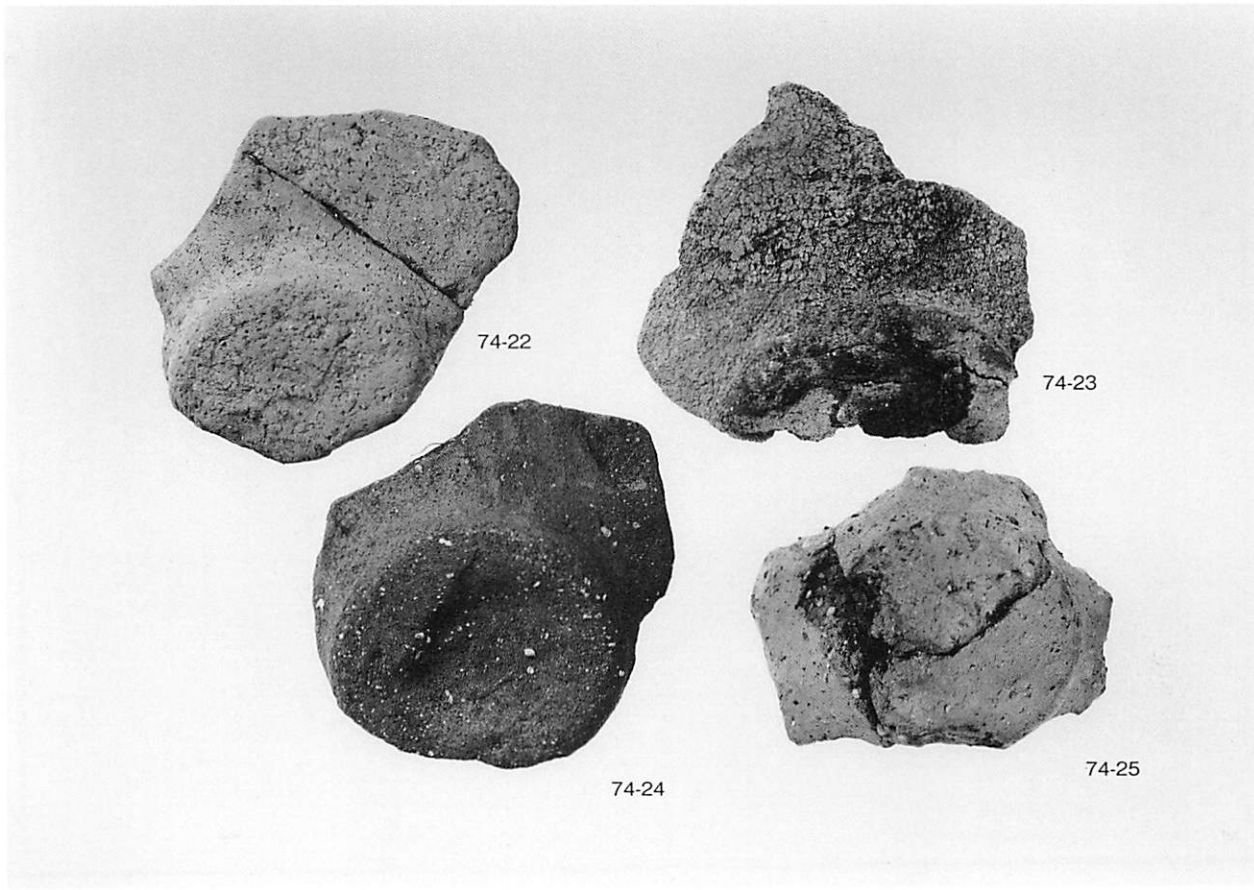
ＳＨ－１焼床検出状況（南西から）

ＳＨ－１焼床検出状況（西から）

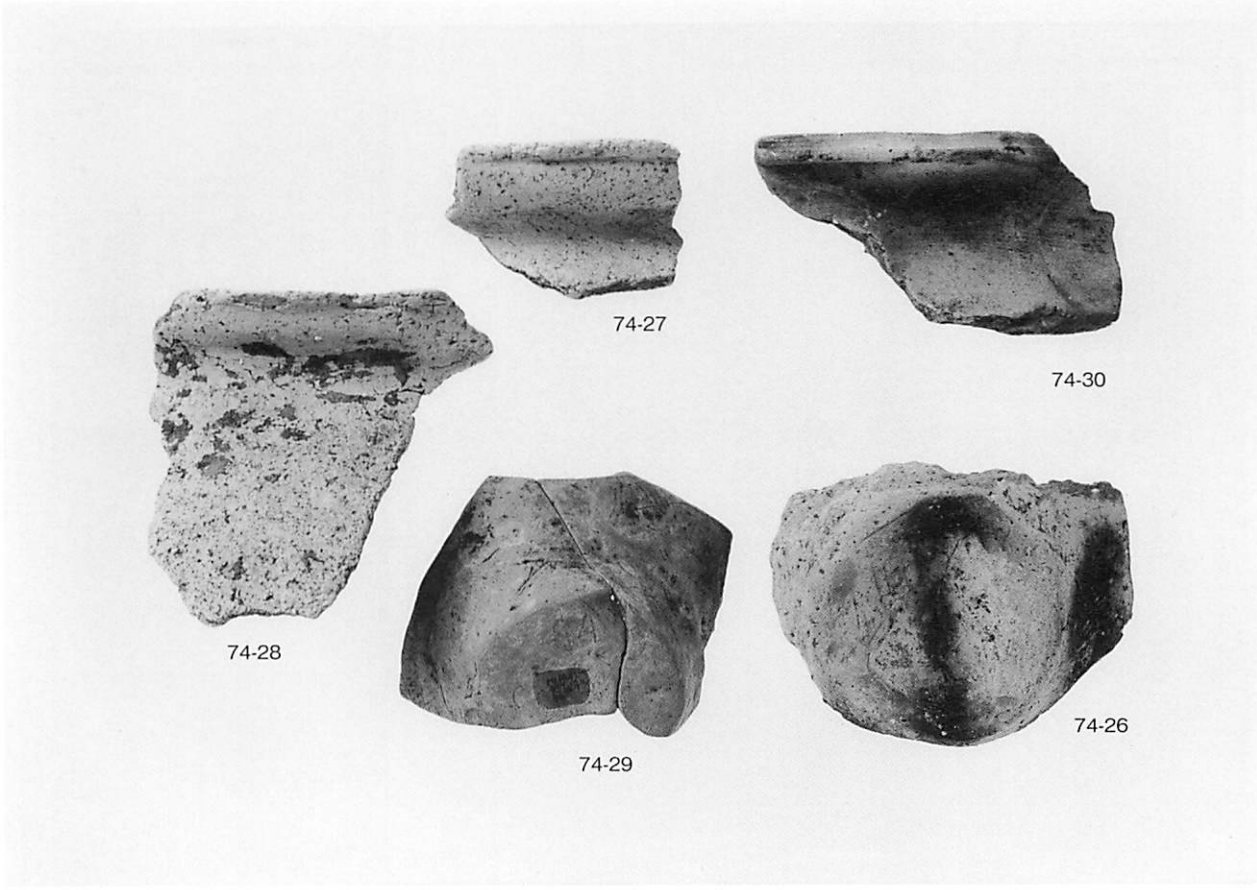

74-3
74-4
74-7
74-6
74-5
74-8

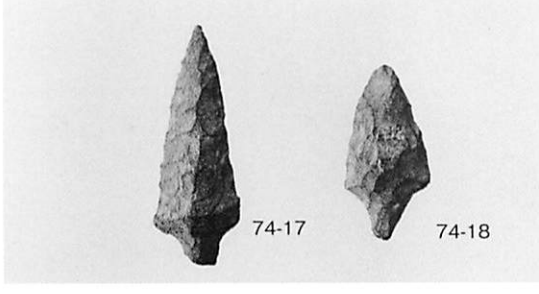

74-9
74-10
74-11
74-12

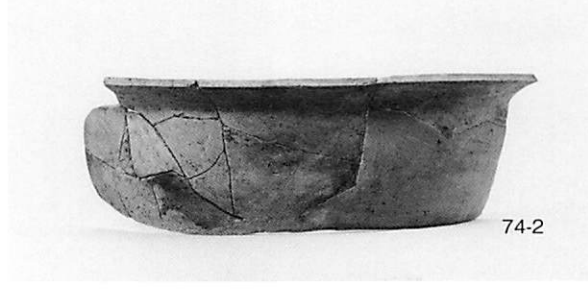

74-13
74-14
74-16
74-21
74-15
74-20

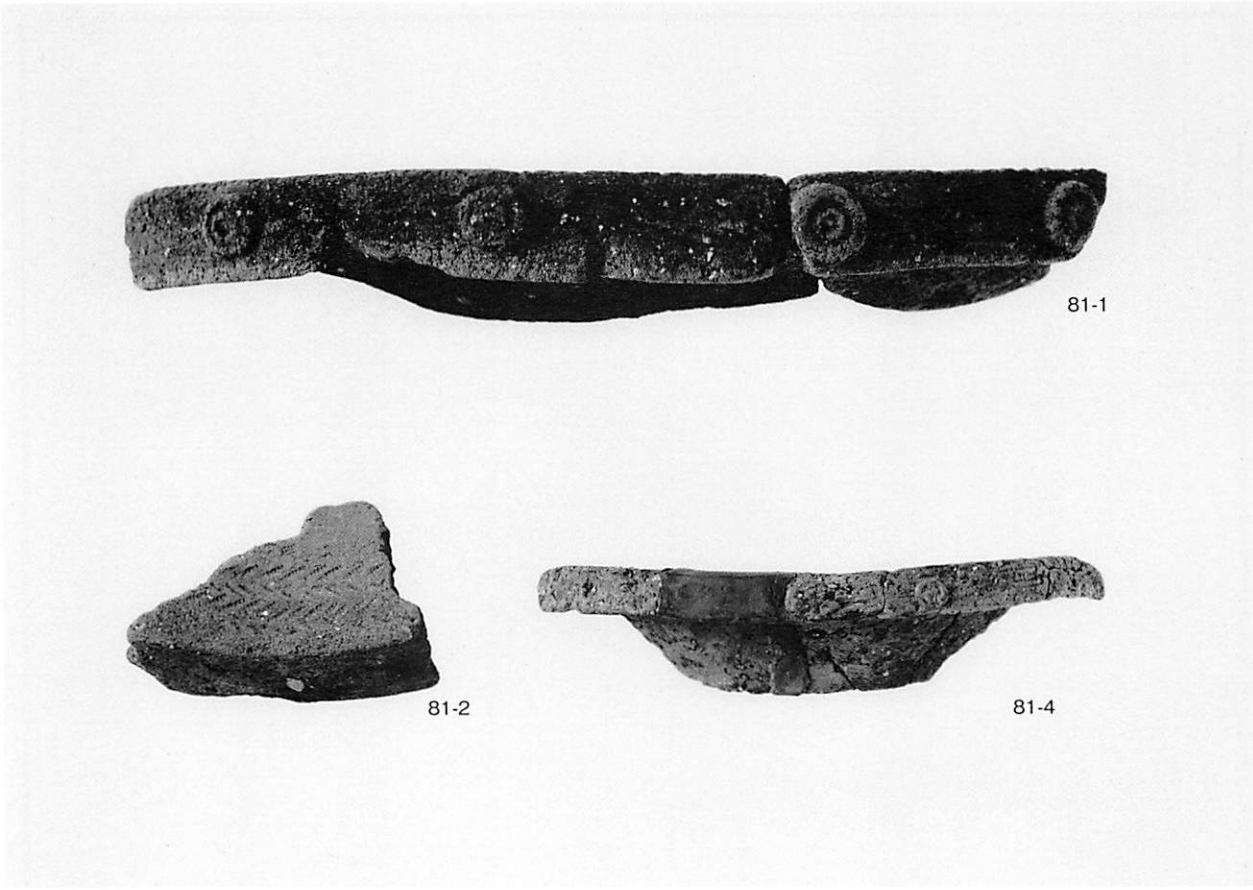

74-22
74-23
74-24
74-25

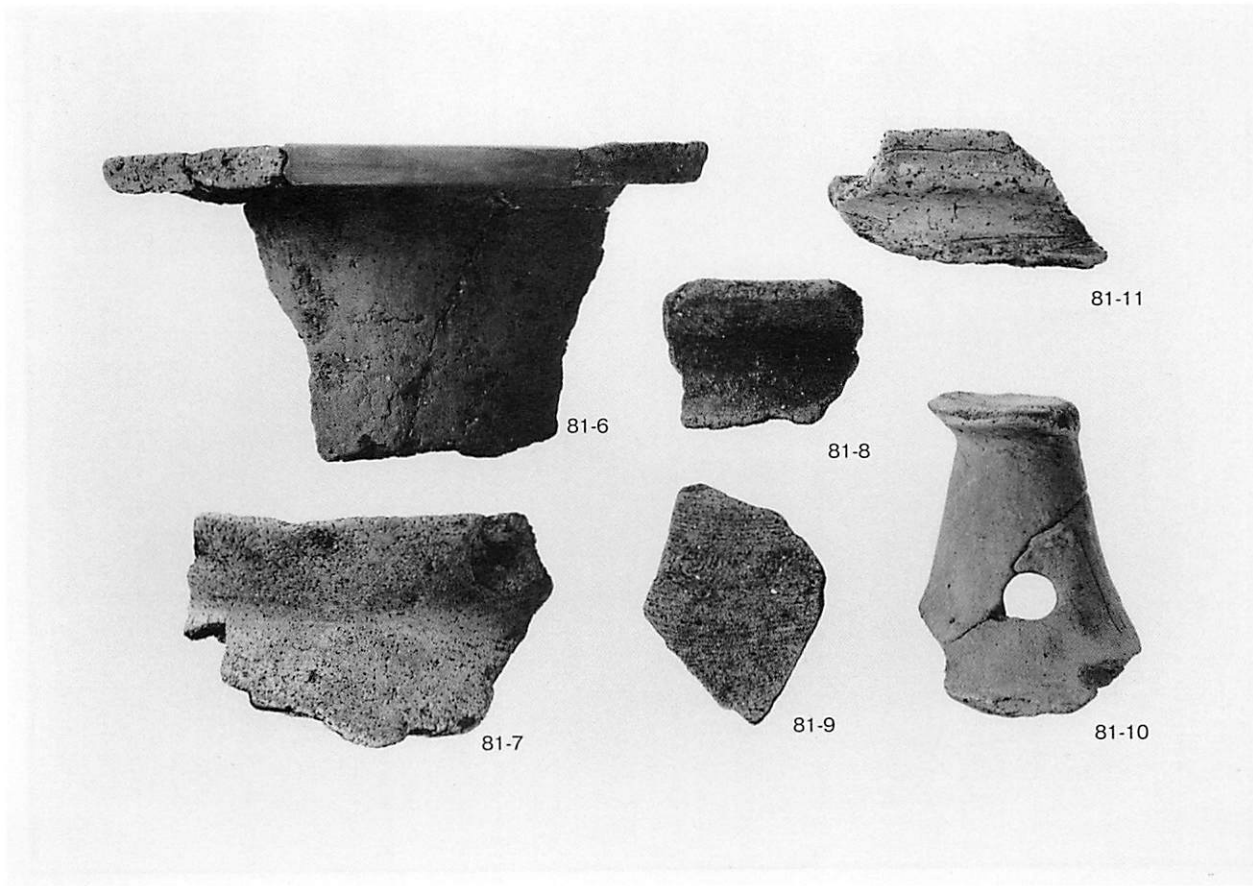
図版24　伊勢遺跡　第74次調査出土遺物写真

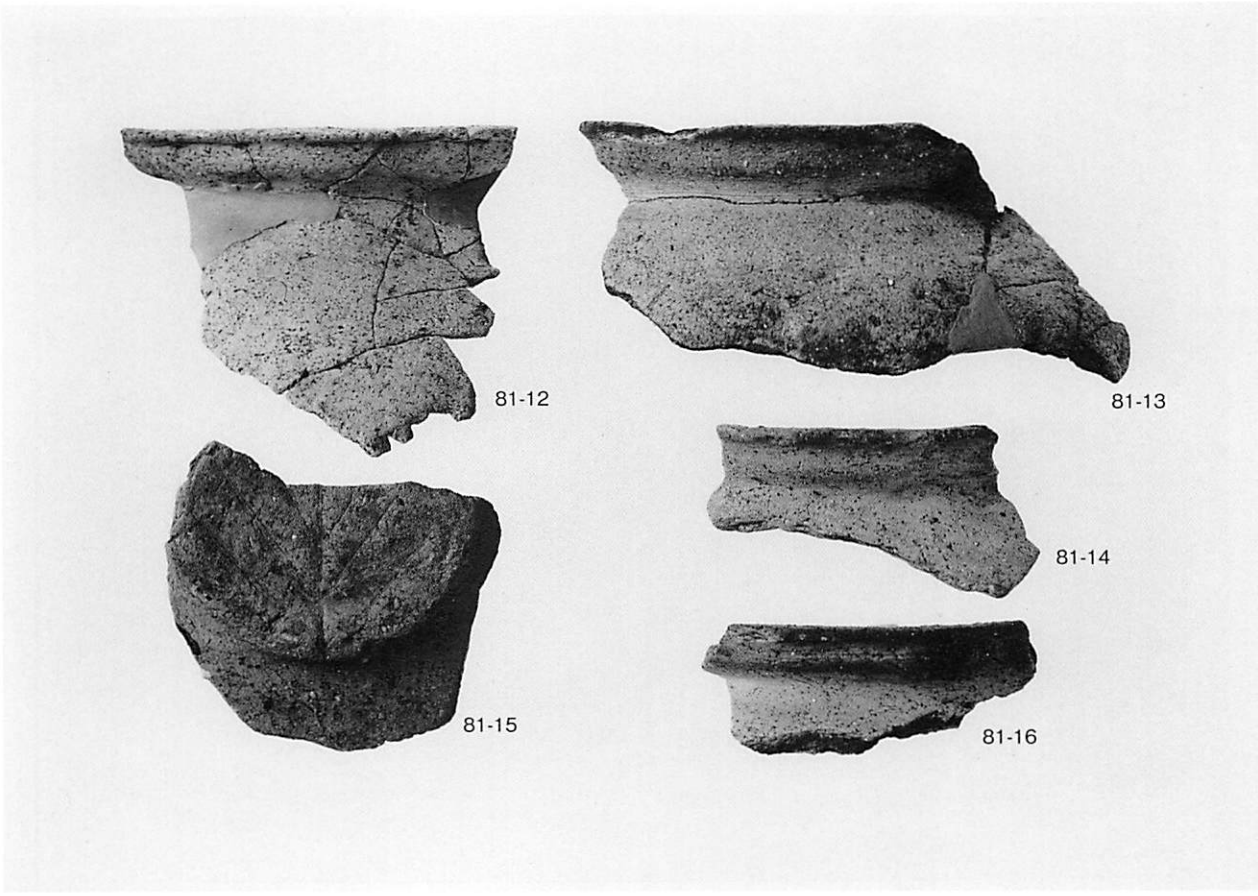







81-1
81-2
81-4

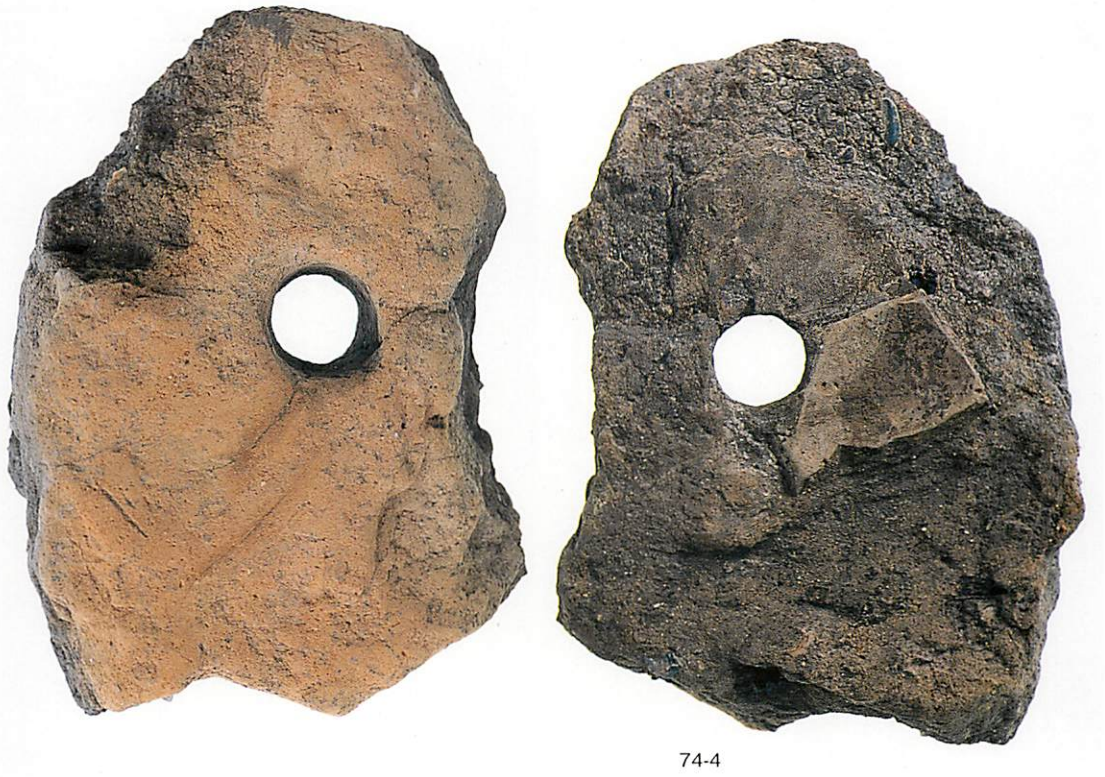

81-6
81-11
81-8
81-7
81-9
81-10


81-12
81-13
81-14
81-15
81-16

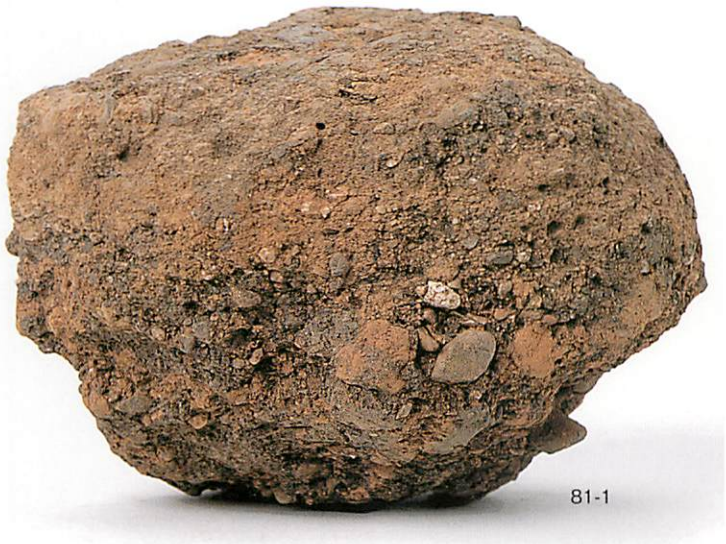
81-3

81-5

図版27　伊勢遺跡　第74・81次調査出土遺物写真（焼床材・焼壁材）



74-4



81-1

74-3

図版28　伊勢遺跡　第74次調査出土遺物写真（焼床材）

74-1

74-1

74-5

74-2

図版30　伊勢遺跡　第74次調査出土遺物写真（焼壁材）

74-2

74-1

報告書抄録

ふりがな	いせいせきかくにんちょうさほうこくしょⅥ
書名	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ
副書名	守山市文化財調査報告書
シリーズ名	守山市文化財調査報告書
編集者名	守山市教育委員会　伴野　幸一
編集機関	守山市教育委員会
所在地	〒524-0021　滋賀県守山市吉身二丁目５番22号　TEL　077 - 582 - 1156
発行年月日	2008年3月26日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
伊勢遺跡74次	守山市阿村町166-1	207	045	35 2 25	135 59 23	平成13年 9月～12月	800	確認調査
伊勢遺跡80次	守山市阿村町168･170	207	045	35 2 25	135 59 23	平成14年 9月～10月	500	確認調査
伊勢遺跡81次	守山市阿村町166-1	207	045	35 2 25	135 59 23	平成14年 10月～ 平成15年	400	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊勢遺跡	集落	弥生時代 後期	土壙・柱穴・溝 竪穴住居	弥生土器	

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ

守山市文化財調査報告書

発　行　日　平成20年（2008）３月
編集・発行　守山市教育委員会
滋賀県守山市吉身二丁目５番22号
印　　刷　株式会社スマイ印刷工業
滋賀県栗東市川辺568番地２